

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT 建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT Society of Architectural Design Education
巻号 / vol.	024
発行日 / Pub. date	2002, 12
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

本館1F-東工大出版物

華 : ka

20020000 24

大岡山 20100720 00014802 (2009)

巻頭:設計教育をめぐる状況

医師、弁護士、会計士などと共に建築家の資格についても、国際的な相互乗り入れの話が進行中であり、農業交渉などとともに2005年までにはWTOの包括的基本合意をめざしている。しかし資格制度の前提として、大学教育や継続教育のシステムについて国際相互承認の必要がある。

工学と一体となっている日本の建築教育の良さを保ちながら、いかに国際的なエンジニア教育(4年)と建築家教育(5年以上で、50%以上を設計教育)に整合させるかが今問われている。

Headline: Architectural Education

The internationalization and mutual transferability of many professional qualifications is one of the objects of a comprehensive WTO agreement projected for 2005. As the basis for every sort of professional qualification, the educational systems of Japanese universities, as well as continuing professional development, will also need to be recognized across national borders and made more or less interchangeable.

It is now urgent issue that schools of architecture in Japan, reshape their programs, while retaining the beneficial aspects of an engineering-oriented tradition, to meet the international requirements of both engineering education (4 years) and architectural education (5 years, with more than 50% studio work).

華[ka]2002年 秋・冬号

[巻頭記事] 鼎談:設計教育をめぐる状況(石山修武+六角鬼丈+仙田満)/

[卒業設計・修士制作展2002]/

[ニュース・投稿]ミュンヘン・東京同時進行デザインスタジオ/ヘルシンキ・東京同時進行デザインスタジオ/

スライド・レクチャー:ニール・ティナーリ、アラン・バーデン/海外建築事情:上原雄史(在オランダ)/書評「坂本一成——日常の詩学」/[INFORMATION]



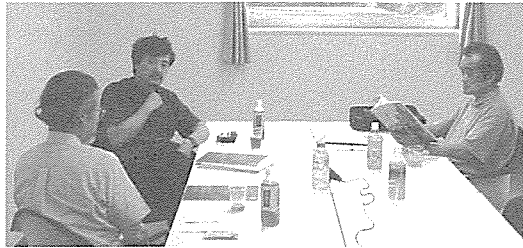
鼎談:設計教育をめぐる状況

Architectural Education

石山修武 [建築家、早稲田大学理工学部教授]—十

六角鬼文 [建築家、東京芸術大学建築科教授]—仙田満 [教授]

Osamu ISHIYAMA (Architect, Waseda University), Kijo ROKKAKU (Architect, Tokyo National University of Fine Arts and Music), Mitsuru SENDA (Professor, Tokyo Institute of Technology)



六角鬼文 [写真中央]

Kijo ROKKAKU

1941年生まれ。65年東京芸術大学美術学部建築科卒業。1979年「雑創の森学園」で吉田五十八賞。1988年「福岡プレイスクール」で福岡市緑の街づくり賞、1991年「東京武道館」で日本建築学会賞。

石山修武 [写真右端]

Osamu ISHIYAMA

1944年生まれ。66年早稲田大学理工学部建築学科卒業。68年同大学院修了。85年「伊豆の長八美術館」で吉田五十八賞、95年「リアスアーク美術館」で日本建築学会賞。96年「ヴェネチア・ビエンナーレ建築展」金獅子賞、2001年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

仙田満 [写真左端]

Mitsuru SENDA

環境建築家・東京工業大学建築学科教授

以下は2002年9月4日[木]に本学百年記念館小会議室で行われた鼎談の模様を、学生編集委員の高橋勇貴[M1]と山口健児[M1]と編集部(担当:井上)がレポート・編集したものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

The current situation of design education in Japan was discussed by three professors of architecture: Osamu ISHIYAMA of Waseda University, Kijo ROKKAKU of the Tokyo National University of Fine Arts and Music, and Mitsuru SENDA of Tokyo Institute of Technology.

Although actual circumstances differ, common problems were examined. Owing to a basic misunderstanding to the effect that architects need only paper and drawing instruments, departments of architecture are nowadays faced with a shortage of studio space. It was also pointed out that the tenure system for staff is not always ideal for the purposes of design education. In fact, a five-year contract basis might be more effective in maintaining a faculty with hands-on experience in design.

Admission by examination to our departments of architecture is a critical issue, yet there is no definite system in place to garner design-oriented talent. At the Tokyo National University of Fine Arts and Music, which includes design skills in its examination, a certain number of gifted students do eventually matriculate. By contrast, Waseda University has long evaluated drawing skills in its entrance examination, but it seems largely unable to identify talented candidates for admission. So an "AO exam" (with an interview and portfolio evaluation), has been adopted recently at Waseda in order to sort and compare prospective talent.

Design studios also encounter pedagogical problems with sketching, drafting, and computer-aided design techniques. In addition, it is essential to propose new themes for design exercises, such as, for example, the renovation or conversion of older buildings. Moreover, mention was made that at present students are hardly trained at all in such skills as how to negotiate with clients.

Although each institution has slightly differing aims, it is necessary to modify these in order to fit the requirements of a society in transition. On the other hand, each school must henceforward endeavor to make its own aims and characteristics clearer, namely through a publication program with emphasis on qualities of architectural education.

Through design studios, the younger generation is nowadays expected to contribute, at both the national and international levels, to the ongoing discussion on design education. Therefore, some further or superior degree of professionalization may in future be required to supplement, or go beyond, the hiring of mere "professional architects" as the main staple of the architectural teaching environment.

設計教育の現状—環境・制度についての問題点

仙田——最近、設計教育の問題が取り沙汰されています。日本でも長い伝統をもった設計教育がありますが、多少無理をしてでも改革をしなければいけないと思います。日本の社会システムは自律的に動けないところがあるので、海外との積極的な交流も含め、様々な影響を受けながら少しずつでも変えていかなければいけないと思います。

六角——日本建築学会(以降、学会)が、そういう改革を先導しているという状況はありますか?

仙田——学会で今考えているのは、施設環境の問題がまず一つ、もう一つが教官の問題です。まずは施設環境についてですが、15年位前に2年間、早稲田大学(以降、早大)の非常勤講師をしていたことがあります。その時、私学の雄であり、あれだけ多くの建築家を輩出している早大にしても、設計教育の施設は、教室やスタジオ、一人当たりの面積についてのいずれにしても非常に不十分だと感じました。

石山——早大は今でも講評室はありますが、製図室がありません。十数年前から大学で教えていますが、2、3年生に製図室はいらなと思います。これはかなり極論ですけど、大学院生くらいにならないと本格的な設計は教えられない。要するに基礎的な人間の素養のようなものが、設計を教える段階にまで育っていません。だから製図室はいらなと思うんです。その代わり、大学院の研究室でのスタジオはかなり充実していて、学生は厚遇されています。でも学生のレベルからすると、早大では3年生で設計製図のレベルがピークに達するようになります。これは世界をあちこち歩いていてもわかりますが、世界でもトップクラスです。4年生や大学院生になると少しずつ下がってくる。アメリカやヨーロッパの学生は徐々に上がってくるんですが、そこが早大の設計教育の問題点だと思います。だから2、3年生には別の形で設計教育をしないとイケないと思います。

六角——ピーク時に製図室がないのは厳しい環境ではないですか?

石山——以前から「製図室が欲しい」と言っていますが、言い始めてから20年位経っているんじゃないですかね(笑)。だからみんな家でやってきます。それで通用してしまっています。製図室の話をする、ローマ大学やベネチア工科大学にも製図室はないですよ。教室すらない。

仙田——イタリアは学生の数が多いいんですよ。ヨーロッパの中でも少し違いますよね。

石山——でも卒業するのは80人位で、その他の学生は全部落第です。それで花屋になったり、レストランを営んだりしている。花屋の主人が長々とルネサンス論を語ったりしますよ。

六角——彼等は卒業できていないんでしょ?

仙田——卒業できても、ガイドをやったりしている人もいます。イタリアでは建築は基礎学問ですから。

仙田——一方で東京芸術大学(以降、芸大)ではどうですか?

六角——非常に少ない面積です。絵画、彫刻、工芸など他学科は圧倒的に一人当たりの占有面積が大きい。いろいろな大学の中でも芸大は特殊だと思いますが、学内で他学科に面積をとられ、追いやられているという感があります。建築科は本来の面積の4割程度しか確保されていないんです。それで今、面積を獲得するために内部で格闘をしています。結局芸大の場合、建築は紙だけで作業するからスペースはいらなという歴史的に思われてしまっていることが問題です。それは工学系の大学でも一緒ではないですか?

仙田——昔、日本大学芸術学部で非常勤講師をしていたのですが、芸術系の大学のいい点は木工室など、実際にものをつくることのできる工房的なスペースがありますよね。工学系の大学にこのようなスパー



スがないことは非常に問題です。建築学科が優秀な人材を輩出するにはスペースと環境が必要だということを宣伝しないとイケません。これは大学だけの活動では難しいから、学会でも後押ししなければと思います。現に中国の大学では急速に施設環境を拡充しています。日本に来る中国や台湾の留学生が減って、アメリカやヨーロッパを選ぶのは、施設環境の問題もあるのではないかと思います。日本では計画的に施設を拡充するための社会システムがよくありません。近く国立大学は独立行政法人化をしますが、現在文部科学省が管理している大学の施設部を大学が取り込むべきだと思います。そうしないと大学キャンパスの独自性は保てない。医学部の付属病院のように、それを教官が運営すればよいのではないのでしょうか。

設計教育の基礎—人材の確保と才能の発掘

仙田—優秀な人材を輩出するためには、スペースも重要ですが、優秀な才能を秘めた学生を獲得し、それをいかに効果的に表出させるかということも重要ではないかと思います。まずは、最初の選抜過程として入試制度の問題も大きいと考えられますが、いかがでしょうか。

石山—早大の場合は私学だから入試にしても比較的自由に出来るんですが、建築学科には建築家に向いている学生が本当に少ないと感じています。中には建築に全く向いていないと感じる人も入ってきます。去年からAO入試という面接とポートフォリオだけで決める入試制度を始めて、20人位それで採りました。まだ始まったばかりなので影響は分かりませんが、そのような試みもしています。

六角—芸大では、入試でどういう問題を出すかという傾向は教官の間でもかなり議論していますが、潜在性とか適応性等を入学時に見分けるのは相当難しい。言い方はよくないですが、できていないに等しい。フルイにかかった中にうまく兼ね備えた人がたまたまいるとい

う状況になっています。

石山—早大は入試にデッサンがありますが、そこでエスキースをさせる訳です。これがかかなり重要な評価で、それでなんとか逸材を見つけようとしています。この絵を描く人が絶対欲しい、と思うのは1500人中約10人程ですが、そういう人は他の科目の点が低いから実際はあまり合格できません。必死で建築家になりそうな人を探ろうとするけれどなかなか採れない。それが一番問題だと感じています。

仙田—東京工業大学(以降、東工大)は第6類という建設系で入学試験をしています。私はこれでよいと思っています。2年生になるときに建築学科へ入学する学生は、第6類でも上位にいる学生です。また、大学院では設計のエスキースの試験も行っています。

六角—芸大の学生は入学した時に、ものをつくる感覚を養うトレーニングをある程度受けてきています。基礎的な素養がついているから、むしろ1年生で一番アクセントのある教育をしてしまいます。2年、3年生になると、外部の非常勤講師に来ていただいて、教える側にも個性のあるスタジオ的な課題にしています。

石山—設計製図という課題の問題もあります。我々の頃は新築世代だから、美術館や学校、事務所などみんな新築なんですよ。これからは美術館の新築などはほとんどないでしょうね。

仙田—課題設定でも、リノベーションやコンバージョンという課題が多くなっています。そういう意味では最近、学会でも“地球環境建築”ということも掲げていますが、学ぶ事が多くて教官がついていけません。

石山—早大では、教官一人が担当する学生の数が多いんです。しかも今、製図教室がないので、毎日みることはできませんが、こまめにクリティックして全員を1週間でみるようにしています。以前、安藤忠雄さんが、東京大学(以降、東大)は線一本しか描いてなくても全員みないとイケない。早大のほうが実利的でいいと仰っていました。

		東京芸術大学	①22 ②17 ③8 ④5	早稲田大学	①245 ②128 ③18 ④4	東京工業大学	①55 ②39 ③20 ④5
学部	1	製図室あり	学科所属*1 「4つの住宅の空間構成を探る」 「カレ邸、ファンズワース邸、落水荘、サヴォア邸から選択 「すわる〜家具」 「Toride ARTFest 200X」 「Cubic Hut」	製図室あり	学科所属*1 「階段がある理工キャンパス内の建築風景を鉛筆でデッサンする」 「私のプロフィール」 「簡単な立方体を様々な図法で表現する」 「コンピュータで立体を表現する」 「複雑な立方体をコンピュータで設計する」 「簡単な立方体を設計して模型を作成する」 「建築をモチーフとした新しいコンピュータ・ゲームの提案」	製図室あり	学科所属*1 「最小限住宅」 「レース(増沢洵自邸) 増築(10坪・山口文象自邸、前田興男自邸、山田守自邸、清家清自邸、直方体の森、猪俣邸、増沢洵自邸から選択) 「仕事場のある住居」
	2	製図室あり	「住宅1」 「私箱」 「私の理想の家」	製図室あり	「東求堂を描く」 「古典主義建築平面図」 「スミツクモノ」 「始源的住居」 「空と地上の間の家」 「上を向いて住まう」	製図室あり	「ふだんの居場所を考える」—学生会館 「都市と住居」—都市型集合住宅
	3	製図室あり	「小学校」 「大スピン構造—橋の設計~河川に架かる人道橋の設計」	製図室あり	「3~5世帯のための集合住宅」	製図室あり	「保育園/幼稚園」 「マルチ・シネマ・コンプレックス」 「エコロジカル住宅」
	4	製図室あり	「現代美術館」 「Housing Complex」	製図室あり	「金山康善記念館」 「ハイパー・スクール/拡張される学校」	製図室あり	「ヒルサイドテラス第七期計画」 「自然を育む建築」 「夢の島公園の中に建つ多目的スポーツ施設」 「CULTURAL RETAIL SPACE」 「コンバージョン」 「屋上建築」
大学院	1	製図室あり	「状態をデザインすること~8m×8m×6m」 「次なる時代の宣教師達の住まい」	製図室あり	「都市の再生」 「ドラキュラの家 part2」 「小事務所ビル計画」	製図室あり	「希望者選択」 「一課題選択」 「一課題選択」
	2	製図室あり	「陶芸創作工房と生活施設」 「Passage ~とおりぬける場所」 「アーティストのためのゲストハウス」 「研究学園都市」 卒業制作	製図室あり	「卒業論文*3」 卒業制作	製図室あり	「研究室所属」 卒業論文 卒業制作
大学院	1	製図室あり	「情報メディアラボセンター」 「職人データベースセンター」 「新潟県川西町中心部のまちづくりへの提案」 「新宿駅東口周辺のまちづくりのデザイン」	製図室あり	「情報メディアラボセンター」 「職人データベースセンター」 「新潟県川西町中心部のまちづくりへの提案」 「新宿駅東口周辺のまちづくりのデザイン」	製図室あり	「研究室所属」 「e.home 2.6×2.6×2.6*6」 「住宅」 「修士論文*3」 「修士制作」

平成13年度設計製図(製図部)課題一覧表

*1: 芸大・早大は入学時に学科選択、東工大は2年時に学科所属 *2: 1~4年生共同使用、主に講評会用スペース *3: どちらか一方を選択 *4: 卒業設計時のB0版製図板一人2台貸出 *5: グループ課題 *6: 国際交流授業(詳細は本誌P.24、25)

仙田——東大で設計製図を教えていた時は、みてもらいたい学生が名前を書いてその人に対してエスキースチェックをしました。最終講評の時に初めて持ってきた学生もいました。それも問題だと思います。

六角——東大は一人ずつ全員に対して講評するのが原則のようですが、芸大では課題単位で行うものと全体で行うものもあって、全体で行う講評は選抜者です。他大学には申し訳ないくらい学生はのんびりしているように思います。

仙田——東工大も原則的には全員講評です。僕もいろいろな大学で設計製図を教えています。一人で課題をみるのは20人位が限度ではないかと思っています。だから、名古屋工大にいた時も、学生が65人いたから、非常勤講師3人に参加していただき、学生を三つのグループに分けて課題を出しました。東工大でも20人位でグループを分けています。

石山——そういう課題は一年に何課題ぐらい出しますか？

仙田——5課題ぐらいです。3年後期になると選択科目になっているから、履修人数がぐっと減るんです。それを3人で教えるから、教官一人当りにすると10人ほどになります。

六角——スタジオみたいに学生が選択して取り組むわけですね。

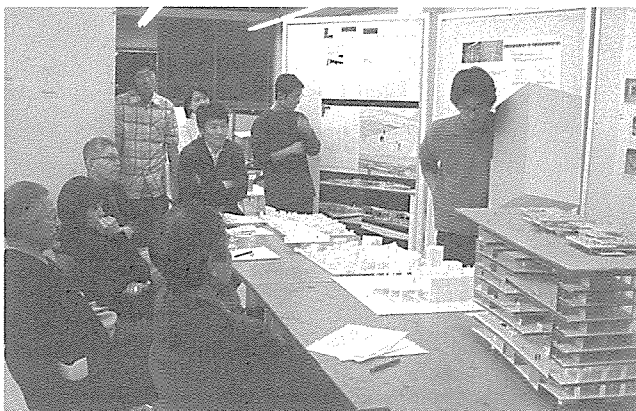
仙田——中間講評と最終講評は全課題を全ての先生と一緒に講評しますが、それ以外は各グループでエスキースチェックをします。ここ数年は選択する学生が減ってきて、非常勤の先生はやりやすいと仰っています。非常勤講師も造園家の宮城俊作先生や構造家の金箱温春先生にお願いするなど、バリエーションをつけています。

石山——設計製図では「施主」という社会的な様々な人の関係を教えることが難しい。やはり、我々の仕事は相手がいて初めて成立するもので、それが教えられません。授業でコルビュジェのサヴォア邸やミースのファンズワース邸などを教えています。学生がそういう家に住んでいません。「僕は〇〇ホームに住んでいるけど、先生の言うコルビュジェのサヴォア邸の本当のよさが分からない」と言うんです。もともと学生がよい環境に住んでいないために、我々の教えている建築というものと彼らの捉える建築とはギャップがあります。ところで、設計製図でコンピューターの問題って難しいですよ。

六角——以前東大に教えにいった時は、まず手描きで描かせないとイケないと、コンピューター禁止にしました。

石山——恥をさらすようですが、今年3年生の課題で評価Fを出しました。Fというのは必修ですから落第です。どういうFかというところ、コピーなんです。コンピューターを使うからそれなりに巧妙ですが、それが十数人出ました。コピーがイケないという古典的価値観について、こちらが理論武装しないとイケなくなっています。

仙田——一般社会でのコンペでもそういうところはありますよ。結局建



東京工業大学設計製図第四講評会の模様

築ってというのは現実の世界だから、コンピューター上での話はなんとなく信用できないんです。

石山——でも現実社会はどんどんコンピューター化しているから、どこかで受け入れないとしょうがないんじゃないですか？

六角——コピーかどうかというのは難しいですよ。実は教育自体がコピーかもしれないですね。

大学院における設計教育——大学が輩出すべき人材とは

石山——これからは大学院教育ですよ。私は近いうちに大学院が流動化すると思っています。どんどん流動化して、大学院教育の競争になる。各大学の個性がはっきりしないとどうにもならなくなる。そんな時代があと5年位で来るのではないかと思います。実際、設計教育で4年制ってというのは、世界中で日本だけです。7年制にして、高学年に集中して教えるということが必要だと思います。低学年では一般教養を教えればいい。

仙田——しかし様々な状況から日本では、学部は4年制の教育システムのままでいかざるを得ないと思います。問題は大学院教育で、もう少しプロフェッショナルを意識した教育をしなければいけないのではないかと感じています。

六角——芸大は大学院に進学する割合が低いんです。1年生から4年生まで設計製図をやると飽きてしまうのか、多くの学生が外に出ます。ひどい時は3分の1も大学院に進まない。そうなるとほとんど他大学の学生で占められることになります。4年間理論系にいたので今度は歴史系に進みたいという学生、他大学に進みたいという学生、海外へ留学したい学生など様々ですが、就職はほとんどしないのが現状です。実際のところ、東大や東工大をはじめ、他大学の大学院は狭き門なんですよ。

仙田——東工大では、もっと建築家教育に特化した大学院をつくるべきだと思っています。それは2年間でなく3年間とし、1年くらいは留学したりアトリエでインターンシップをやる。学部4年間と大学院3年間計7年間のカリキュラムでいいと思います。ところで早大で来年度から始まる予定の6年制では、いつ研究室に所属するんですか？

石山——3年生の時です。今でも3年生の後期でコースと研究室をほぼ決めてしまいます。早大の場合は1年生で入ってくる時は、ほとんど全員が設計希望です。2年生になると少し減って、3年生になると半分ぐらいになります。

仙田——そのなかでデザインをやらせたい、と思わせる学生はどのくらいいますか？

石山——180人中15人くらいです。この人達は放っておいてもいい学生です。そういう学生が最近、急速に減ってきました。私の研究室では大学院生が一学年10人もいます。僕は自分のやり方を徹底的に教えるんですが、教えられるのは3人くらいで、問題はその他の学生をどうするかということです。だから、大部屋方式にしようかとも思っています。大学院も1軍2軍に分けてしまう。アメリカなんかは結構ドラスティックに分けているようです。先生に所属しないという大学院生をつくらないと、私たちが殺されてしまいますよ。

六角——または横断型でもいいんじゃないか。入ってみたもののやっぱり合わない、という人は隣の研究室にいけばいいと思います。

石山——もともと18歳、19歳で建築に向いているかどうかなんて、自分で決められないでしょう。だいたい23歳か24歳になって、やっぱり向いてなかったと思うわけですから。それから海外の大学と比べると、日本の大学は学生の年齢差がありません。海外だと兵役等の理

由で同学年でも年齢がかなり違う。40歳の人がいれば20歳の人もいて、自然にミニ社会みたいなものができている。これは活気があって非常にいいと思います。

六角——早大は人数が多いから学年の上下がうまく混じり合わないんでしょうね。その点、芸大の場合は人数が少ないから年齢の違う学生がうまく混ざり、ミニ社会が成り立ちやすい状況です。逆にそれが馴れ合いを生む要因になっている気もしますが。

石山——やはり日本の教育システムは大量生産、大量消費社会をどうやってフォローしていくかというアメリカ型です。でも、今となってはアメリカ型の産業構造がダメになっていますよね。だから今度は非常にだらしのない、でもずるずる楽しそうな、ラテン系みたいなものにシフトしていかないといけない。そうしないと本質的な問題は解決できないと思います。芸大は、就職しないで一生遊んで暮らすとか(笑)。

仙田——我々の頃と違って、情報化社会だし、大学院を出たら就職しなくても建築家として活動できる。それだけの情報量があるのではないのでしょうか。ところで、芸大ではデザイン教育以外の建築家教育は行っていますか？例えば仕事をどう組み立てるとか、施主とどのように関係を築いていくとか？

六角——全くやっていません。現実、今の学生はそういうことに興味を持ってない。あまり素直に建築をつくらないように思えます。ものができてくる周りの諸条件を操作して、操作の結果建築ができると主張してきます。むしろその操作法のほうに興味がある。それがうまく建築に結びつく学生と、単なるファッションになってしまう学生がいます。

石山——世界的潮流で、建築離れが進んでいる。プリンストン大学では、大学院の卒業生28人で建築に就職したのはわずか2人だったこともあったと聞いています。後の学生はみんな映画など、他の業界に就職してしまう。残念ながら早大でも同じような傾向があります。

仙田——私は学生に対して、「建築は空間科学だから、映画でも行政でもゲームでもいろんな分野にいけ」と言っています。でも建築家教育をやりながらその多くが建築に進まないのは寂しいですね。

六角——芸大では、以前は入学してくるなりディテールが描ける学生もいましたが、残念ながら今はいません。でも、モノをつくるのに慣れたマニアックな人達がいるから覚え始めると早い。でも、そういう感性を持っているのは全員ではない。残りの学生は就職できず、就職させたとしても図面が描けない。昔は芸大生という図面が描けるから就職には困らなかったんですが、今は違ってきています。

石山——我々の頃もオイルショックで就職は全然なかった。する気もなかったけど(笑)。問題は女子学生のほうが深刻で、就職先といえばヨーロッパだってインテリアデザインかディスプレイしかないですから。女子学生はどんどん増えていますから、大変なことになると思います。ところで、まだ他にもやっかいな問題があって、設計製図の上手な学生が建築家になるとは限りません。早大ではOBの約30%が独立して活動しています。学生の時から、「こいつは40歳くらいになったら成功するな」というのは大体わかりますが、設計製図のときはあまり関係ありません。非常に素朴なことを言えば、人柄とか、根性とか、体力とか、最初から談合の事知っていると(笑)。建築って全人教育だから、設計製図で教えられる事とそうでないものがあって、社会性を最初から持っているか持っていないかで、大きく違います。

仙田——建築はデザイン以外の部分が非常に重要ですね。自分でも、独立しようと思った時にどのようにに事務所をおこせばいいのかわかりませんでした。住宅については、建築家がつくった住宅の全てがパーフェクトではないし、建築家が設計した住宅というのは圧倒的

に少ない。本当は少人数の設計事務所が日本の建築設計の主体でなければいけないと個人的には思います。

教官の改善—教官の流動化と求められる資質

仙田——冒頭で触れましたが、変えていかなければならないものとして施設環境と同じくらい重要なものに、教官に関する問題があります。教官になるのに学位が必要とされたり、作品より論文が重要だ、などということはぜひ改革していかないといけないと思います。

石山——一番変わらなければいけないのは教官だと思います。教官はいわゆる大学への永久就職じゃないですか。設計教育の場合は5年くらいで変わるほうがいいのかもわからない。

六角——アメリカの場合、新しく教官になる時、自分のチームに加わる5、6人と一緒に着任します。日本の場合は新しく採用されても、一匹狼で檻の中に放り込まれるようなものです。これでは改革するのも難しい。そのような状況で、大学の中も外も新任教官のアクションに期待している。そうこうしているうちに5年も経つと疲れてしまいますよ。石山さんは独りで早大に放り込まれてどうでした？

石山——今思うと、私が早大に入ったのは大学側として異分子を注入したかったからでしょうね。もう10年くらい在籍していますが、そろそろ異分子を注入しないといけないと思います。長いですよ10年は。

仙田——確かに5年くらいがいい線ですね。

石山——教官があんまりころころ変わるのもよくないから、3分の2は固定し、3分の1を5年毎に変えるくらいがいいのではないかと思います。

仙田——中国の同済大学では、学生の評価と教官の実績で教官をランク付けして、下から5パーセントは入れ替えるそうです。これはいい大学になりますよね。日本でも最近、若い世代の活躍している建築家はほとんど大学で教えていますし、これから教官評価の方法は変わっていくと思います。

六角——でも、教官の公募には学位が求められます。芸大は、卒業生の教官への就職に関してリーダーシップをとることが難しい状況で、建築系教官への就職も厳しい。だから、学位も論文博士だけではなくて、今まで2人だけですが、作品博士も出しています。どのような人材であれば学位を認められるか研究して、作品中心といいつつ、その中に論理だったものがあるものを認めようとしています。

仙田——学位のこと以上に問題なのは、大学にずっといてそのまま教官になってしまうことだと思います。

六角——博士課程に入るまでに一回社会に出ることが必要ですね。

石山——個人的にはそれを早大ではルール化したいと思っています。一回冷や飯食えてね。ずっと大学にいる、いわゆる「純血種」は設計教育には役に立たないですよ。

六角——芸大も今は、助手の任期を3年間に制限しているし、さらに学外での業績がないと教官としては採用しません。

石山——早大では、設計教育は教官が4人担当していますが、それぞれの教官でどういう学生を理想とし、どういう建築を理想とするのが少しずつ違います。フリーランスのアーキテクトを理想とする人にとっては、巨大な会社組織の設計部に就職するのは本意ではないわけでしょう。早大では、設計に対するスタンスとして、一般的な価値観のなかで重要と思われることを大切にすることは少ないように思います。今だにガウディがある意味理想として語られていたりしています。そんな大学は世界でも珍しいのではないですか？そう考えると、世の中の流れと比べて少しズレているような気がしますが、同時にこのズレが非常に重要だとも思っています。

“スクールカラー”——特色ある設計教育とは

仙田——東工大は、芸大や早大にデザインで負けるから構造にも強くなれと言っているんです。設計課題でも構造家に参加してもらい、「大空間建築」の課題を出したりしています。デザインマインドのある構造家が出てほしいと思います。そういう方向でスクールカラーを出そうとしています。

石山——(kaを見ながら)やっぱり東工大って自由ですね。

仙田——できるだけ多様な人材を社会に出したいと思っています。そういう意味では明確な方向性を出そうとは思いません。早大ではこういう出版物は出していますか？

石山——『早稲田建築』というのがあります。

六角——それはやはり教官が編集しているのですか？

石山——そうです。しかし私は理論誌をつくりたいと思っています。そうしないとスクールカラーが表に出にくい。アメリカの名立たる大学はみんなそのような雑誌を持っています。

六角——東工大は卒業生も含めて人数が多いから、ある程度の活動資金も確保できますよね。芸大は卒業生が少なく資金の確保があまり十分に出来ませんから、学生の手弁当と大学が用意した資金で、唯一芸大のカラーを出すために、教官、学生、ゲストも全部同じように一人当たり1ページという紙面を割り当てた本をつくったんです。今のところは難しいけれど、確かに石山さんの仰るように少し思潮性のあるものをつくりたいですね。

石山——こんな時代ですけど、“スクールカラー”はまだまだあると思っています。これからはスクールカラーを強烈に確立しないとダメですね。例えば、東工大には清家清さんがいらっしゃるって、それが今でも脈々と流れている。今の若い活躍している人の作品も「清家風」だなど思うことがあります。芸大だって意外と流れていると思います。例えば早大では村野藤吾的な学生が、スーツと出てくるんです。

六角——芸大は吉村順三先生以降のカリスマ的存在はいません。もうカリスマの時代ではないんですよ。あの頃は一言の重みがあった時代だったんですね。吉村先生の一言を僕は本当に緊張して聞きました。吉村先生がちょっとやさしいこと言うと大変だった。先輩が「お前何言われたか」って、そういう状況でした。今なんか唾が飛ぶほどいっぱい喋ったって、泡にしかならない。

仙田——私の先生は谷口吉郎先生でしたが、4年生の時に先生とちゃんと会ったのは2回だけで、先生の部屋に入ることもできなかった。

石山——先生の部屋にはおっかなくて入れなかったですね。でも会って話すと意外にくだけた感じでした。授業で記憶に残っている事も少ないですが、今井兼次先生がガウディを語りながら泣いちゃった事だけ覚えています。

仙田——だいたい先生の言うことはそんなもんなんですかね。

石山——吉阪隆正先生の大学院での授業は一回だけです。都市

計画の授業で、アフリカのサバンナでライオンを見る話をして、「都市計画とは要するにサバンナに行ってライオンを見たい」と思うことだって。一体何なんだろうと思った。でも、その言葉は強烈に覚えているんです。

六角——それでも神々しく見えるんですね？

石山——いや、神々しくは見えません。まあ、変な先生がいたなど。

六角——確かにそれだけのキャラクターがありましたよね。

仙田——昔の先生に比べると設計製図一つをとっても、今は教官が学生に奉仕していますよね。学生は当然だと思っているんでしょうが。昔の教官は学生の指導なんかしなかったですね。

石山——確かに指導された試しがないよね。課題出されて後は点つけられて返ってくるだけ。講評もなかったですよ。

仙田——谷口先生の場合、講評はしたけど「この線は美しい」というようにほとんどが感覚的なことだった。作品がいいのか、ただきれいなだけなのか、全然分からなかった。

石山——もう昔に戻ることはできないから、こういう現代の状況でどのように設計を教育していくのでしょうかね。

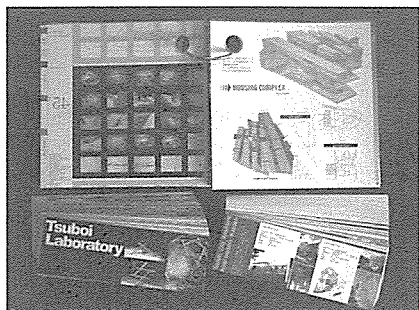
まとめ——今後の設計教育に必要なもの

仙田——今後の設計教育に重要なのは、どうやって各大学が特色を持った設計教育に取り組んでいくかということだと思います。東工大ではヘルシンキ工大とかミュンヘン工大と共同設計課題を始めるなど、国際的な大学間の設計交流を始めています。

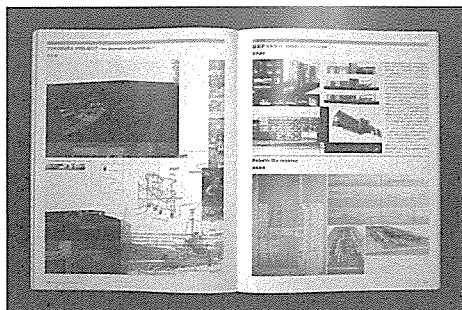
六角——国際化した教育というのも、この歳になるともう体力的につらいですね。私は留学していませんが、今の30代、40代の人達は留学経験者も多いし、期待したいです。そういう世代の人たちを中心にプログラムを組めば設計教育も変わっていくのではないかと思います。国内の横の大学間交流も充実させることもできるでしょう。

石山——私は設計を教えるプロがいてもいいと考えています。我々はやっぱりモノをつくるほうに情熱が向いてしまうから、教育に対する気配りが疎かになる。建築設計をしていなくても、教えることに関して情熱を注ぐことができるプロがいることも必要になってくると思います。それに、やはり20代の学生には30代の若い兄貴分の教官でないと真剣に取り組む合って教育できないですね。

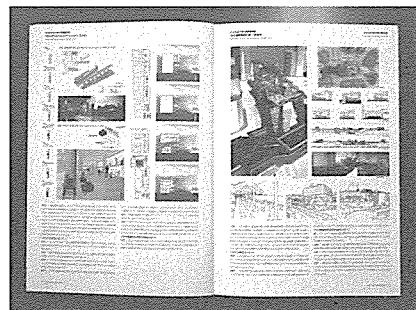
平成13年度設計製図課題、出版物に関しては、東京芸術大学六角鬼丈研究室、早稲田大学石山修武研究室のご協力をいただき、資料を元に編集したものです。



東京芸術大学「空間」No.20



早稲田大学「早稲田建築」稲門建築会機関誌No.39



東京工業大学「Ka」No.22

卒業設計・修士制作展2002

Undergraduate Diploma and Master's Design Project Exhibition 2002

An "Undergraduate Diploma and Master's Design Project Exhibition: 2002" was held on campus last June. This was the first attempt at a public exhibition ever to be carried out by the Department of Architecture and Building Engineering at T I Tech.

In accordance with opinions to the effect that: "it is not quite satisfactory for Undergraduate Diploma and Master's Design projects, on which enormous energy has been expended, to be shown within the department alone," and "holding an exhibition would increase student motivation and inspire more determined study," the committee was encouraged to sponsor this exhibition. During the term of the exhibition, many people indeed visited a venue well away from the center of Tokyo and the exhibition received high praise from visitors. As a result, it proved a great success as a first trial.

卒業設計・修士制作展

去る平成14年6月18日~28日、東京工業大学建築学科・大学院建築学専攻にとって初の試みである、卒業設計・修士制作の展覧会が開催された。この展覧会では、平成13年度大岡山建築賞受賞作品、優秀作品、修士制作計18作品(次頁より掲載、学内での優秀作品の選出過程に関しては後述)が、東京工業大学百年記念館1F展示ホールに展示された。

これまで卒業設計・修士制作の作品の展示は、校舎の廊下およびTIT建築設計教育研究会総会で行われる表彰式においてのみであった。しかし、膨大なエネルギーがかけられている卒業設計や修士制作を、学内の発表だけで終わらせるのではなく、他大学のように公開的なものにしたい、などという意見が以前よりあった。また、展覧会を行うことで学生の設計に対する意欲を上げ、さらには卒業設計の完成度を高めたいという意向のもと、主催:東京工業大学工学部建築学科、後援:TIT建築設計教育研究会による開催に至った。なお展覧会の会場構成・設営および宣伝活動は、受賞者を中心とする卒業設計展実行委員会が行った。

会場に関しては、来訪のしやすさを考慮し都心で開催したほうがいいという意見もあったが、模型の運搬など準備の問題も含めて検討した結果、本学百年記念館が選ばれた。来訪者の半数近くが、他大学や企業など学外の方々であった。都心から離れているにも関わらず、これだけ多くの人々が足を運んでくれたことは、驚きでもあり、期



TIT建築設計教育研究会総会における発表の様相

待以上の成果であったといえるだろう。展示作品をキャットウォークから吊すという、百年記念館の空間を生かした展示方法に関しても高い評価を得た。これらは学生からなる実行委員会の努力の結果である。全体を振り返ってみると、初めての試みではあったが大成功であり、有意義なものであったといえるだろう。この展覧会が刺激となり、卒業設計・修士制作の完成度が高まっていくことが、期待できるのではないだろうか。

来訪者(合計687人)

•東京工業大学建築学科関係者(教員、学生など)	297人
•東京工業大学他学科	88人
•他大学(横浜国大、昭和女子大、日本工業大など)	160人
•建設会社・設計事務所	21人
•その他(企業・メディア・高校生など)	121人

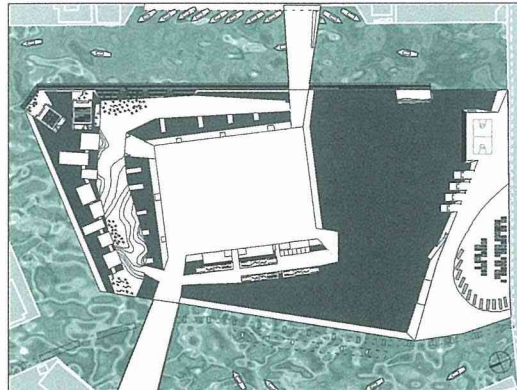
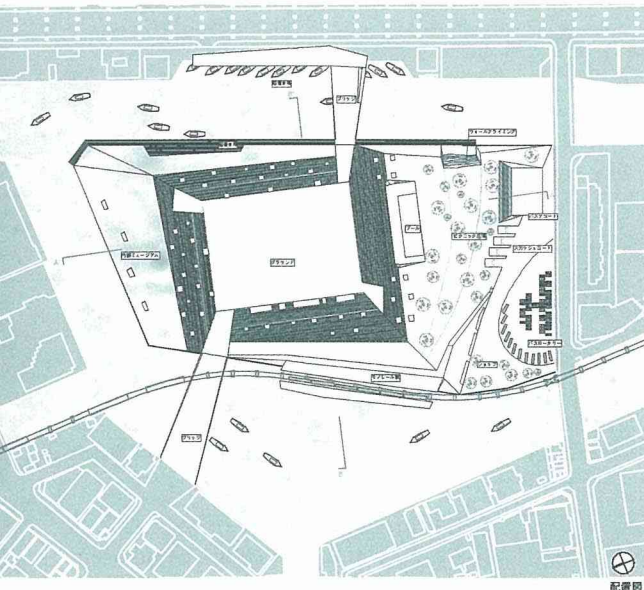
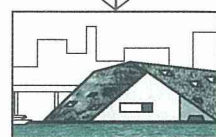
なおTIT建築設計教育研究会総会における発言者は以下の方々です(五十音順)。
金箱温春(金箱構造設計事務所/S52修)、坂本一成(教授)、清田育男(清田育男設計工房/S52卒)、伊達美徳(日本都市計画家協会/S36卒)、林昌二(日建設計/S28卒)、三栖邦博(日建設計/S38卒)、山下和正(山下和正建築研究所/S34卒)

本文および以下の記事は、卒業設計の優秀作品発表会、TIT建築設計教育研究会における作品発表と質疑応答の様相をレポートしたものです。取材は学生編集員の足立拓[M2]が担当し、文責は編集部にあります。なお、各作品図版は製作者自身によるレイアウト、解説となっています。

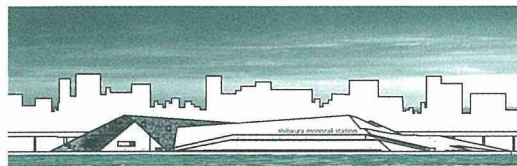


百年記念館での展示の様相

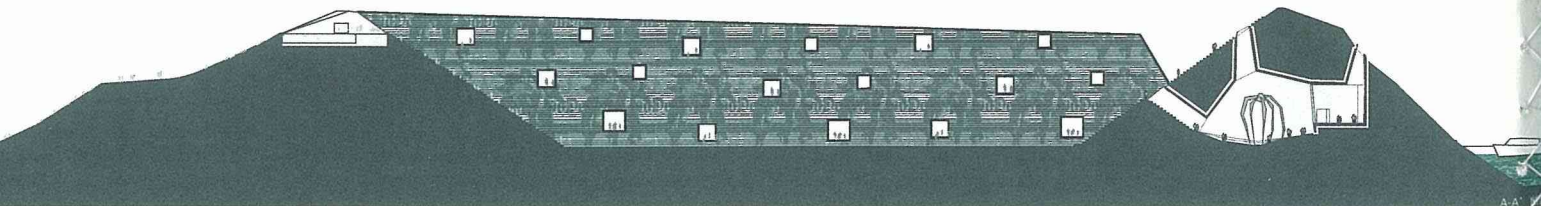
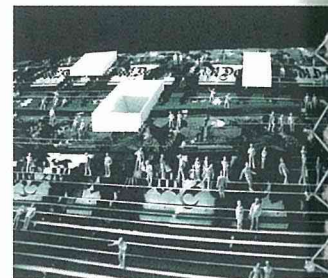
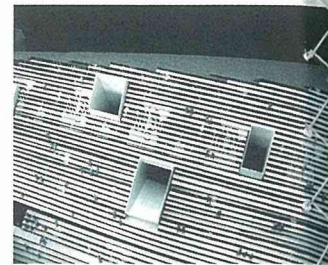




平面図



立面図



平成13年度大岡山建築賞

O-okayama Architectural Prize Diploma project 2001

「tsuchi・stadium park」倉林貴彦

"tsuchi・stadium park" Takahiko KURABAYASHI



東京都内の工事現場からは、年間で東京ドーム15杯分もの建設残土が排出されています。特に最近では品川や汐留に代表されるように都心部で大規模再開発事業が盛んに行われ、残土処分のために多くのエネルギーがそそがれています。また、今年は日韓共催のW杯にともない多くの巨大スタジアムが建てられました。しかし、その多くは、莫大な建設費用やW杯後の運営の無計画ぶりなどが問題視されています。本計画では、このような最近の大規模建設事業の在り方に対する一つの提案として、東京湾岸の島状の空地に、行き

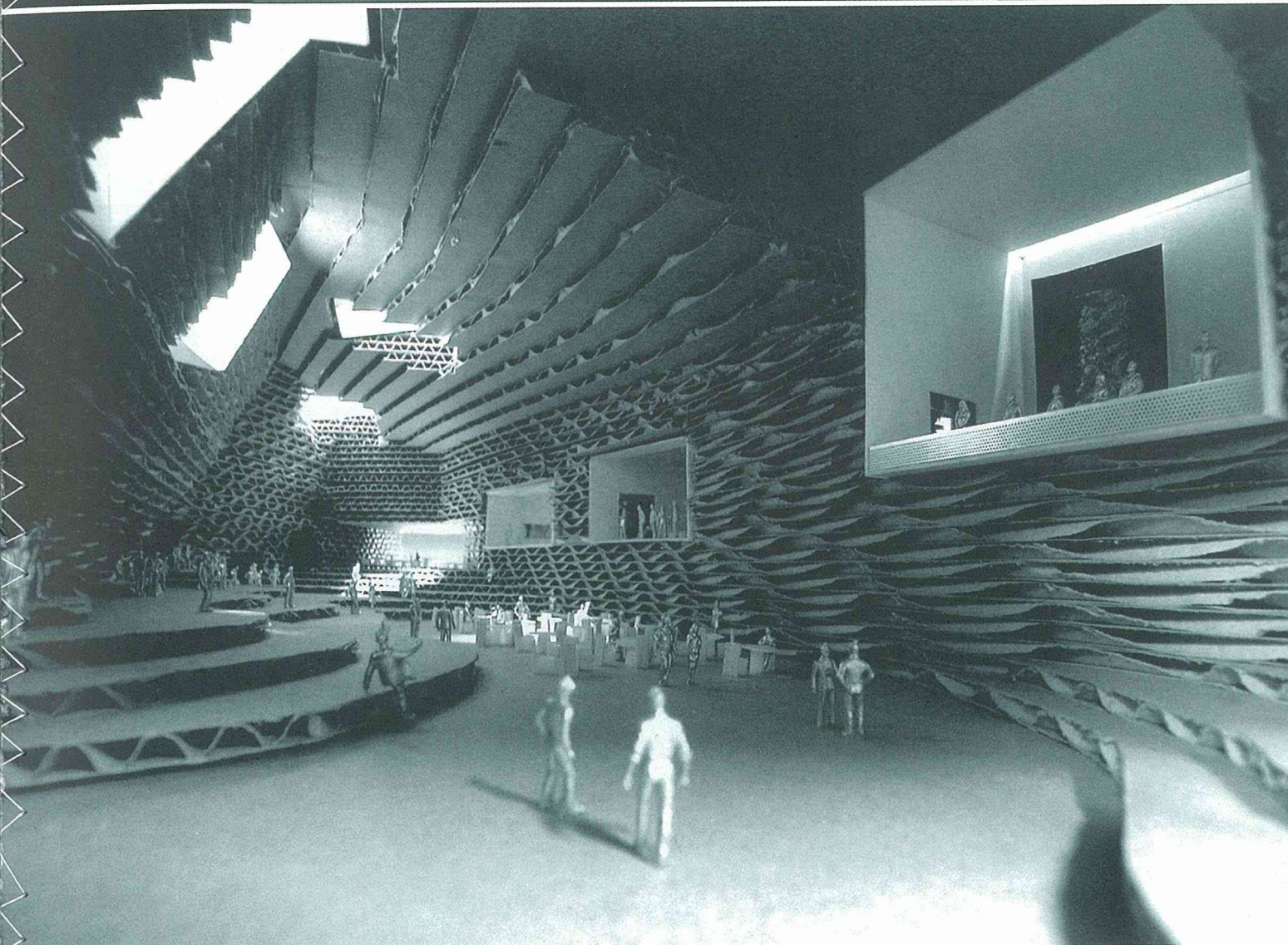
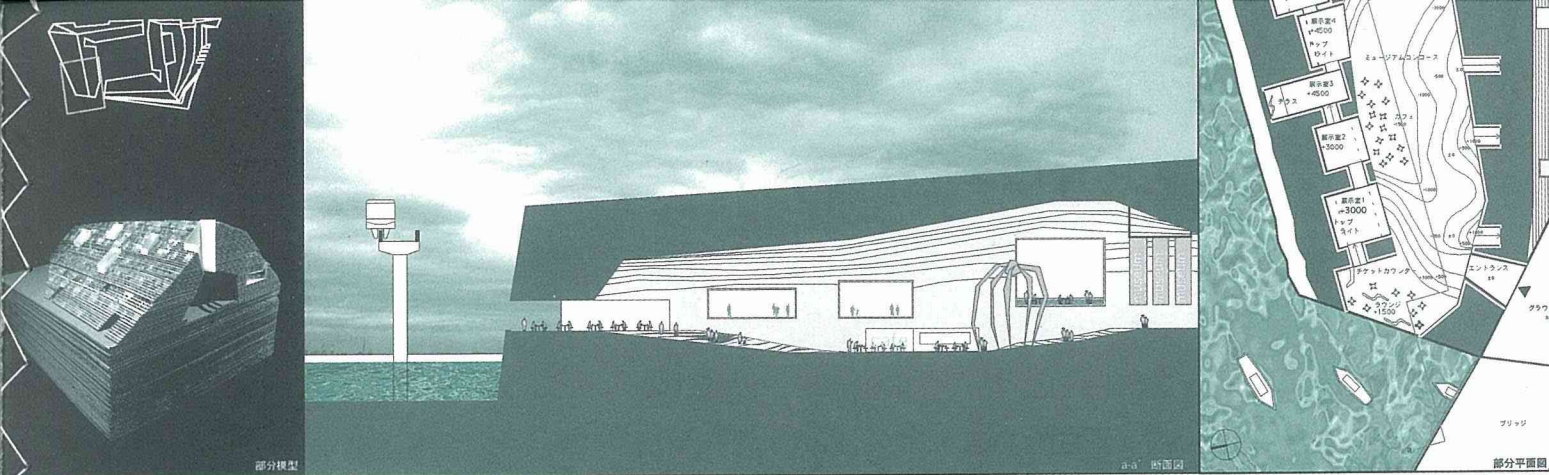
場困っている残土を回収する残土処理場を計画します。ただし、ただ土を積むのではなく、これでスタジアムをつくれます。グラウンドを囲むように土を山盛りにし、それに削る、掘るといった操作を加えることでスタンド、コンコース、ミュージアム、トップライトといった具合に、機能にあった様々な穴や窪みをつくり、スタジアムパークとして利用しようという計画です。

・学内卒業設計優秀作品発表会において

五十嵐——斜面の勾配と土の性質が対応しているのですか？

倉林——スタンド側の勾配は統一してあります。外側については勾配により表面の仕上げが変わります。

奥山——土の塊としてどこまで表現できるかが問題。イメージとしてはとてもわかります。



塚本—ヴォリュームに対して、その中にとられている空間がかなり小さい。こういうつくりかたをすれば、力の流れを厳密に考えなくても構造が成立しそうな雰囲気だね。そういうことがやりたかったのではないのでしょうか。

•TIT 建築設計教育研究会総会において

金箱—土という材料に着目した点は大変よいと思うが、どうやってこの土の空間をつくるのか聞かせてください。

倉林—基本的には、土をかためて、それをトンネルのように掘削してつくりますが、コンクリートのシェルで補強することも考えています。

金箱—説明のしかたの問題ですが、コンクリートを使うとは言わない方がよいと思います。土が崩れるかどうかは時松先生の御専門なのでお任せして(笑)。建設廃棄物を出さないというのがこのプロジ

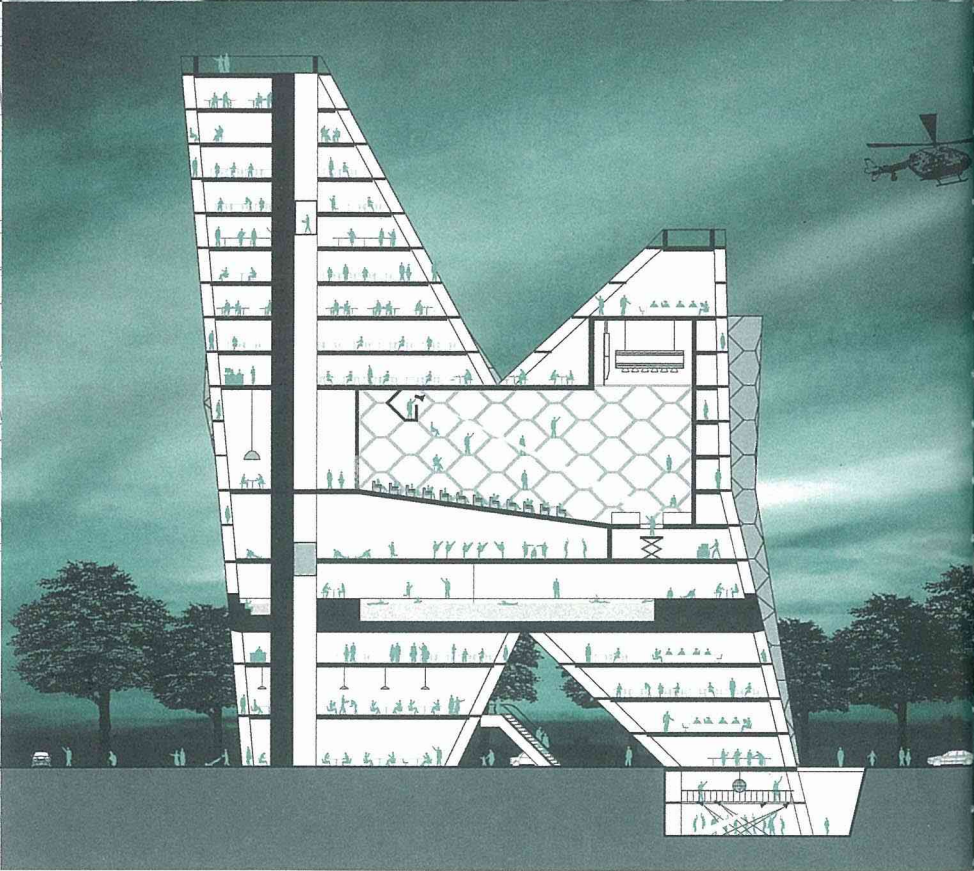
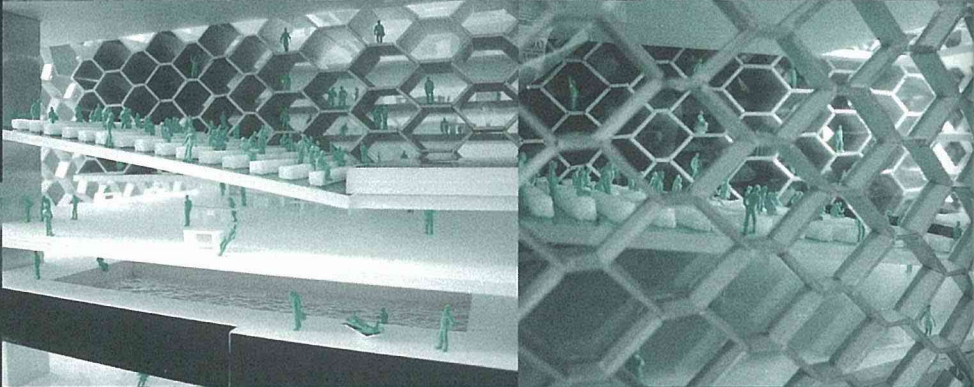
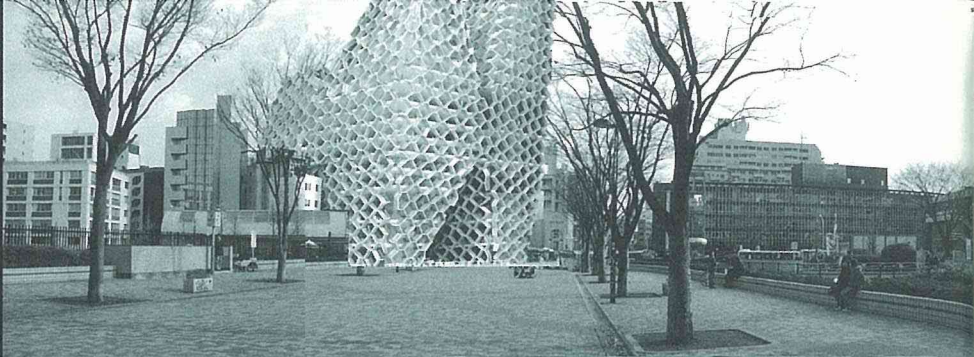
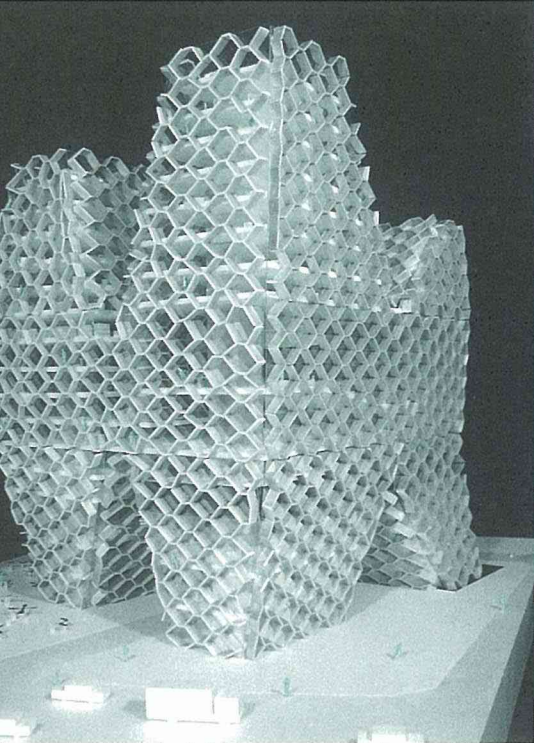
ェクトのよいところだと思います。

清田—建設廃材の処理という着想だけではなく、競技施設としての観やすさの両方から考える必要があると思いますが。

倉林—最近のスタジアムは競技を観るということに関しては一級品だと思います。でも、競技が行われていないときも使われるようなスタジアムも提案されるべきではないかと考えました。

林—社会的な問題の解決が基本にある大きな計画で、非常によいと思います。ただ、景観として外側のデザインにもっと神経を使ってもよかったのではないのでしょうか。

倉林—土を表面に露出させることで、人々に自分たちの生活の副産物としての残土の量を見てもらおうと思いました。



平成13年度大岡山建築賞

O-okayama Architectural Prize Diploma project 2001

「ビルズ」玉井洋一

"buildings" Yoichi TAMAI

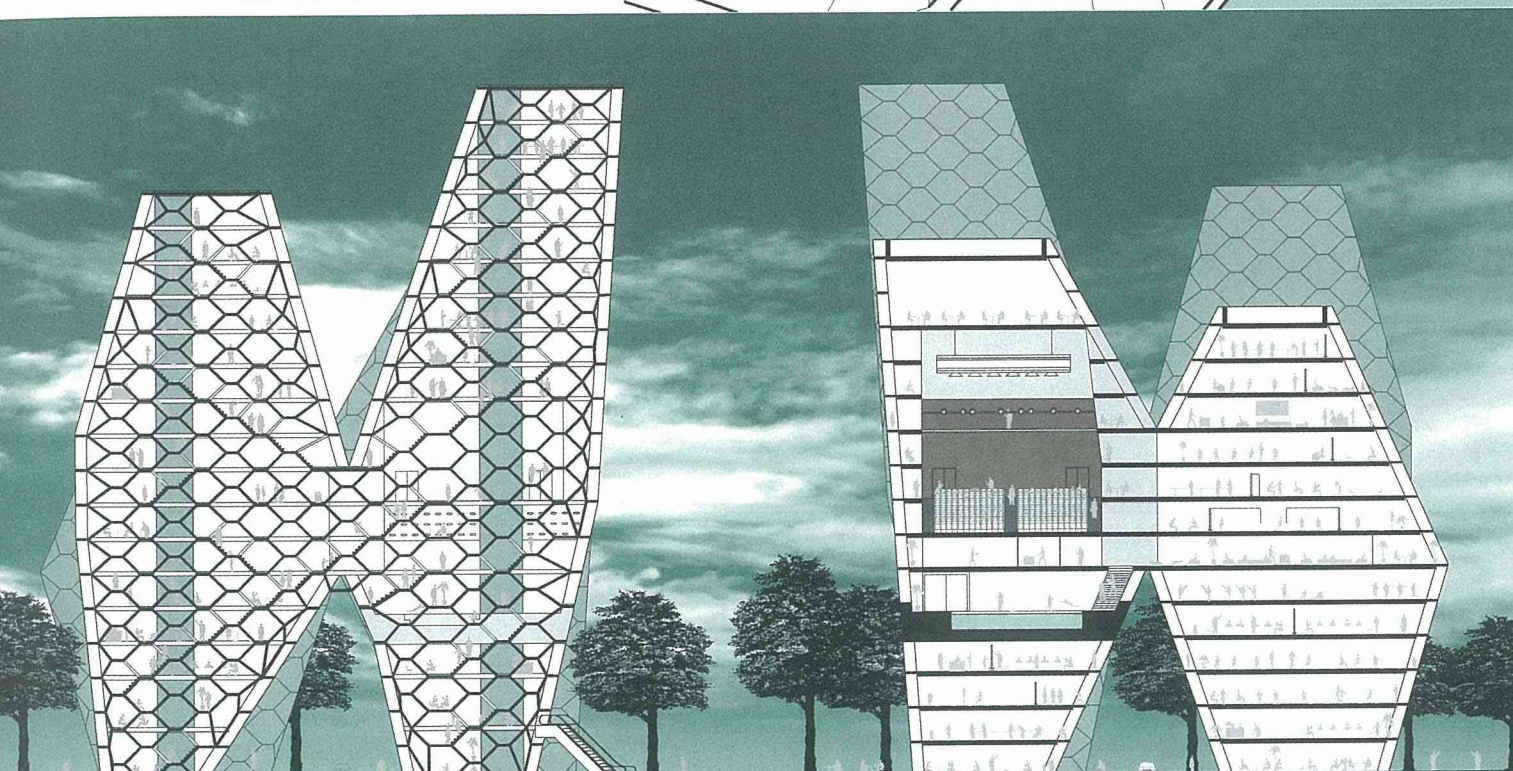
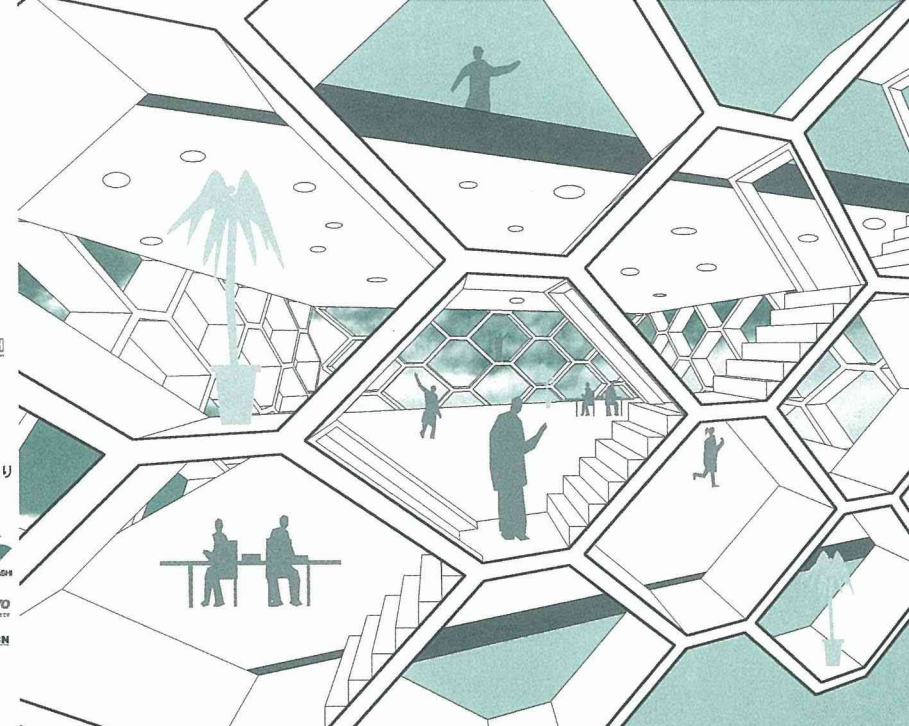
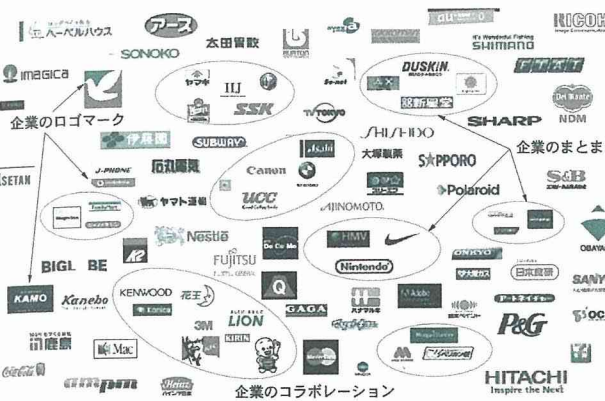
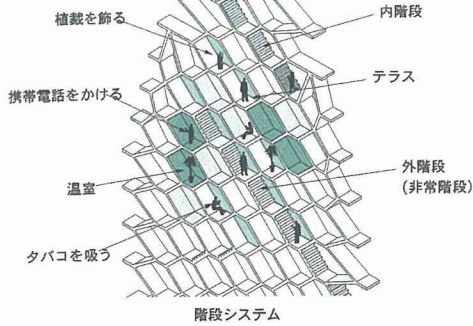
街にたくさん建っている普通のビルが持つ性質をずらすことで、東京に新しいビルを創り出すことを目的としました。この建物は、4つのビルが床の広さや天井高を変化させることで、近づいたり、離れたり、結合し、多様なかたちや広さをもつ場所を内部と外部につくり出しています。この建物では階段をフロアの外に押し出し、階段が生み出すかたちを組み合わせることでできる六角形のユニットを外装表現として利用しました。通常のビルでは外装と建物内部は無関係に計画されることが多いのですが、この建物では相互に関係を持

つようにしています。外装はハニカムとしてこの多面体の建物の構造になると同時に非常階段にもなります。建物のプログラムは新しいオフィスを想定しました。通常は基準階の積層により、ビルに入る会社の規模はほとんど同じです。近年、異なるジャンルや規模の企業のコラボレーションにより新しい商品が生まれることが増えており、大きな企業から小さな企業までがある程度独立しつつ1つの建物の中にあることは、よりコラボレーションを誘発すると思えました。

•学内卒業設計優秀作品発表会において

坂本——非常に彫塑的な建築だけれども構成関係もとっても面白い。だけどこの建物はどう説明したらいいんだらうね(笑)。あなたの説明じゃどうも物足りないね(笑)。

塚本——これは代々木公園側のシンボリックな建物といってしまった



方がいいのではないのでしょうか。

八木—建物が道路を跨いでいて渋谷の新しく開発されている場所のゲートのように感じるところがいいと思いますが。

瀧口—セクションの中で力の流れを見てどの辺が一番弱そうですか。

•TIT 建築設計教育研究会総会において

林—これはとっても感心しました。非常階段を外に出して構造にする。これまで実現した例はない。こういうことを学生の時代に発想して、ここまでかたちに仕立て上げる。これは事件だと思いました。

三栖—建築家には美的な感覚も必要だと思いますが、この建物は美しいですか(笑)。

玉井—僕はカッコイイと思います(笑)。

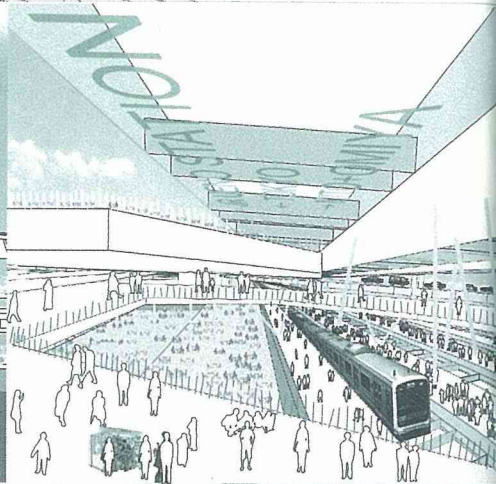
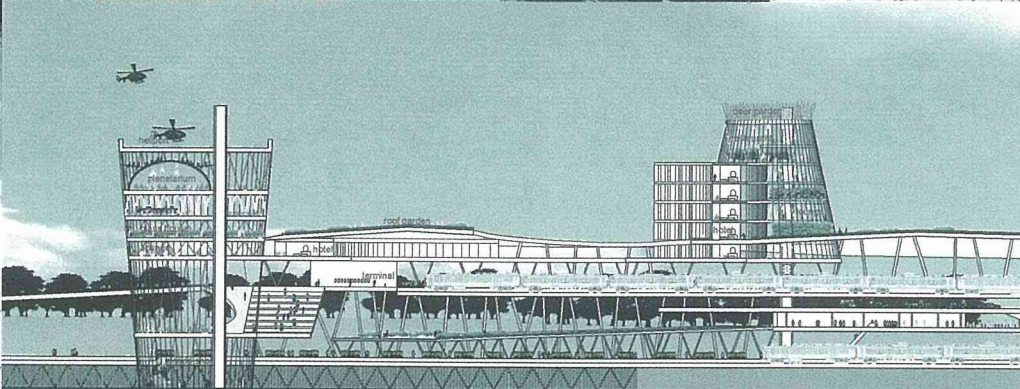
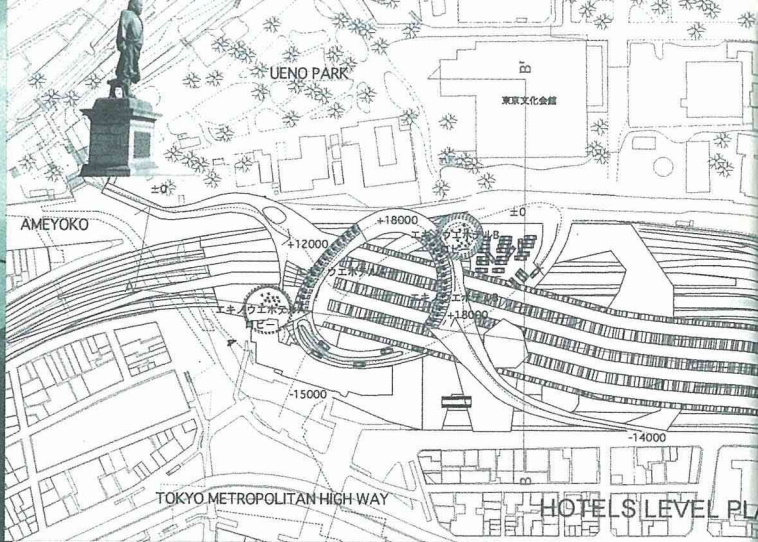
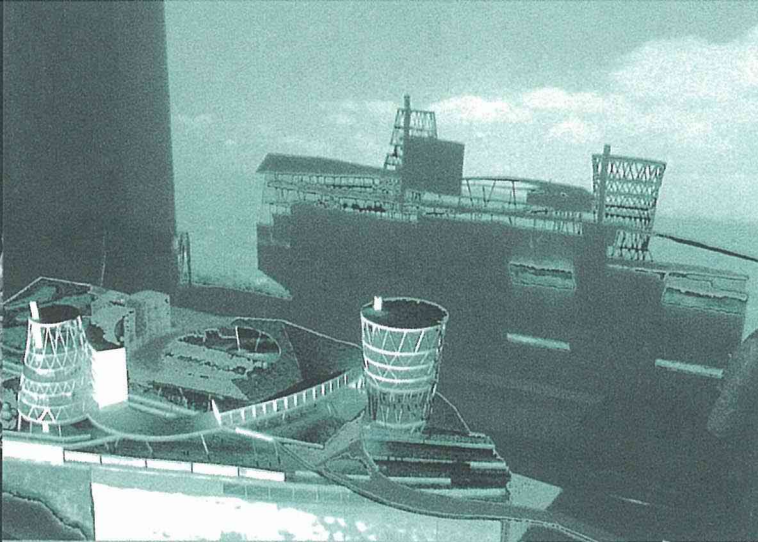
山下—構造の研究というか裏付けはありますか？

玉井—コアを中心に4つの不定形の建物をもたれ合うこと、また建物をメッシュで包み込むことで構造的に成立すると考えています。

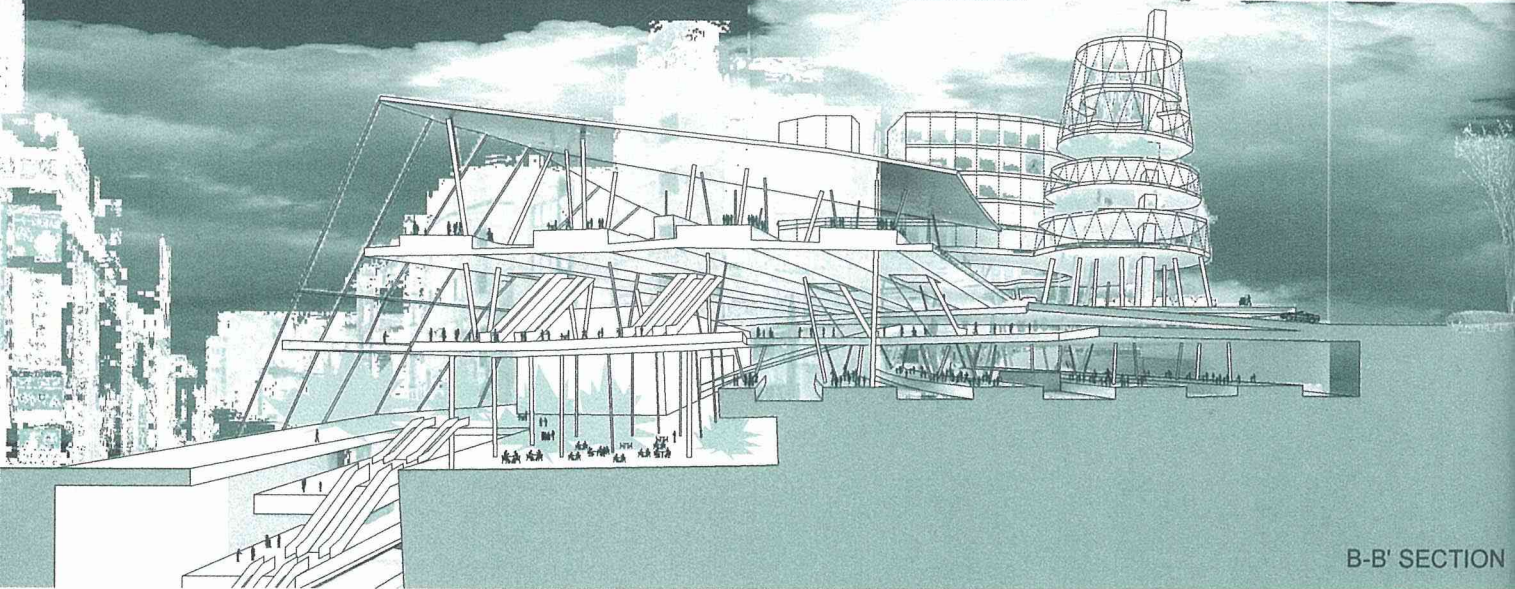
金箱—垂直ではない、安定性のよくない建物が組み合わせられたり支え合っているという考え方はすばらしいと思います。

清田—設計実務をやっている僕は絶対に設計しない建物ですが、学校教育として発想重視なのか基本的に優れた建築を評価するのでしょうか。

坂本—学生のだから完成度で評価できるものは少ない。特にいいところを評価していきたい。三栖さんの御意見に対してですが、我々は弥生や縄文の土器や、当時のすばらしい美人を現在必ずしも美しいとは思いません。ですがそのものが持つ力とか可能性を評価することはできると思います。



A-A' SECTION



B-B' SECTION

平成13年度大岡山建築賞(銀賞)

O-okayama Architectural Prize (Silver) Diploma project 2001



「ウエノエキ」野地智美

"UENOEKI" Tomomi NOJI

駅は通過という機能をア priori にもち、人々は一日の中での時間帯、一週間の曜日のサイクルなどにより、群れをなしたり散在したりします。上野駅は東京に三つあるターミナルステーションの一つで、傾斜地という特徴をもち、その歴史的経過を含め周辺環境が豊かな駅ですが、現状では駅前広場をはじめ、そういった環境に対応できていません。本計画では、分断された駅前広場をダイレクトに繋ぐために、駅構内を貫通する道を設け、それが螺旋のループを描いて様々なレベルに接続していく動線計画としました。また、プロダクトの

かたちを利用して、駅に隣接する首都高にとってのランドマークと、駅前広場と連続する上野公園にとって、ランドスケープデザインの起点となる、末広がりの温室化したランドマークをつくりました。

・学内卒業設計優秀作品発表会において

八木— 広場を繋ぐスロープの傾斜がきつすぎると思います。

仙田— 車の動線が人の動線を邪魔していると思います。

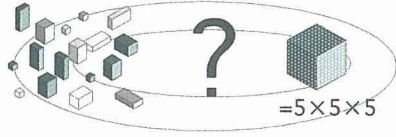
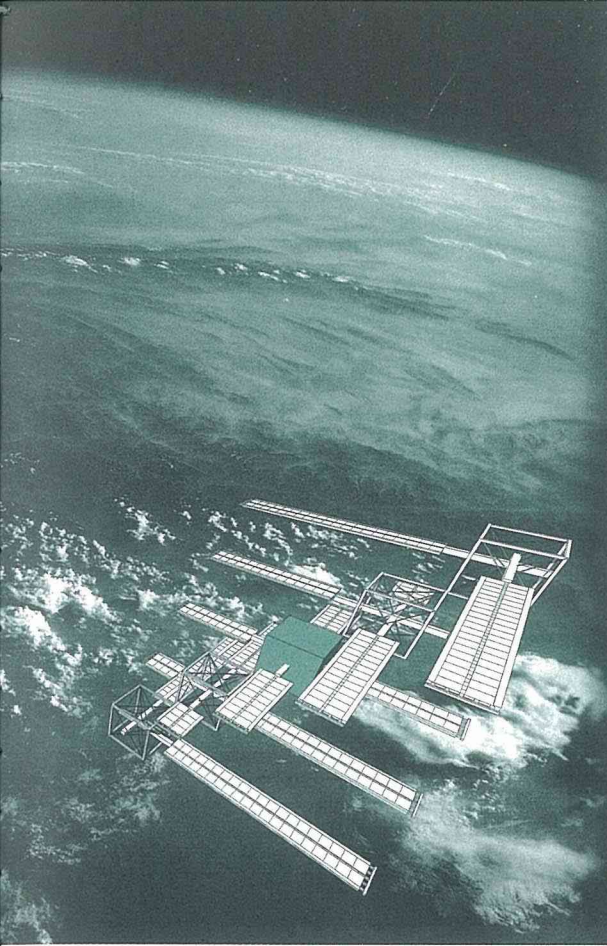
・TIT 建築設計教育研究会総会において

伊達— 歴史的視点から、旧上野駅舎を保存しているようですが、それに対してどういう評価をしたんですか？

野地— その外観を保存し、広場を繋ぐ動線の凱旋門にしました。

伊達— 首都高との接続をもっと考えてもよかったですか？

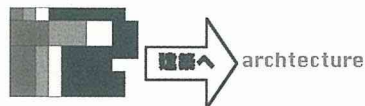
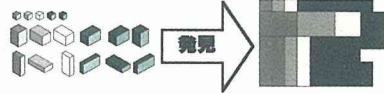
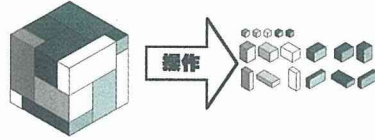
野地— 駅前にインターチェンジをもってくることに抵抗がありました。



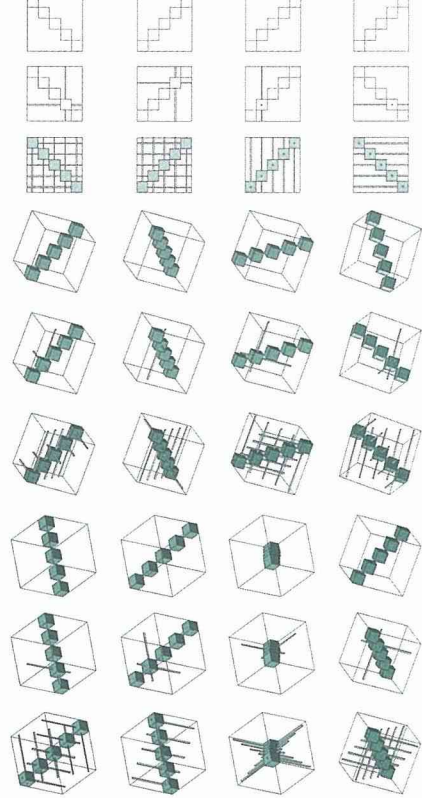
×5個 =1×1×1

×6個 =2×2×3

×6個 =1×2×4



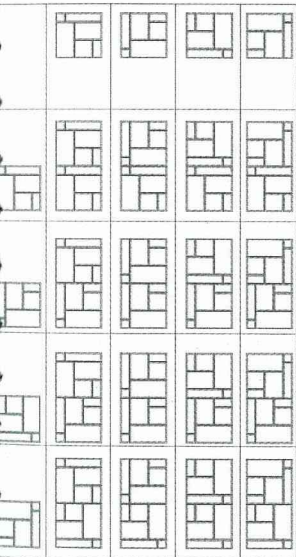
tsumikichi project concept



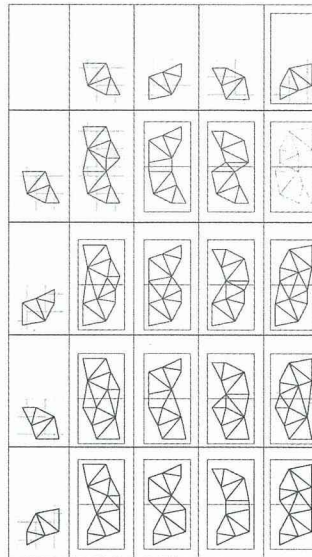
1×1×1の積木ブロックと線分の回転の際の位置関係

宇宙住居

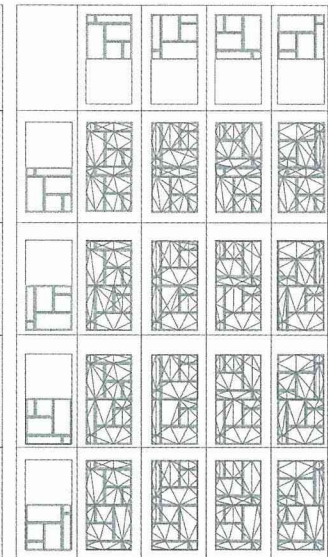
支えるためのものが何もない宇宙空間では人の運動は住戸全体の動きに影響を与えてしまう。人の運動による影響を最も少なくするため、住戸を全体の中で中心に据える。



study1.
転しながら二つの積木ブロックの重ねその立面のすべての組合せを示したしもの。



study2.
積み重ねた二つの積木ブロックに対して各四角形の中心点を取り、隣接する四角形の中心点を直線で繋いだもの。



study3.
積み重ねられた二つの積木ブロックの各底辺に対して中点を取り、隣接する四角形のそれぞれの中心点を繋いだもの。



高層商業施設におけるファサード



平成13年度大岡山建築賞(銀賞)
O-okayama Architectural Prize (Silver) Diploma project 2001

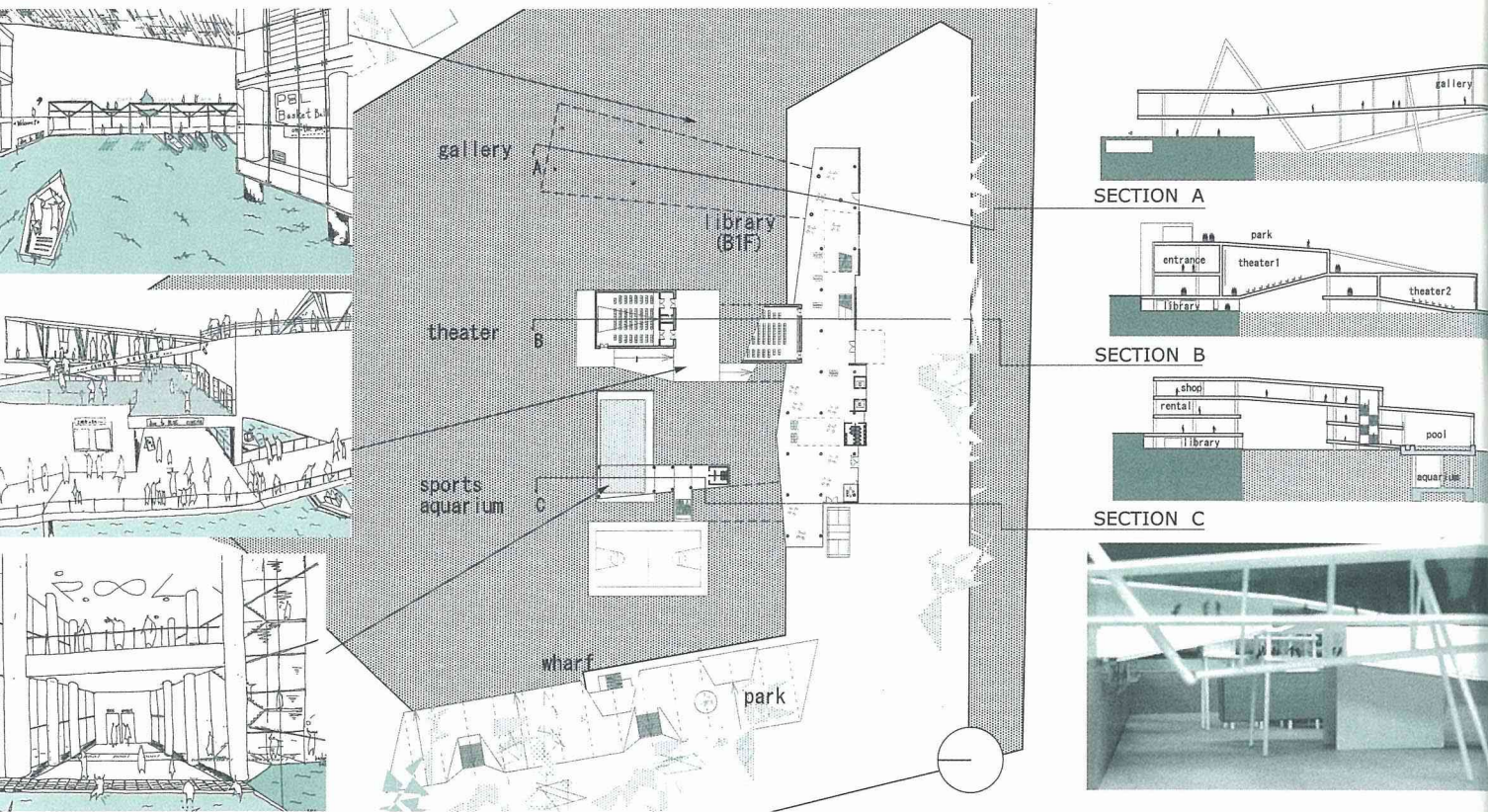
「tsumiki project」 諸藤弘之
"tsumiki project" Hiroyuki MOROFUJI

あるパズルを意識しました。そのパズルは、組み立てると、立方体になる面白いものです。このパズルは特徴的な形態に溢れていて、これら进行操作することで建築の形態を発見していこうという目的のもとに、集合住宅、商業地のビル、宇宙住居を考えました。

•学内卒業設計優秀作品発表会において

青木—幾何的な面白さの追求が出来ていない。例えば5×5×5だったら各層には一番小さい立方体が1回だけ登場するといった性質が全然生きていない。

奥山—幾何学から作る面白い形ってどれですか。
諸藤—積木を回転させて並べると不思議な形が出てきます。単純な操作で複雑な形。これが面白いと思います。
八木—トイレをみると人間的なスケールにもものすごく無理がある。人間的な寸法で幾何学的に展開できていますか。
諸藤—積木の性質による空間作りが目的なので、よいと思います。
塚本—何故こういうスタディをしたのですか。
諸藤—幾何的な特徴に興味を持つことは重要だと考えるからです。
藤井—プレゼンテーションがネタに短絡的である。工夫をすれば卒業設計作品全般に対するアイロニーになる。
仙田—建築の形態の仮説らしきものを積木からやろうとしているチャレンジ精神は認められると思います。



「dive to BLUE」井上龍之介 [上]

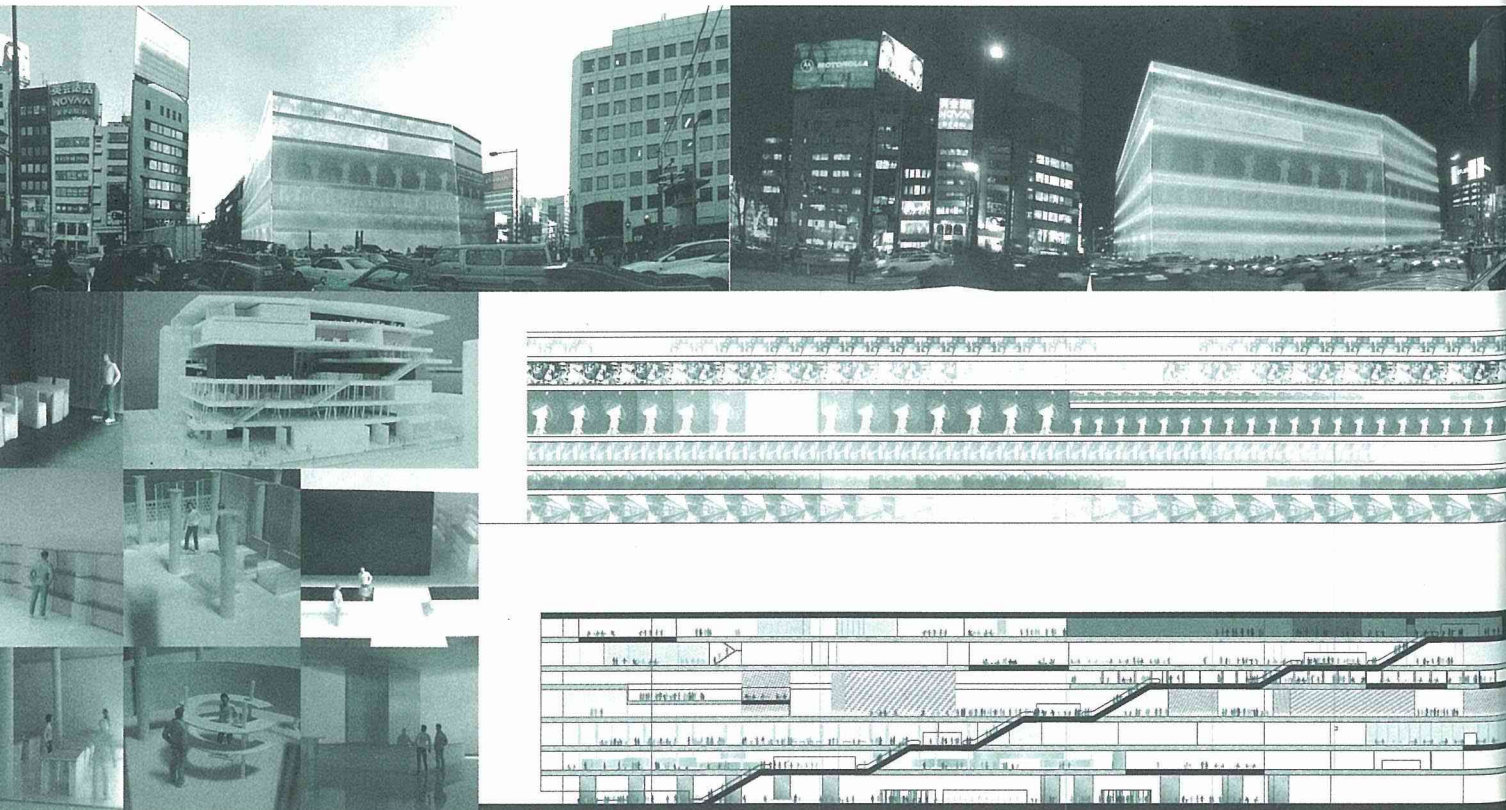
"dive to BLUE" Ryunosuke INOUE

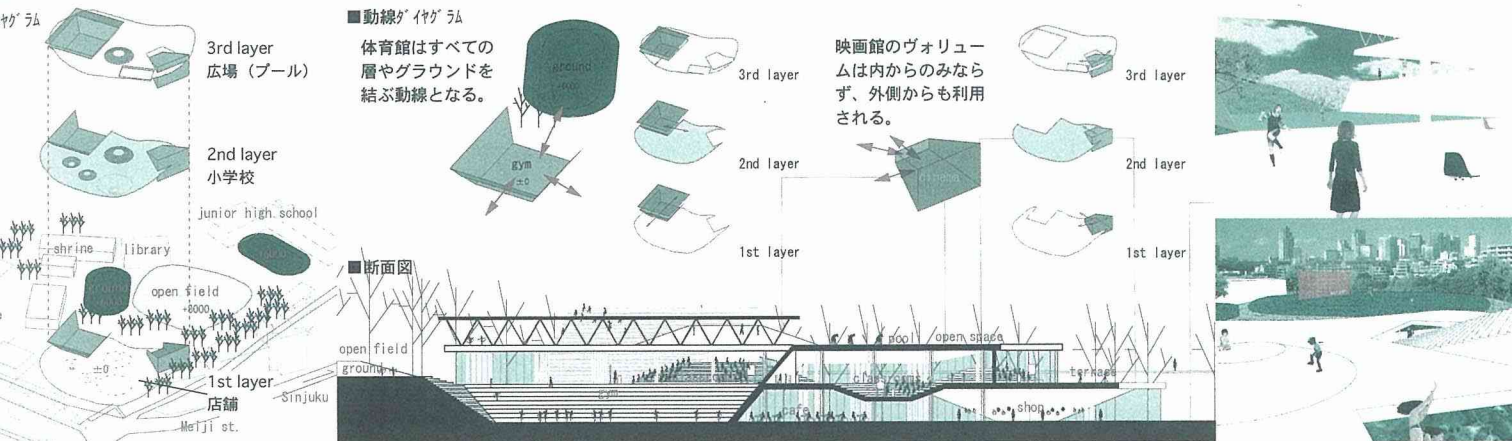
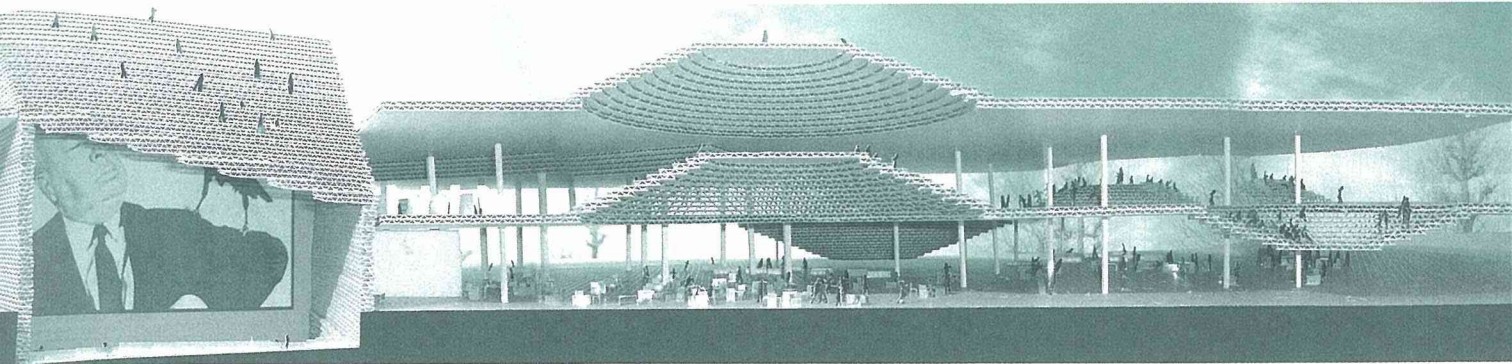
横浜市金沢区並木に舟だまりをもつ複合施設を計画した。舟だまりによる水上交通の発展と、東西に流れる富岡川を軸に異なる3つのヴォリュームを水辺に張り出させることで様々な水の表情が見れることと南北に分断された住宅街をつなぐことを考えた。

「ビルディングコラージュプロジェクト」片柳恭志 [下]

"building collage project" Tadashi KATAYANAGI

デパートというビルディングタイプのもつ層構成とそれらをつなぐ縦動線に着目し、学校や美術館、駅などの異なる用途の建物の積層としてデパートを再定義することで新しい空間を生み出すことを目的としたものである。



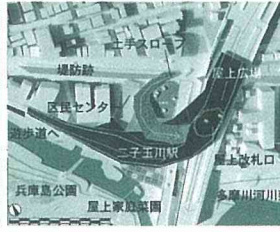
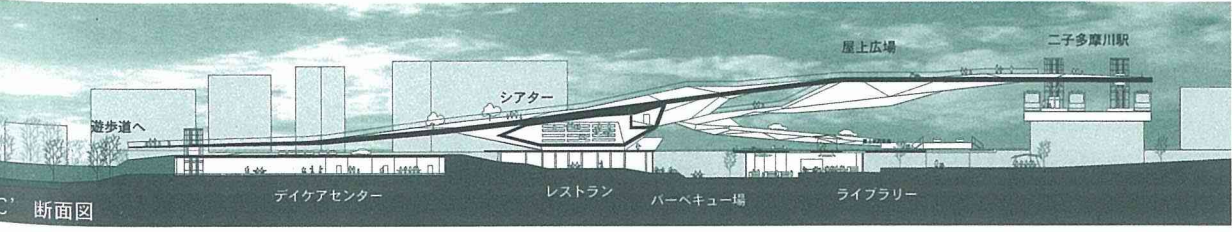
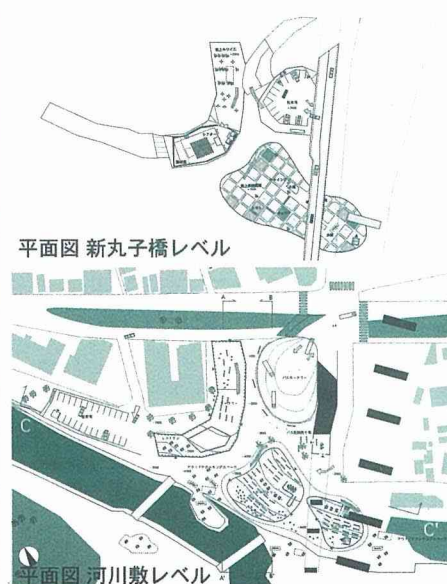
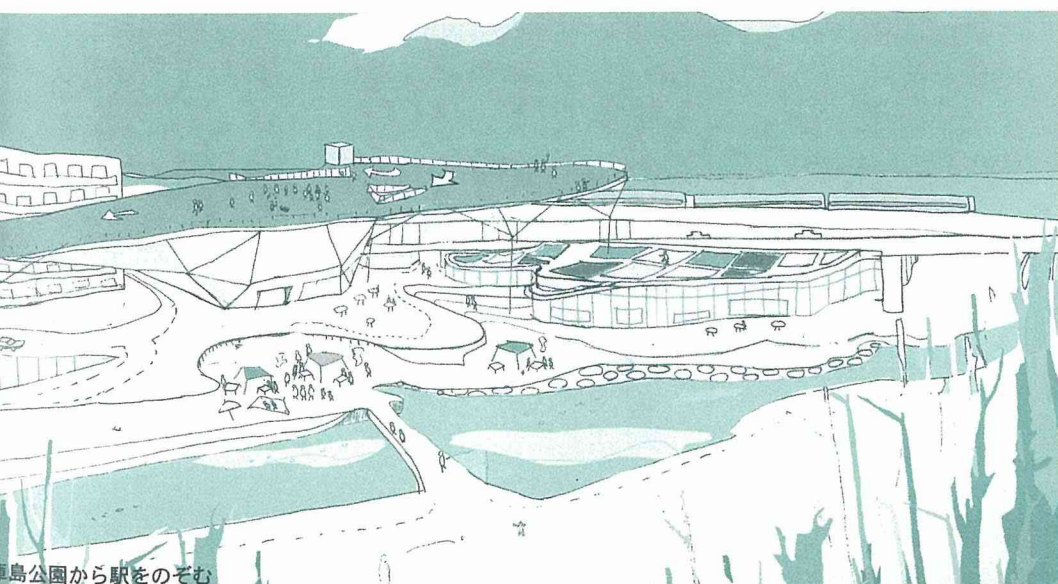


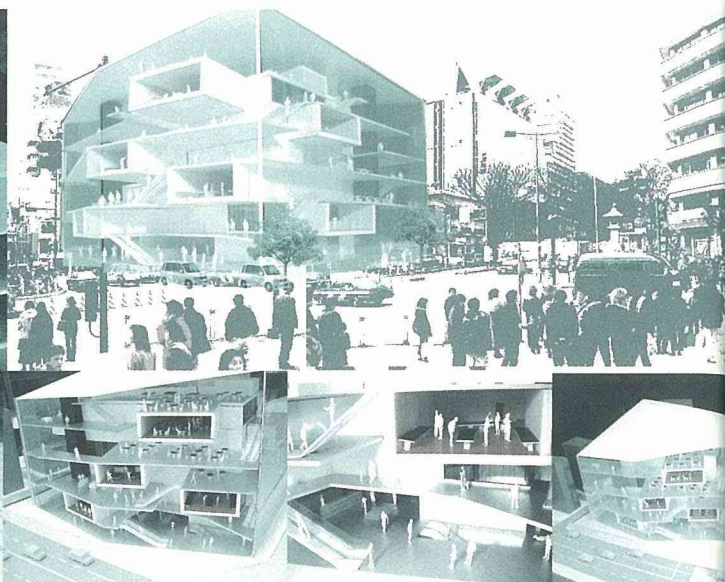
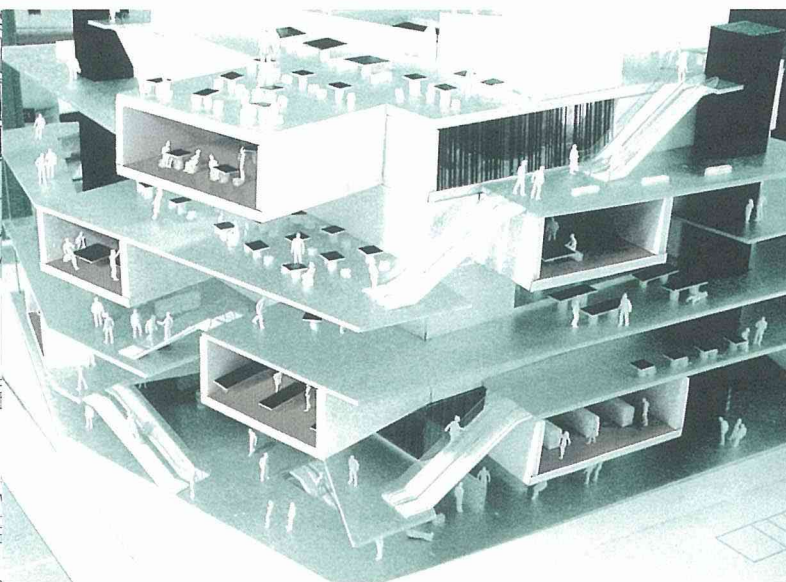
『凸凹ハラッパ小学校』加藤万貴 [上]
"DEKOBOKO HARAPPA elementary school" Maki KATO

原宿に外部空間を取り込んだ複合施設としての小学校の計画。スラブが凸凹し上下をつなぐ動線となったり、上下の層どちらからも使われたり様々な場所を作り出す。屋上は隣のハラッパと連続して、都市のオープンスペースとして機能する。

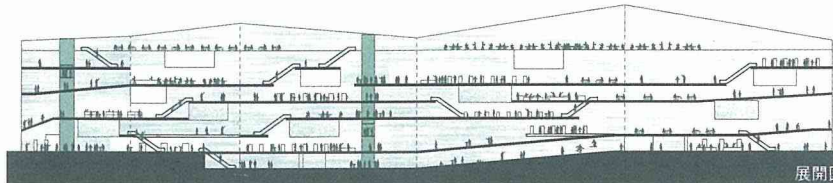
『ニコタマ ランドスケープ ジャンクション』古閑めぐみ [下]
"Landscape junction in Nikotama" Megumi KOGA

二子玉川駅周辺は、多摩川、鉄道、堤防の跡や橋架などリニアな要素が集まりは離れていくような場所である。それらの要素を繋ぐことで高低差を生かした一体的な駅空間をつくり、河川敷の様々なテクスチャーが交差する新しい川辺の空間を目指した。

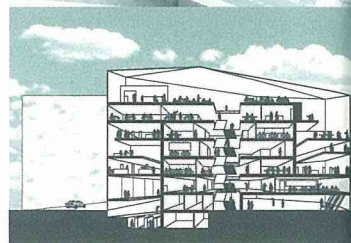




2階平面図



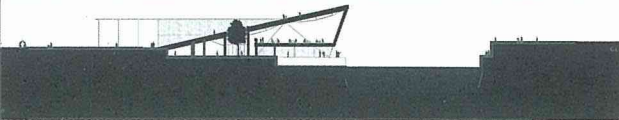
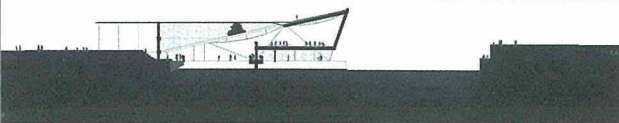
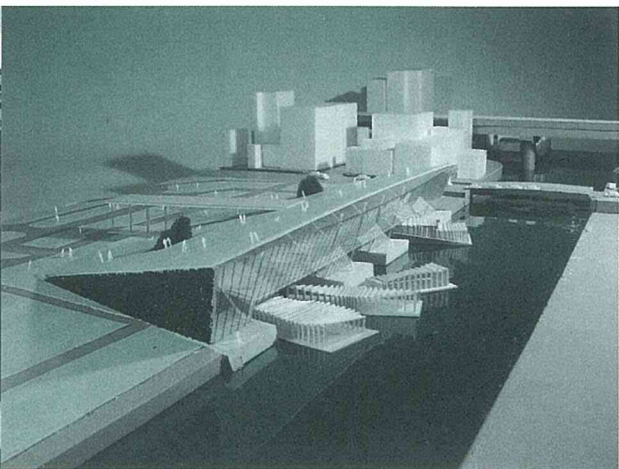
展開図



【ハラジュク ショップ+スクール】 高橋勇貴 [上]

"Harajuku shop+school" Yuki TAKAHASHI

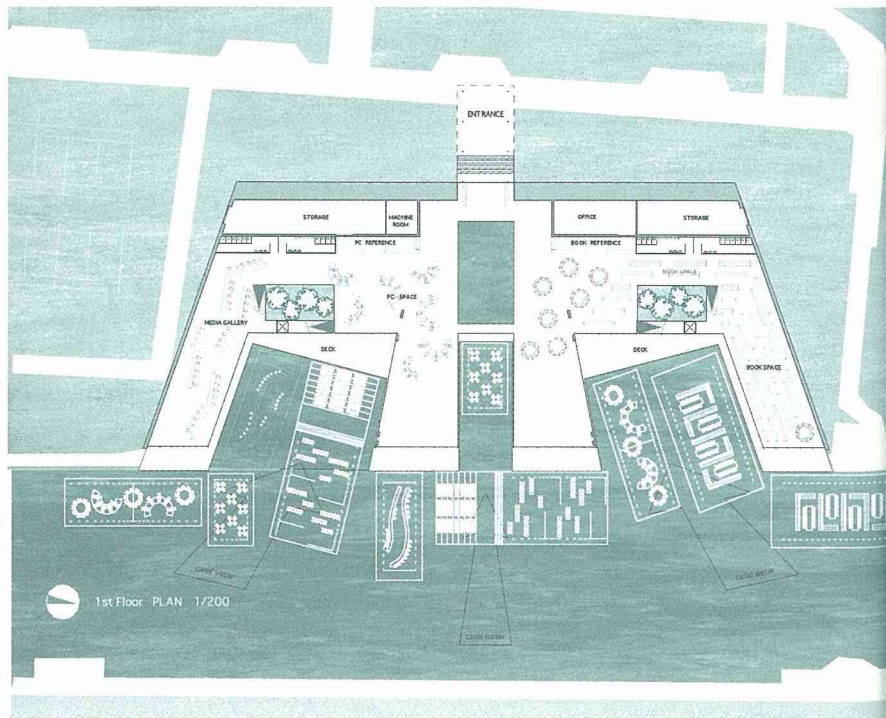
原宿に専門学校と商業施設の複合施設を計画した。基本構成は建物の中心に専門学校のヴォリュームがあり、その周囲を商業施設が取りまく形とした。ショーウィンドウを建築化することを主なコンセプトとして設計した。



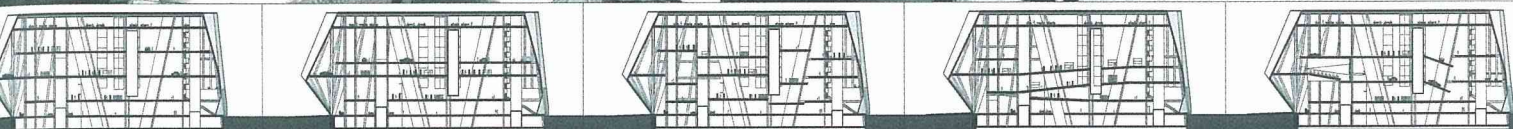
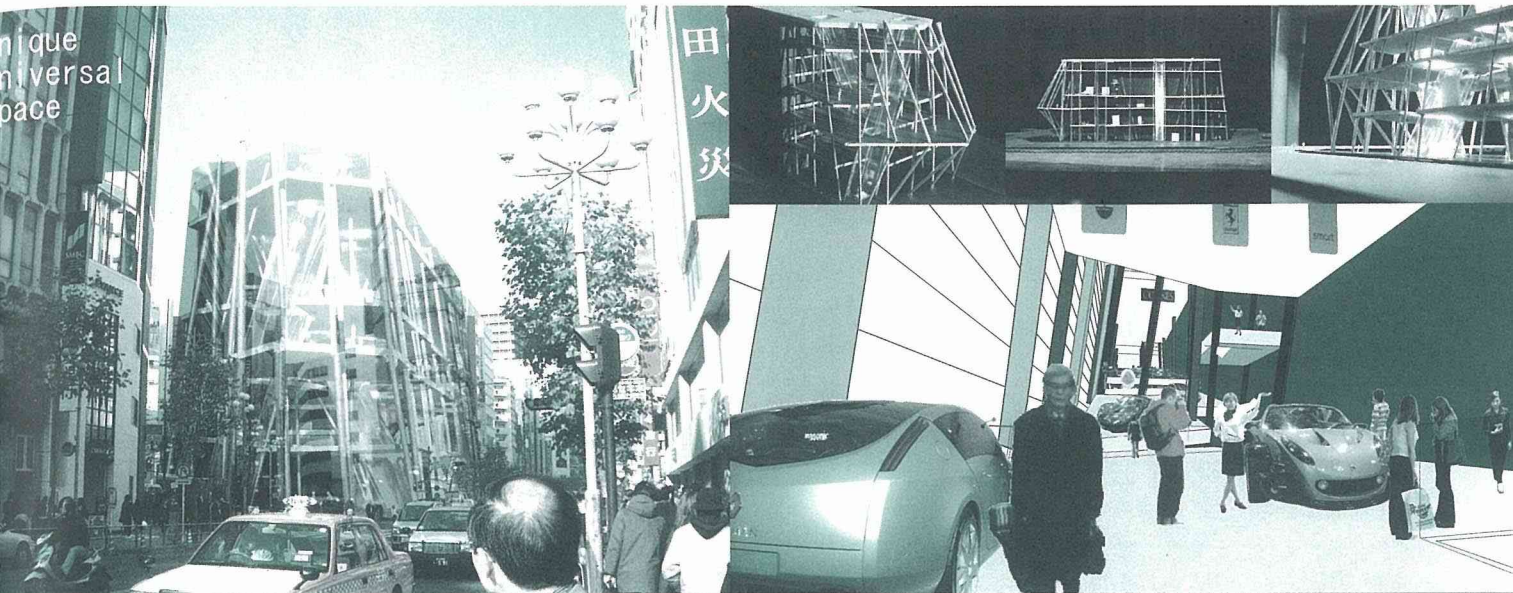
【PORT+FROAT】 田中盛志 [下]

"PORT+FROAT" Seiji TANAKA

これは産業の動脈としての使命を終えた運河のネットワークを利用し、再生する計画である。河に浮かぶFLOATと、その港としてのPORT。FLOATは運河を移動し、ユニットを形成することで多様な川幅に対応する仮設のメディアテークとなる。



1st Floor PLAN 1/200



同一レベルに並んだ各展示階が、均等な階高を持っている状態。通常の展示空間最も近い。

同一レベルに並んだ各展示階が、異なる階高を持っている状態。各階に階高の違いによって明確なヒエラルキーが生じる。

展示空間のすべてのスラブが異なるレベルで独立して存在する状態。一つのスラブから他のスラブに移動するためには、必ず垂直動線を使用しなければならず、次に移動する先が予測不可になる。動線が無くなる。

スラブの一部が傾斜することで、スロープを持った展示空間となる。通常の水平移動に対して、垂直方向の移動が加わることで、均質になりがちな展示空間に表情が生まれる。

展示空間の床の傾斜が展示物のプレゼンテーションに用いられる例。通常の展示施設では、無柱間にディスプレイ用の台などを設置することが求められるが、この場合展示空間そのものの形状変化することでダイナミックな構成が得られる。

variations of A-A section

『unique universal space』野上真太郎 [上]

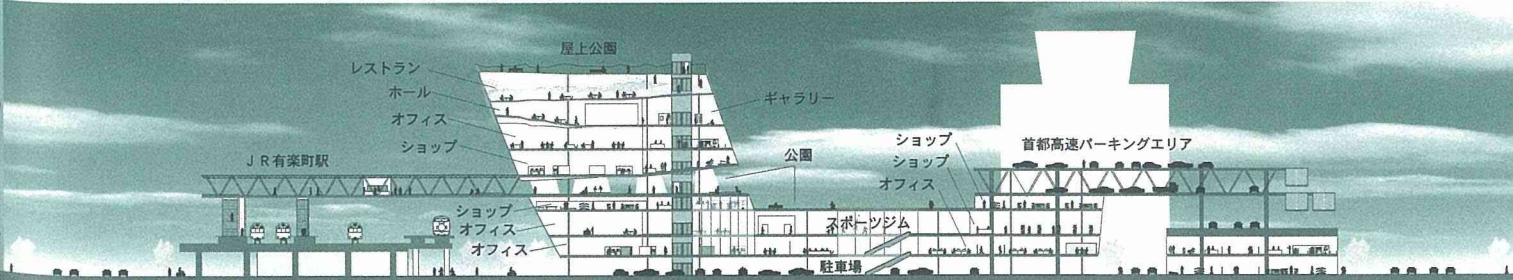
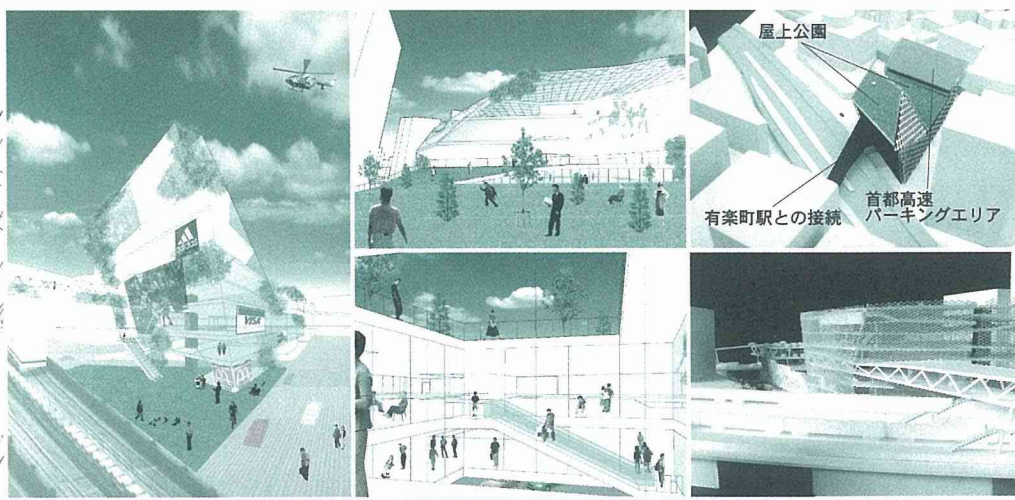
"unique universal space" Shintaro NOGAMI

幕張や台場にあるような、企業が直接物を展示してプレゼンテーションする場を、より日常的な商業地域に作りたと思った。積層するスラブが自由に動くことで、展示物に対応して空間を変化させ、平面的な展示空間にないダイナミックな空間を生み出す。

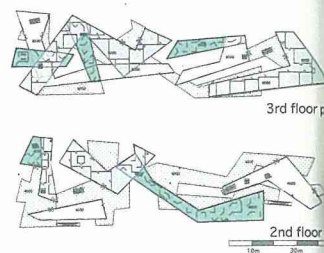
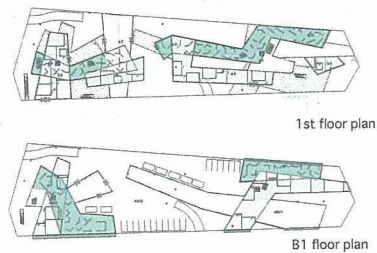
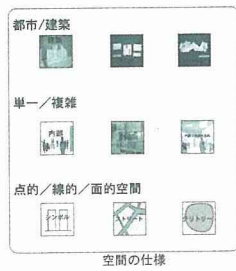
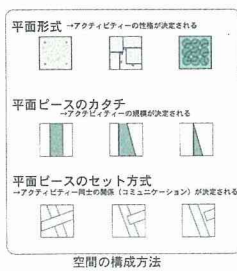
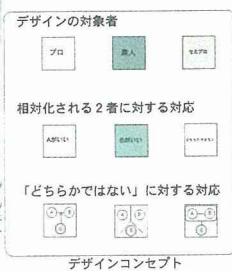
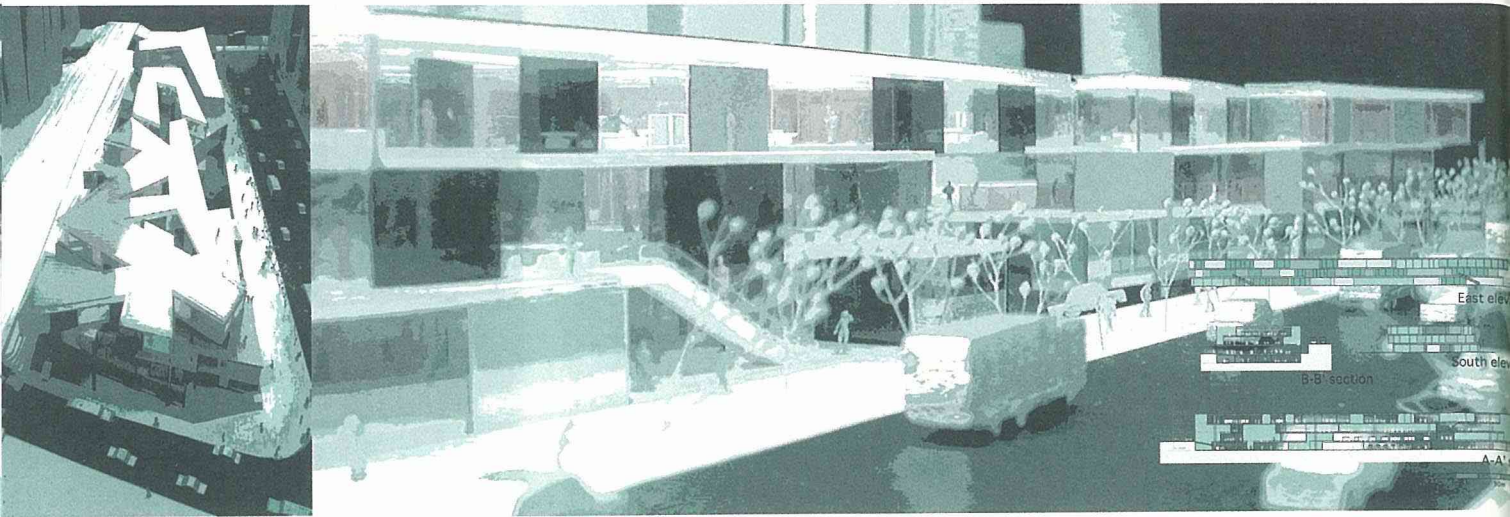
『YURAKUCHO PARK+PARKING』峰廣大輔 [下]

"YURAKUCHO PARK+PARKING" Daisuke MINEHIRO

有楽町駅を中心に銀座・丸の内・日本橋などの中継点となるような、公園・オフィス・店舗・首都高速パーキングエリアなどを含んだ複合施設の提案。単純なスラブの積層ではなく平面的・立体的、また視線的に機能が連続する計画とした。



SECTION



「挑戦建築」山口健児 (上)

"Start-architecture" Kenji YAMAGUCHI

まず「建築」を疑うことから始めた。その試行錯誤のなかで、完結された建築をつくるのではなく、使用者にデザイナーの思惑通りにデザインさせていくことを目的とし、そのために使用者にデザインの選択肢/出発点を提示した。

平成13年度卒業設計大岡山建築賞選出課程

There follows a report about the process of selection for the O-okayama Architectural Prize, from among 13 works that had passed an initial presentation selection. The O-okayama Architectural Prize, the Silver Prize, and Honorable Mention Awards were finalized by means of a two-tier open jury process.

平成13年度卒業設計は、趣旨提出(9/21)、中間発表会(1/17)、卒業設計発表会(全員:2/27)、卒業設計優秀作品発表会(13名:2/28)というスケジュールで行われた。ここでは優秀作品発表会に残った13作品から大岡山建築賞・優秀作品受賞者を選出する過程について報告する。

まず卒業設計発表会終了後、選出会議により、優秀作品13点が選出された。翌日行われた優秀作品発表会終了後、同じ会場内にて、優秀作品13点の公開審査が2段階にわたり行われた。

●第1回審査()内は得票数

各教官がそれぞれ推薦する作品を3点まで記名投票した。有効投票者数は15人。結果は以下の通りである。

玉井洋一(10)、倉林貴彦(8)、野地智美(5)、片柳恭志(4)、諸藤弘之(4)、加藤万貴(3)、高橋勇貴(3)、井上龍之介(2)、古閑めぐみ(2)、野上真太郎(1)、峰廣大輔(2)、山口健児(1)、田中盛志(0)

第1回審査の結果、玉井君と倉林君が大岡山建築賞に選出された。

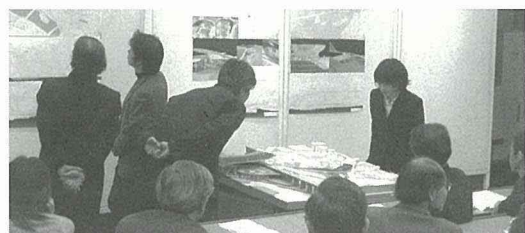
●第2回審査()内は得票数

次に、第1回審査で1~5票の得票を得た発表者に対し、各教官が推薦する作品を1点記名投票した。有効投票者は12人。

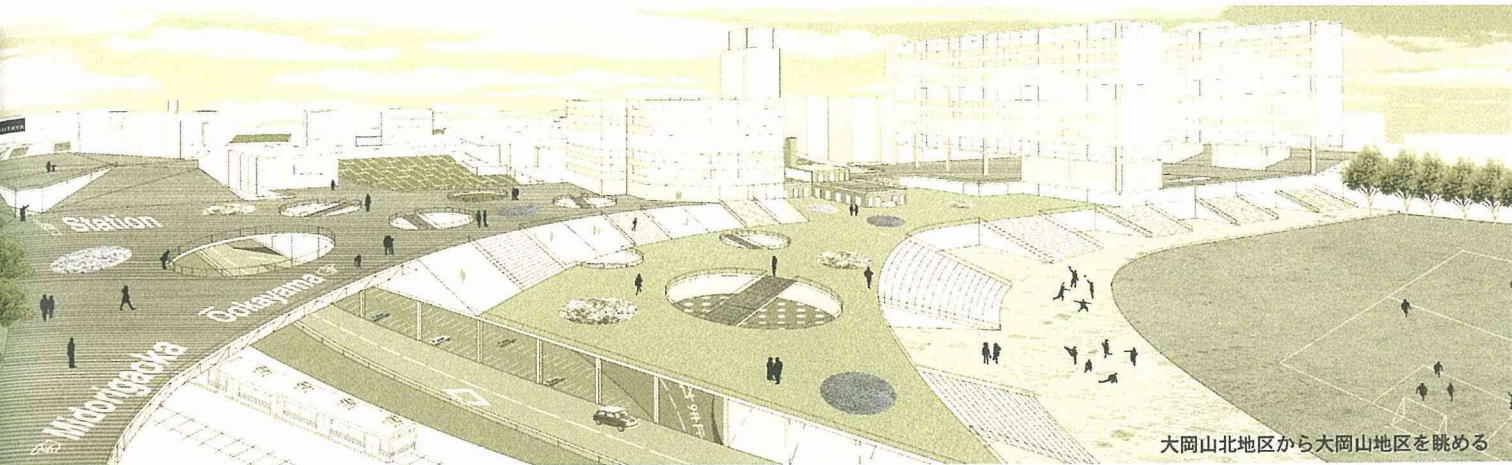
野地智美(4)、諸藤弘之(4)、古閑めぐみ(2)、片柳恭志(1)、高橋勇貴(1)

さらに野地智美君、諸藤弘之君2人を対象に、挙手による決選投票を行った。有効投票者は14人で、両者が同点(野地(7)、諸藤(7))になったため、両者が銀賞として選出された。

なお平成14年6月18日、TIT建築設計教育研究会第12回総会が、東京工業大学百年記念館で開催され、優れた卒業設計および修士制作に贈られる「大岡山建築賞」の授賞式が行われた。平成13年度は、大岡山建築賞が倉林貴彦君、玉井洋一君に、同銀賞が野地智美君、諸藤弘之君(すべて卒業設計)に贈られた。



学内優秀作品発表会における発表の様様



大岡山北地区から大岡山地区を眺める

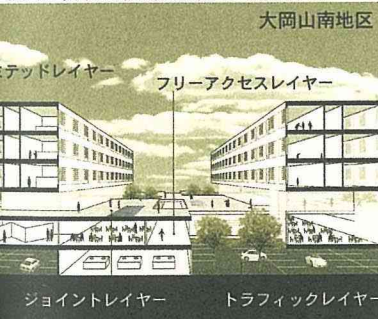


ロープ下のカフェから本館を見る

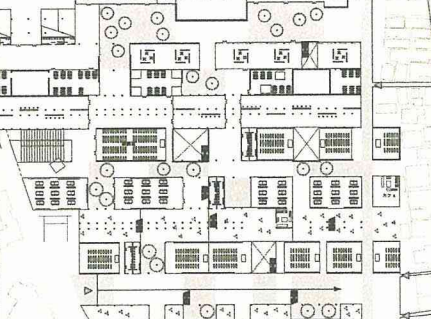


講堂横の新館の研究室からデッキを眺める

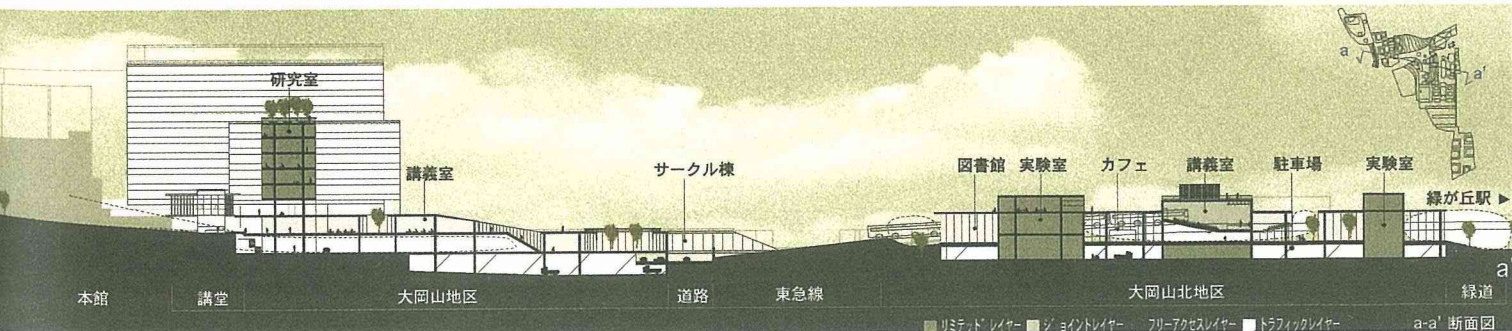
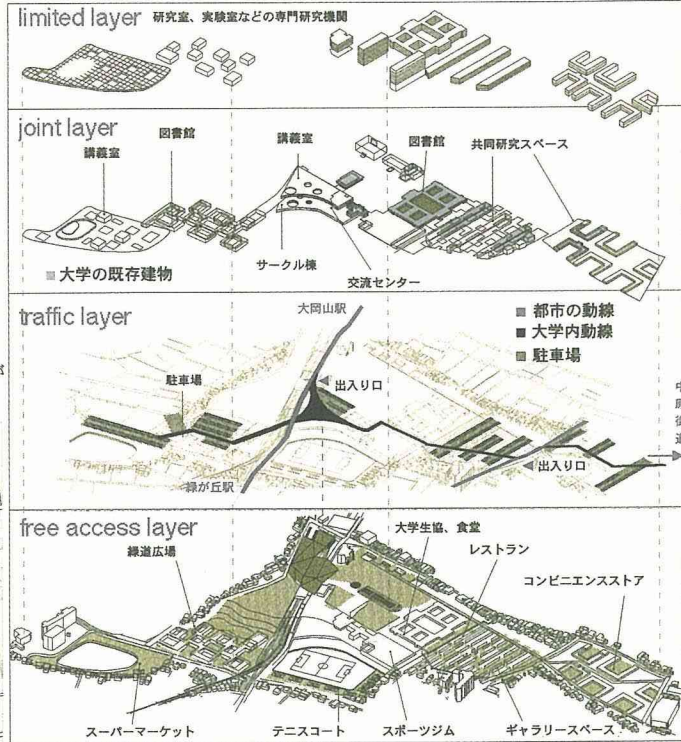
フリーアクセスレイヤー
フリーアクセスレイヤーは、開放的な外部通路や広場、カフェなどがあり、住民が自由に行き来できる場所となる。ジョイントレイヤーの機能の一部が接地し、住民の為の学習スペースもなり、大学が公共的な施設として機能する。



ジョイントレイヤー
フリーアクセスレイヤーとリミテッドレイヤー、また大学全体を連続させる層。この層には地域に開きうる共用スペースが連続し、学生の共用の場としてだけでなく、周辺住民のための公共スペースとしての性格をもつ。



ACTIVITY-LAYER-BUILDING-SYSTEM



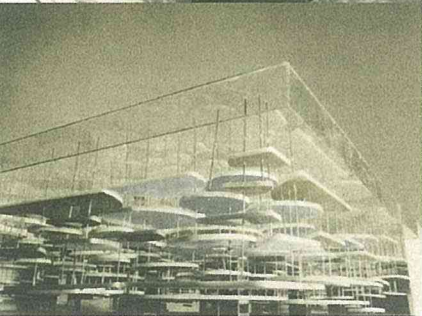
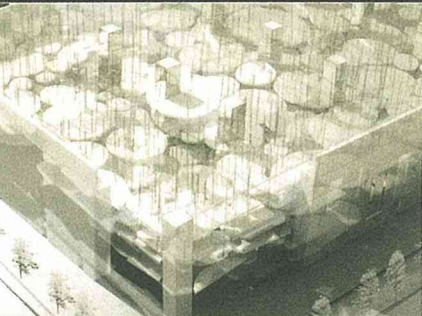
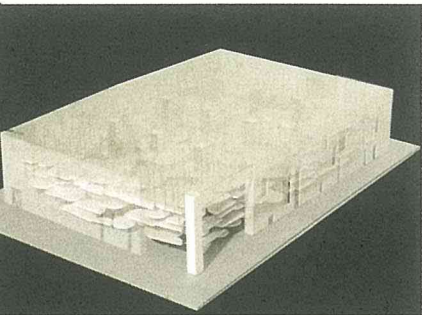
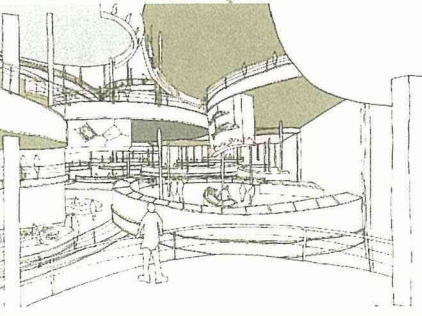
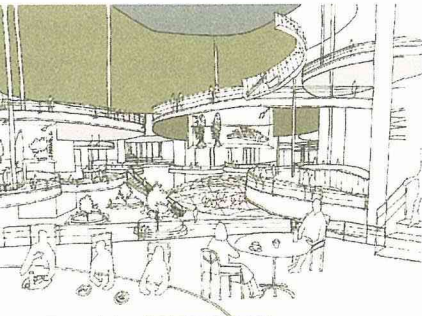
平成13年度修士制作

『アクティビティ・レイヤー・ビルディング・システム』 森永真由子

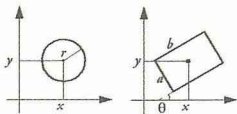
"ACTIVITY LAYER BUILDING SYSTEM: a case study in Tokyo Institute of Technology"
Mayuko MORINAGA

大学キャンパスは専門的な教育の場所であると共に、図書館や広場などの公共的な場所を持ち、周辺に開放しうる可能性があると考えられる。しかし大学キャンパスの多くは周辺との境界に塀を設け、開放の可能性を閉ざしている。一方、キャンパスの内部では研究分

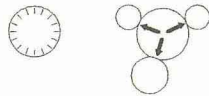
野ごとに地区や建物に分けられることが多く、異なる学問分野間の連携が妨げられている。そこで、本プロジェクトでは大学内の施設を活動内容の違いによりとらえ直すことで異なる学問分野を連携し、かつ周辺との関係を検討することから大学キャンパスが都市環境の一部として機能する層状の空間構成のシステムを「アクティビティ・レイヤー・ビルディング・システム」として提案している。ケーススタディーとして、都心の大学のひとつである東京工業大学においてキャンパス計画を行った。



■コンセプト



円は一つの長さで定めることができる
(幾何的性質) → スケールを意識する空間 (建築的意味)

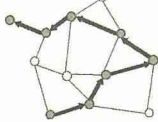


回転しても同じ形=方向が定まらない形 (幾何的性質) → 隣接を意識する空間 (建築的意味)

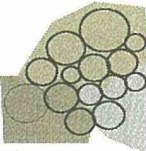
円を平面に隣接させて配置することでスケールと隣接からなる空間を提案する。

■スケールと隣接する空間からなる見本市を設計する理由

常に移動する方向を決める



ゾーンの設定に自由度がある



■色彩サイン計画

下から情報を得るため円裏側に色を付ける。色は業種を表している。

- 赤-音楽・映像
- 黄-工芸品
- 桃-本・写真
- 紫-体験コーナー
- 橙-服飾品
- 緑-食品
- 水-高級品
- 青-休憩どころ

■構造・設備計画

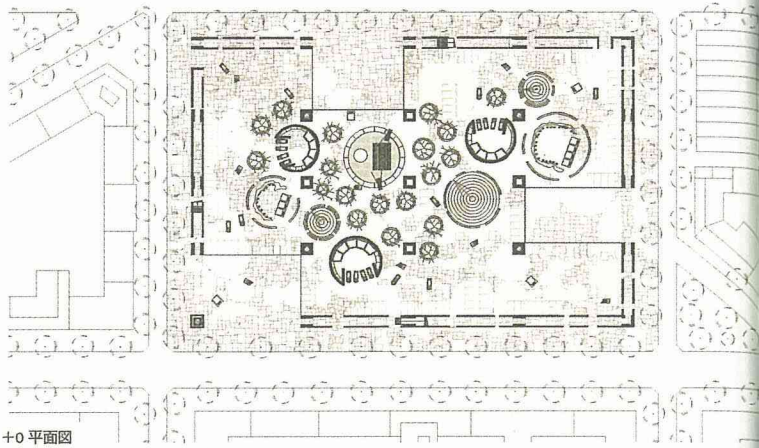
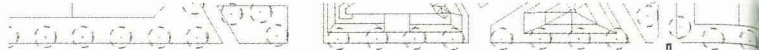
コア柱と外壁で上部のトラスを支持する。トラスから柱でスラブを吊る。コア柱に雨樋と電気設備、外壁の中に非常階段・トイレ・倉庫などを配置する。スラブ同士をつなぎ、外壁に力を流すことにより水平力に対処する。

■動線計画

建物に入り、すぐに多くの情報をつかめるように、一階を掘り、広場や植栽を穴の中に埋める。円の密度を上層を濃く、下層を薄くする。

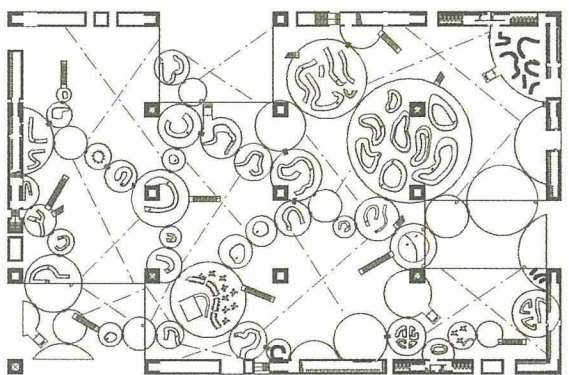
一階の歩車分離を、段差や車止めで行わず。車の曲率半径以下の円を配置して実現する。

搬入搬出は一階の荷解室から、地下の倉庫へおろす。円上で買った品物は一階の引渡し所で手渡されるシステムを採用する。

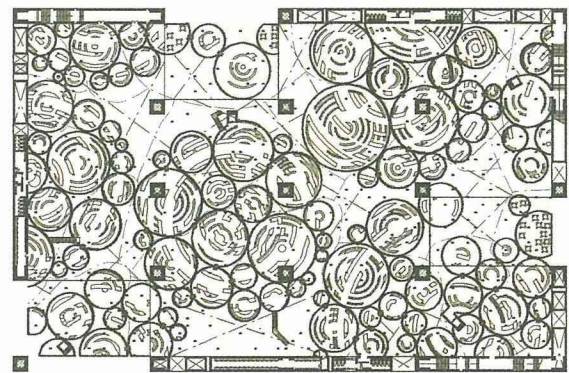


+0 平面図

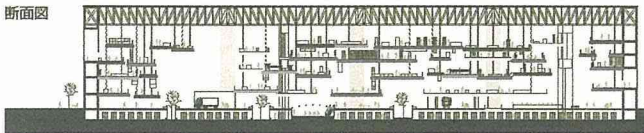
+6,000 平面図



+18,000 平面図



断面図



『円様建築~円の幾何学的性質の建築への応用』石原久一郎

"CIRCLE-ARCHITECTURE: application of geometric natures of circles to architecture"

Kyuichiro ISIHARA

多数の円形スラブが隣接して「多円吊見本市」を形成する。円の無方向性の性質から、あらゆる円上における方向は、円自身の形態によらず、隣接円の位置と訪問者の位置・向きにより規定される。

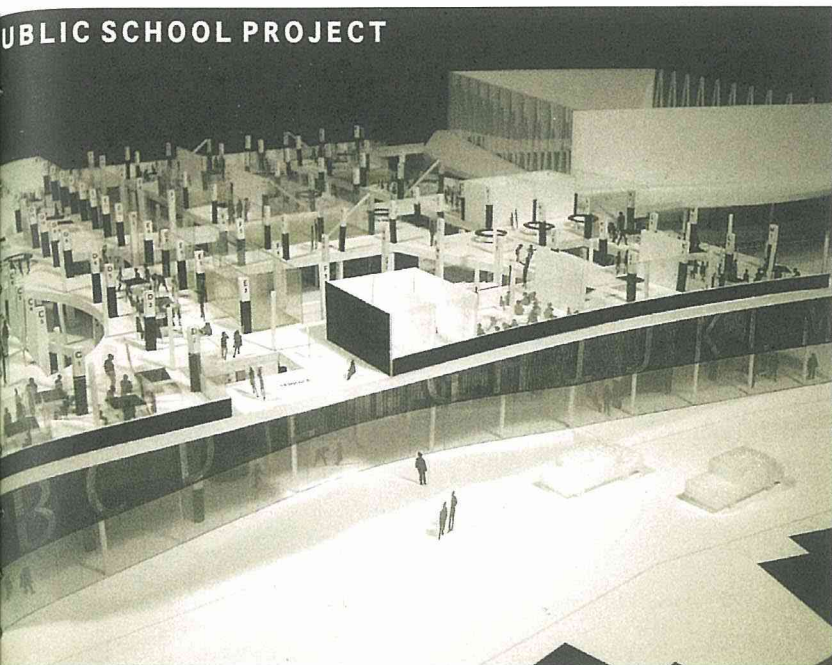
その他の主な円上空間の性質は、円の半径や隣接円の数により

決定される。簡単なルールでスケール・隣接関係を主題とする空間を実現している。

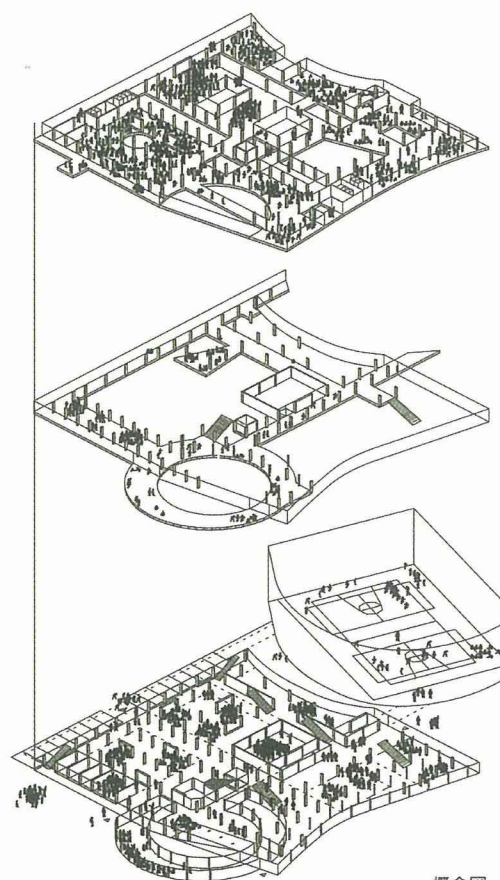
空間に散りばめられた数多くの円の間には秩序がない。円を通るルートにより、個人個人が異なる円群を認識する。

一見不自由と映る円の空間。その空間の根本的性格の決定に、実は訪問者の存在が参加している点が面白いと思う。(円様建築では他に「多交円図書館」「円屋根住宅」を提案)

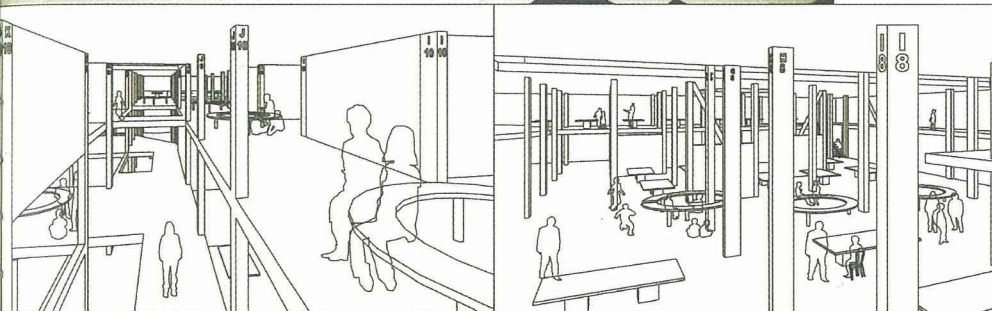
PUBLIC SCHOOL PROJECT



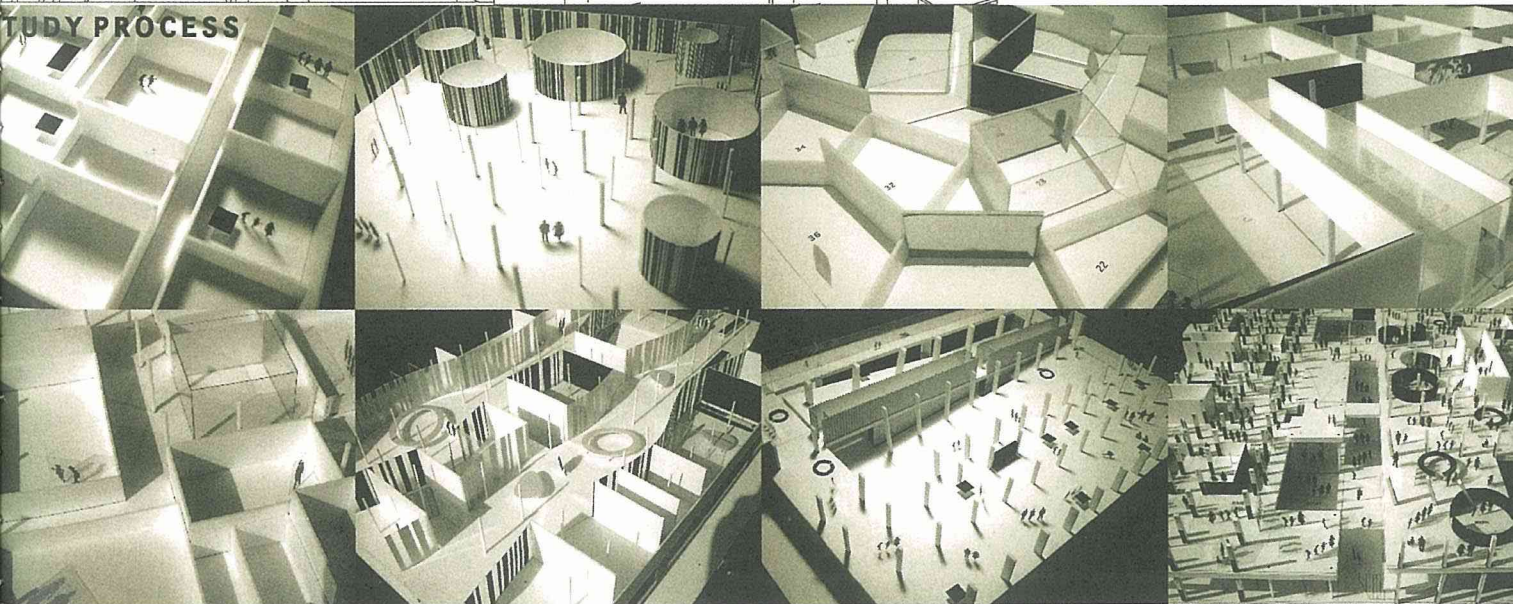
模型写真



概念図



STUDY PROCESS



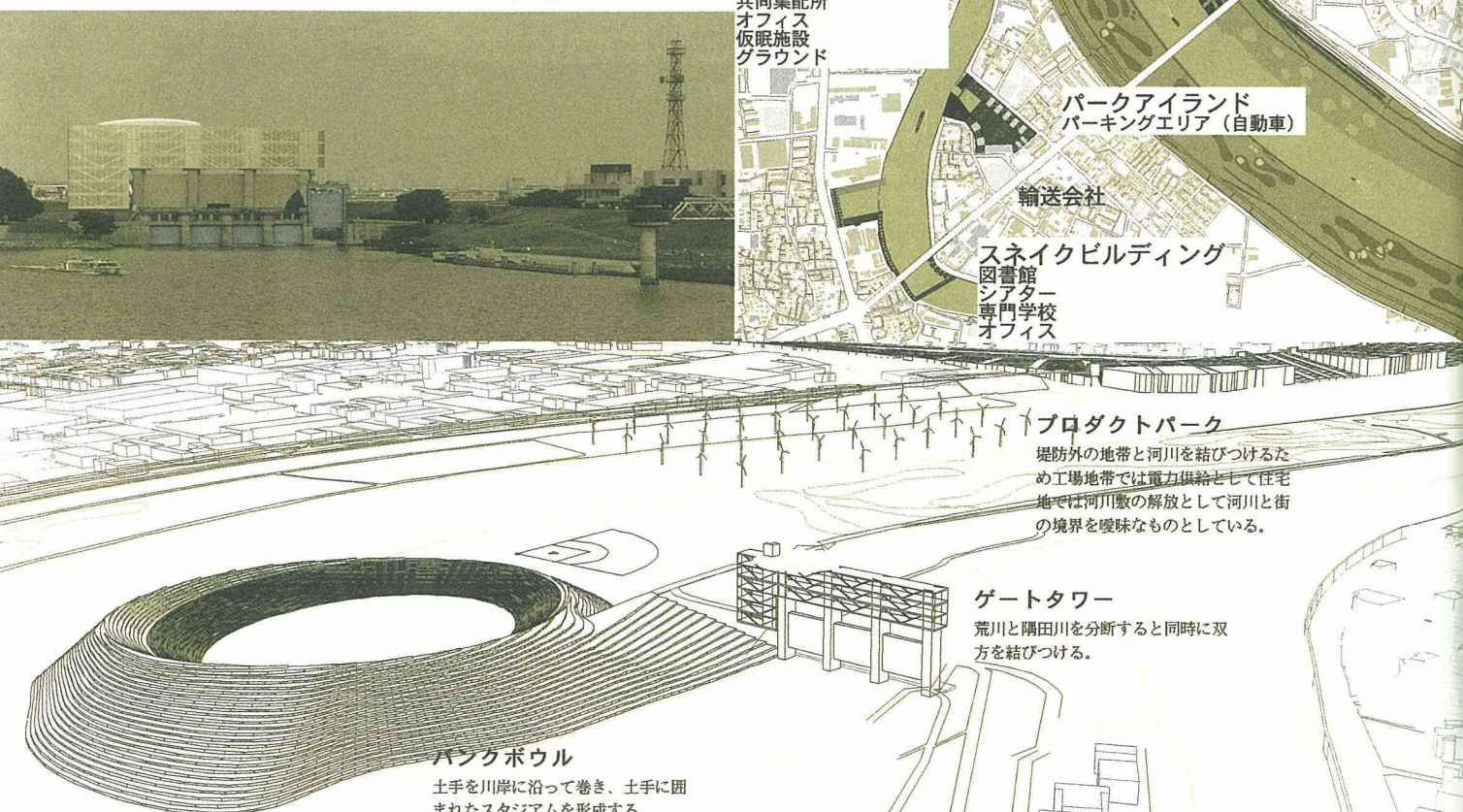
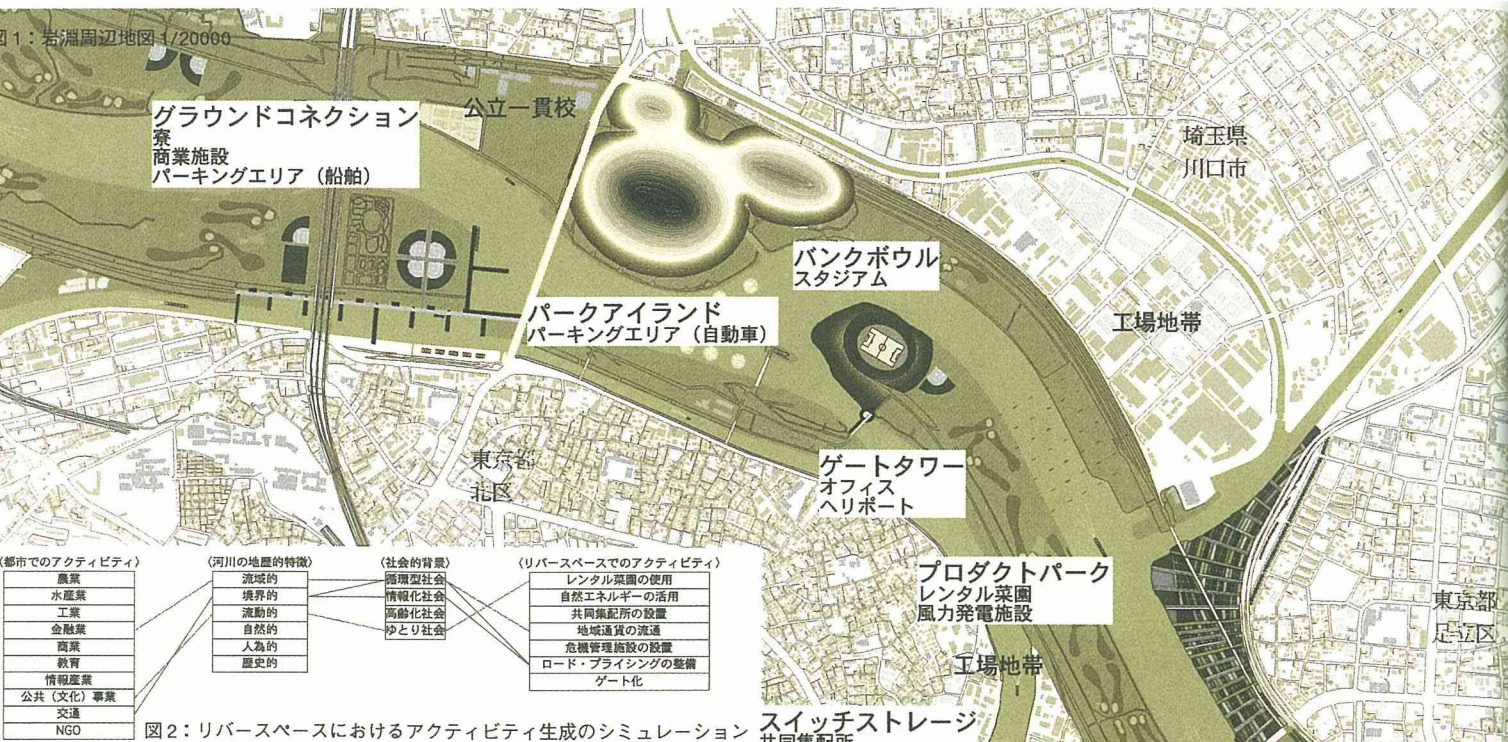
平成13年度修士制作

「パブリック・スクール・プロジェクト」藤村龍至

"PUBLIC SCHOOL PROJECT" Ruji FUJIMURA

複数の所属意識を維持する個人像の出現と、地域住民の教育への参加・自由通学区制・経験学習・チームティーチングなどの教育改革の進展は、学校を個人が所属与えられる場所から、社会的な関係性を選択・編集する場所へと、役割を変化させつつある。個人や集

団の所属を「社会的アドレス」、場所の概念を記述するものを「空間的アドレス」と呼ぶと、これら「アドレス」は複数化されつつある。本計画では、構造体を持つ反復性、規則性を新しい空間的アドレスのシステムとして利用することを検討した。個人や集団はその活動に合わせて空間の単位を柔軟に設定でき、その活動は他者から容易に検索され得る。学校建築を取り巻く諸問題を端緒として、成熟化、流動化しつつある社会における公共空間に対して、建築が果たしうる役割の一端を示すものである。



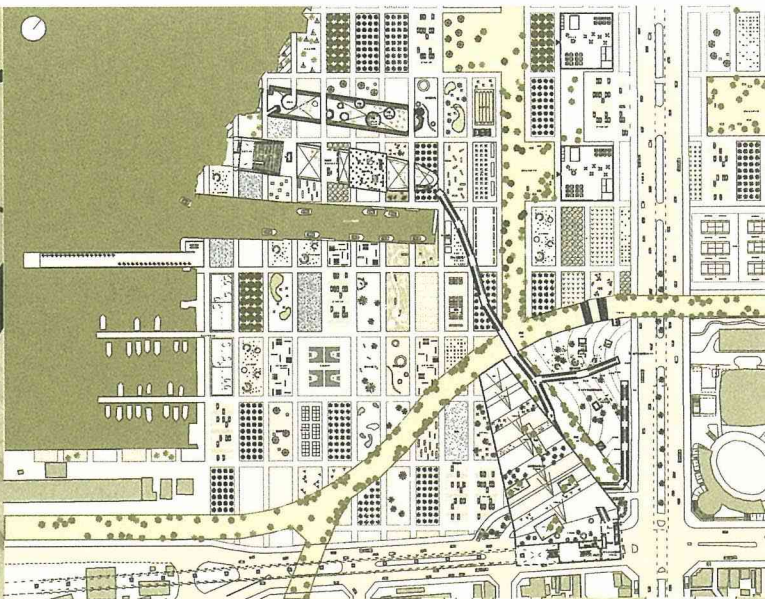
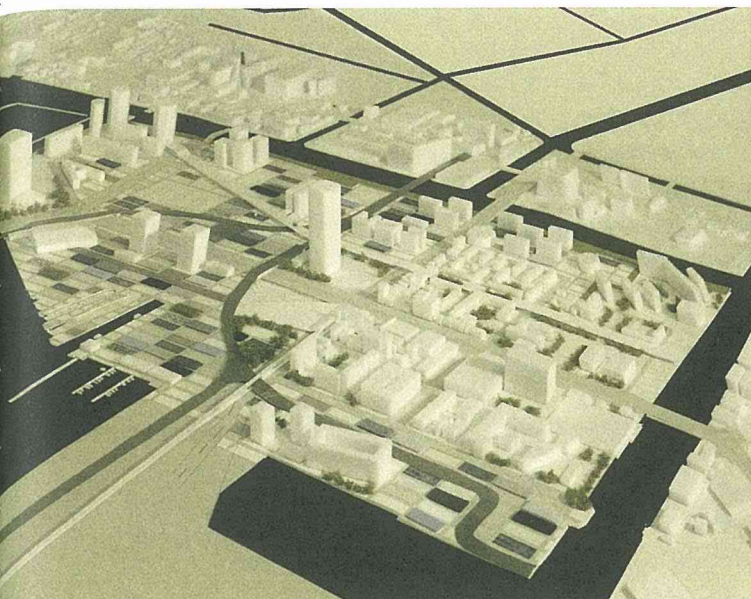
平成13年度修士制作

『リバー・スペース・プロジェクト—河川を中心とした都市空間の再編—』
高橋寛

"River Space Project: reorganization of urban space at river" Hiroshi TAKAHASHI

古来、河川は舟運による交通や娯楽など人々の活動の場であった。しかし近代以降の治水を目的とした堤防などの整備などが、河川と生活空間の関係を希薄にしてきた。しかし河川を周囲の都市環境との関係から見直すことによって、都市生活をより楽しく快適にする

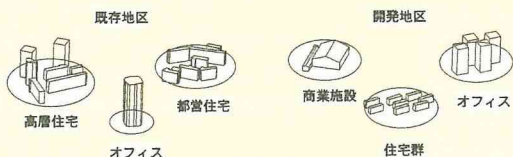
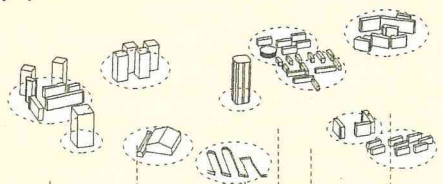
ことが現在強く望まれている。本計画では河川空間を空間的な特性による行為の生成によって快適で楽しいパブリックな場とし、河川の地形的特徴と隣接する都市環境の要素、水のかたち、物体と水との構成関係を検討することから成立するパブリックな河川空間を「リバー・スペース」として計画した。これは近代以降一元的に管理され空間的な魅力をそがれてきた河川空間に対して、建築が介入することによって多様な価値を導入し、河川空間のあり方を更新する一つの方法を示すものとする。



アイランド・タウン・ネットワーク

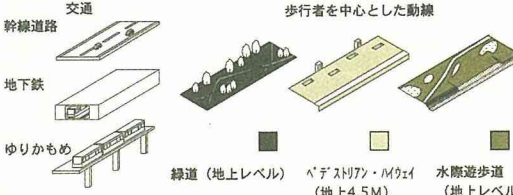
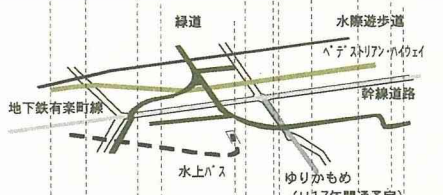
アイランド・タウン

アイランド・タウンは、開発に際して既存のアイランド・タウンの中で開発の対象とはならない既存の地区や、開発によって新たに形成される地区をさす。具体的には、超高層の住宅地やオフィスビル、都営住宅などがあ



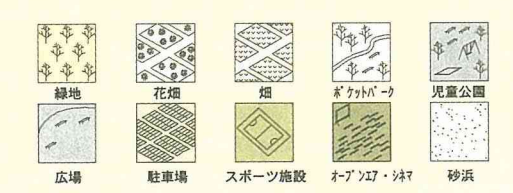
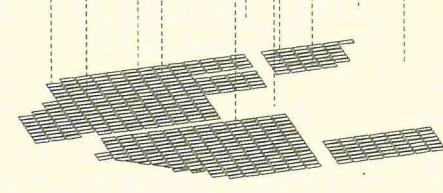
サーキュレーション

サーキュレーションは、アイランド・タウン相互を接続する既存の幹線道路と鉄道などの交通、歩行者を中心とした動線のことです。このように広域な地域において骨格となる動線（サーキュレーション）を形成するまたサーキュレーションは、広い幅員をもつことで、動線のためだけに機能するのではなく、スポーツやイベントなど多様なレクリエーション、屋外の場ともなる可能性をもつ。

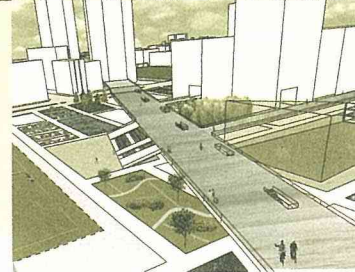
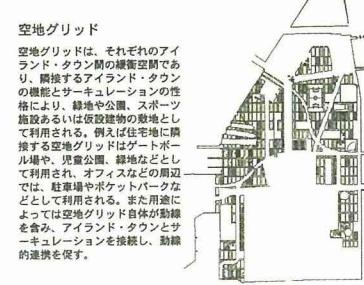


空地グリッド

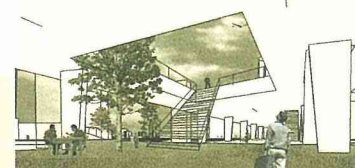
開発の予備地であり、細目状の留まりの空きスペースによって小さな空地グリッド（空地グリッド）に分割されるが、大きな空地が必要となる場合は、グリッドが複数統合することで対応する。空地グリッドはそれぞれのアイランド・タウンの縦断空間であり、隣接するアイランド・タウンの縦断とサーキュレーションの性格により、緑地公園、スポーツ施設などは仮設の敷地として利用される。



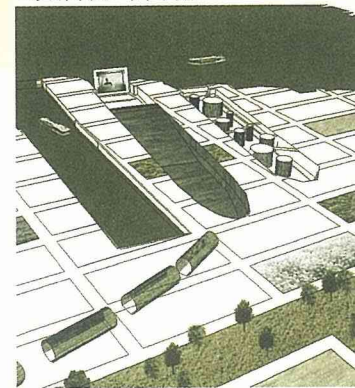
豊洲地区におけるアイランド・タウン・ネットワーク



ペDESTリアン・デッキ上部



ペDESTリアン・デッキ下部



ドック跡アートガーデン

平成13年度修士制作

「アイランド・タウン・ネットワーク」 姫野裕子

"ISLAND TOWN NETWORK: a poly-centric redevelopment plan in Tokyo bay" Yuko HIMENO

近年都市部の湾岸地域では、産業構造の変化と港湾機能の沖合化によって生まれる工場跡地や、未利用の埋め立て地が多数存在し、多くの開発の対象となっている。また従来の開発では、広範囲に及ぶ対象地全体を更地にしてから行う同時開発は稀であり、幹線道

路によっていくつかの地区に分割された部分的な開発が断続的に行われている。その結果パッチワーク状に隣接する既存の地区と開発地区が混在し、それらが空間的かつ動線的に十分に連携しているとは言い難い状況であるといえる。そこで本計画では、開発の段階に順応しつつ地域全体において各地区がネットワーク化し、連携することで機能する多心型再開発のシステムを提案を、東京湾岸の豊洲地区を対象としてケーススタディをおこなった。

ミュンヘン・東京同時進行
デザインスタジオ [e:home]

Concurrent Design Studio: Munich / Tokyo [e:home]

川合英介 [博士2年]

クラウディア・ヘルトリッヒ [修士2年]

Eisuke KAWAI (D2), Claudia HERTRICH (M2)



リチャード・ホールデン

Richard HORDEN

1944 イギリスレムスター生まれ

1969 AA スクール卒業

1975~85 ノーマンフォスター&
パートナーズ勤務

1985~ リチャードホールデン・
アソシエイツ設立

1996~ ミュンヘン工科大学教授

Entitled "e:home: Tokyo 2.6", an architectural design workshop was held from October 22 to November 6, 2001. The British architect Richard HORDEN, Professor of Design and Product Management at the Technical University of Munich (TUM), Germany, initiated collaboration between TUM and Tokyo Institute of Technology students working on the same topic.

Accommodating all necessary functions for student life into a cube of 2.6 x 2.6 x 2.6 meters was intended to show the possibilities that can emerge from minimizing space while retaining its habitable qualities. The 2.6 cubic modules were themselves subsequently integrated into "village" formations.

The design emphasis was put on effective structuring and zoning for adequate functional needs. In terms of conveying the minimalist theme, reduction of scale, weight, and cost were all to be considered--- as were aspects of creating a finished article and incorporating mobility with the final aim of producing not simply an architectural object but also a consumer product.

Twelve students took part in the two-week workshop at T I Tech, working in groups to develop five overall design proposals expressed in drawings and models. Video-conferencing with the TUM students working on the same assignment, but as a one-semester design, allowed mutual exchange of design ideas, opinions, and encouragement to both sides.

[e:home] 2.6×2.6×2.6mのCUBE

建築教育での新しい試みとしてインターネットを介しての東京とミュンヘンにおける同時進行プロジェクトが行われた。講師はドイツのミュンヘン工科大学からやって来たリチャード・ホールデン先生。期間は2001年10月下旬から2週間。本学からは修士課程の学生12名が参加した。一方ミュンヘン工科大学では10月中旬から1月上旬までの3ヶ月間で主に3~5年次の学生約50名が参加して、東京で進められたワークショップとはほぼ同じ内容の課題が行われた。

課題は「e:home」。eというのはeducational, electronic, emergency, entity, e:motionを表す。一辺が2.6mの立方体である学生用滞在型ユニ

ットを提案するというものであった。

戦略

この試みは、コンパクトな空間の中でいかに豊かな建築装置を提案することができるか、つまり、建築装置全般をいかに読み替え可能なギミックとしてそのキューブの中に納め得るかといったチャレンジであった。かつ、それらは装置として終わるだけではなく、その空間の質までもが求められている。そして、この質が、ギミックの動きに追従して変化してゆくのである。そこには確かに色々な可能性が秘められていると思われた。加えて2.6mという寸法。この寸法は既存のモジュールから逸脱しているため、寸法体系も新しく構築することが求められた。そこで、ギミック、空間の可能性、寸法体系についての私の解釈を聞いていただきたい。

[解釈1] 精神的な彼岸へ

ホールデン先生の課題に対する印象を僕は、レスイズモアからレスイズボアを乗り越えて、さらに、現代のレスイズモアを求めているのではないだろうか、と解釈した。では、その根拠をどこに求めるのか。

日本には、タウトがやってきて桂離宮を発見したように、近代建築が発見される以前にすでに「それ」が「存在」していた。日本は島国であり、加えて鎖国を経験している。これはどういうことかといえば、ディスコミュニケーションが文化を醗酵させ、オリジナリティーあふれる文化が生まれてきたということだ。そのあたりのことについては改めていう必要もないほど言及されている。

今回、ドイツからやってきたホールデン先生の来訪意義も、それに重ね合わせて考えると面白い。既成概念としてのレスイズモアを乗り越える為にやってきたドイツからの訪問者。実際、ホールデン先生自身も桂離宮や竜安寺の石庭に言及している。「少ないことでより多くのことを可能とする」あちら側への飛躍を目指して。

[解釈2] 彼岸への手段、エアロスペース

では、その行為を具体化するには何をどのように利用すればよいのだろうか？

先生の興味の一つとして「マイクロ、ライトアーキテクチャ」を挙げることができるだろう。ここで重視されることは、フレキシビリティ、使い易さといった機能面と、軽さ、素材感である。エアクラフトの機内デザインについても同じことが言えるだろう。エアクラフトはそれ自体の機体サイズも規定され、かつ軽量化が望まれる。ここで視点を少し変えてみると、エアクラフトを常に「移動」しなければいけないという宿命から開放したならば、建築として非常に魅力的な空間として立ち現れてはこないだろうか。それらはNASAでのホールデン先生達の試みにも見られる。一方日本は言わずと知れたマイクロプロダクト大国である。これら、日本の美意識の一つであるミニマル感覚と結びついて捉えられ、その結果としてこのドイツと

日本におけるワークショップが企画されたのではなかろうか。ホールデン先生は、日本において彼を感動させたものとして中銀カプセルタワー等を挙げている。これらメタボリストの残した作品は、「新陳代謝」を目指し建築の設備面や建築自体に新たな風を送り込んだのだけれど、それらを実現するためにはプロダクト技術が活用されなければならなかった。そしてまた、それゆえに新たな空間が実現されているのだ。



インターネットを介したプレゼンテーションの様態

2週間のスケジュール

1日目:[e:home]とはどのような課題なのか説明された。その後スライドレクチャー。先生の今までのプロジェクトやミュンヘン工大における学生達の「マイクロ・アーキテクチャー」「ライト・アーキテクチャー」に関する過去の作品が紹介された。各チーム1~3人にグループ分け。

2日目:作業の開始。グループミーティング始まる。徐々にタイトなスケジュールだということに認識し始める。急ぐしかない。

3~4日目:昼、ホールデン先生とエスキース。その後グループ作業を進める。

5~8日目:エスキースはなし。作業はすすめる。ホールデン先生一行は日本めぐり。僕達にとっては東の間の息抜。息抜!? いやいやとんでもない、押し進めなければ。

9日目:中間発表。ミュンヘン工大とのインターネットミーティング。

10~12日目:エスキース再開。ここまでで大枠はほぼ決定。ディテールの検討に入っていく。

13~14日目:最終プレゼンテーションへ向け作業を進める。

15日目:最終プレゼンテーション。インターネットを通じてミュンヘン工大でも同時放送。

[ホールデン先生とのワークショップ]

僕達が肌で感じた授業の様子はどのようなものであったのか？ まず、最初についておきたいのは、嵐のような二週間であったということ。いつもの調子で、寝起きの悪い低血圧のような態度で課題に望んでいた私は、目覚めに冷水をぶっかけられたような感覚に陥った。

グループ単位としては、まずホールデン先生とのエスキースに向けてディスカッションを繰り返す。そしてある程度まとまったアイデアをもって、ホールデン先生との決戦に望む、という構図である。エスキースにおいて要求された物は3つ。まず、図面、スケッチ。次にスタディー模型。どのような空間性が実現されているのか、というところが

ポイントになる。図面だけでもかなりつらいのに模型も一日でつくりかえなければいけないというのが更につらい。そして、最後はプレゼンテーションのうまさ。案を消化しきれているかどうかということがプレゼンテーションを左右する。ということで、自分の案をいかにうまくプレゼンテーションすることができるかということも評価の対象となった。エスキースの流れはまずコンセプトをいかに発展させたのか、それに応じてプロジェクトはどう進展しているのかを説明する。するとホールデン先生はこのプロジェクトのどの点が優れているのかということを指摘する。その褒め言葉がちょっと新鮮だった。「ファンタスティック」が定番。極め付けは「セクシー」。褒め言葉のオンパレード。それにつられて、つい頑張ってしまう。その言葉が欲しくて、こんなのどうだ!? って知恵を絞らう、そんな楽しみもあった。そして、そこから直すべき点、進むべき方向性について示唆してくれる。時には言葉少なく一枚のスケッチによって。時には厳しい意見によって。以上の作業の流れを簡略化すると、以下の通り。1~6を一日サイクルで繰り返す。

- 1) 各自アイデアをひねりだす
- 2) グループディスカッションで荒れる
- 3) 1と2を何回か繰り返す
- 4) ホールデン先生とのエスキース
- 5) エスキースについてグループで検討
- 6) 1に戻る

僕達のグループはとにかくディスカッションをして、その成果を反映させた各自のアイデアを持ち寄って、またディスカッションを繰り返した。熱くなった時には、ほとんど喧嘩のような議論もした。でも、とことんぶつかりあうと、突然解答がぴんぴんと生まれてきた。一人で作業しているとききづまって作業が続かなくなる時がある。誰しもが経験したことのあることだろうと思う。もしくは、ある解答にいき着いた時にその解答に自信をもてなかったりすることがある。でも僕達は、2~3時間で各自その状態まで案を詰めて、それからディスカッションした。そうすると、他のメンバーの案を見ている時に、突然ひらめいたり、ちょっとテコ入れるだけでその案が生まれ変わるという確信に瞬時に辿り着くことがある。不思議で魅力的な瞬間だ。そしてこの時、確実に次ぎのステップに飛躍したときの位置エネルギーの高まりを感じた。だがこれもホールデン先生のクリティークによって玉砕す

ることもあったのだけれど。

こういった速いペースでのエスキースの方法は、ホールデン先生がノーマン・フォスター事務所に務めていた時経験したそうだ。昼にフォスター卿とランチを共にしながらのミーティング。その後次ぎの日のランチミーティングに向けての炎の作業。その繰り返し。僕達もそういった実務の場を疑似体験した訳だ。

そんなこんなで中間発表の日はやってくる。発表といってもみんなの前で発表するだけではなく、インターネットを通じてミュンヘンでもその様子は伝えられている。システムとしては、インターネットカメラで取り込んだ映像を他方に送信し、その映像をプロジェクターで大スクリーンに投影するという方法である。音も送信する事ができるので、実際のネットミーティングとまではいかないが臨場感は強い。最終プレゼンテーションでも各チームがこのインターネットカメラの前でプレゼンテーションを行った。東京のスクリーンの中では多数の学生達があちらのスクリーンを凝視している。こちらはカメラに向けて説明する。ここが、このように動いて、ここがこう飛び出します、というように。

それぞれのプロジェクト

[Pull Box] オダ・川合・松田案

機能的な空間の変化を「引く」という行為に全て統一させて計画した。最初に全ての行為を引き出す為の「ベース」が存在し、その「ベース」からシャワーやキッチンやトイレが引き出される。それぞれの行為にマルチ対応するテーブルが中央に設置され、各行為をサポートする。全ての行為が行われない時にはまったくのフラットな空間が生まれ、四周の壁を引き上げることにより、シームレスに環境と対応する仕掛けとなっている。

[Rotating Box] 斉藤・佐々木・森谷案

生活に必要な機能を集約したボックスとパネルが小さなキューブの居住空間を形成する。メタリックな壁面と半透明のスクリーンにより覆われた何も無い内部空間は、住人の行為に対応して壁面から様々な装置を展開し組み合わせる事により、無機質な空の空間からあらゆる生活行為に対応した機能的な空間へと変化する。

[Movable Unit Box] 大西・金子・小池案

居住者はユニットボックスを移動することで空間に変化を与え、各用途空間を最大限に確保する。両面にそれぞれ空間の質に対応した異なるテク

スチャーをもつユニットボックスには、ベッドや収納などあらゆる機能が集約されている。これによりキューブの両壁面を開放し、大開口を確保することを可能にした。

[Cubic House 2.6 × √2] 神村案

平面を対角線方向にとることで視深度が深くなり空間の広がりを得る事ができる。またそれによって生じた床・壁・天井内に全ての機能を納める事で広い空間を得ている。シェルターも対角線方向にとり、2角のコアに天井・床・機能を収納できるようにする。

[Diagonally opposite functional cores] ヲダイビ・桜井案

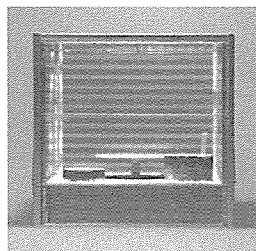
すべての機能を壁とコアに納める事により、とぎれない空の空間を獲得している。外部空間の重要性を考慮して、ウォールパネルから引き下ろせる縁側をつかった。



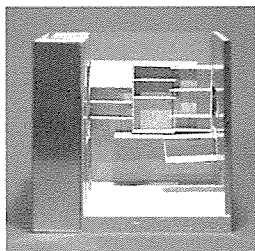
Interactive Space / Daniel Oswald, Miroslav Penev 案

本学のデザインスタジオでは時間の関係で、主にこのキューブ単体がデザインの対象となったが、ミュンヘン工大においては、これらのキューブを集合させてどのように構成してゆくか、非常用のシェルターとしてどのように使えるかということまでがデザイン対象となっていた。僕達のプロジェクトがミュンヘンでのプロジェクトに与えた影響については、全くの未知数である。彼らのプロジェクトにかすかに僕達の片鱗を見出し、それが、日本というインスピレーションを与えたものなのか、それとも全く技術的な視点のみに終始しているのか、読み込めば読み込め程、誤読の可能性は広がりゆく(ここでいう誤読とは、遺伝における突然変異のように、多様性を生み出す源である誤読)。

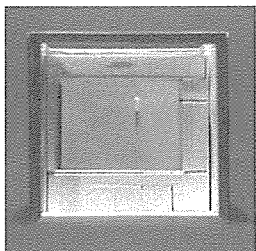
なお、本学におけるデザインスタジオの全作品と、ミュンヘン工大での作品のいくつかは、新建築住宅特集2002/03(p136~141)に紹介されている。



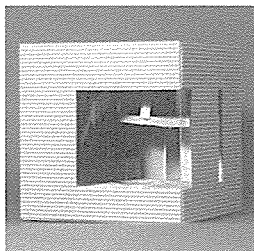
Pull Box / オダ・川合・松田案



Rotating Box / 斉藤・佐々木・森谷案



Movable Unit Box / 大西・金子・小池案



Cubic House 2.6 × √2 / 神村案



Diagonally opposite functional cores / ヲダイビ・桜井案

ヘルシンキ・東京同時進行 デザインスタジオ [One-Object]

Concurrent Design Studio: Helsinki / Tokyo [One Object]

松本 淳 [博士3年、RA]

Jun MATSUMOTO (D3, Research Assistant)

In summer 2002, "Helsinki-Tokyo Design Studio" was arranged between students of Helsinki University of Technology and Tokyo Institute of Technology. The topic was to design a temporary exhibition space for "one object", to be decided by the students themselves. The spatial component of the exhibition was specified to be a 2.4x2.4x6.0-meter box, namely an ISO-20-container.

The workshop took place in each locale from the middle of July. At the end of August, Professor Markku KOMONEN and his teaching assistant, Mikko SUMMANEN (former Research Student at TITech, 1996-97), came to Tokyo with six Finnish students and prepared their final presentation with our Japanese students for a week from August 21. In the critique, understanding the surroundings of sites emerged as a theme of great importance. The underlying aim of this workshop was to enable students to strengthen design, communication, and presentation skills.

スタジオレビュー

ヘルシンキ工科大学と東京工業大学(大学院意匠演習第一・八木幸二教授担当講義)との間で2002年夏(ヘルシンキの学生6名が来日して行われたワークショップ期間は8月21日~8月27日)、ヘルシンキ・東京同時進行デザインスタジオが行われた。マルック・コモネン教授、ミッコ・スマナン助手(1996年~97年、東京工業大学留学)が学生と共に来日してエスキスを行い、互いの大学で7月半ばより進めてきた課題の最終講評会(緑が丘4号館1階のロビーで8月27日に開催)にのぞんだ。建築を学ぶ同世代の学生が同じ設計課題に挑むことで、互いのデザイン力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力のレベルを把握することが主たるねらいであった。課題以外にも、コモネン教授のレクチャーをはじめ、ヘルシンキ工科大学の学生が東京工業大学の学生宅に宿泊したり、都内の建築エクスカーションを行うなど、交流が深められた。



緑が丘4号館1階ロビーでの展示の模様

オブジェクト

世界各地に現代美術館が次々と建設され話題を呼んでいる昨今、このような美術館を訪れる度、何だか不可解な感覚に苛まれるのは私だけだろうか。というのも現代アートというのは実に多様化して取りとめがなく、美術館自体に収まらない(インスタレーション)、〈サイト・スペシフィック〉といった作品が増えつつあるからである。

今回、フィンランド・東京同時進行デザインスタジオの課題設定に際して、建築家アルヴァロ・シザが描いた一枚のスケッチがそのヒントとなった。そのスケッチには、パブロ・ピカソの絵画「Guernica (ゲルニカ) 1937年作」と、彫刻「Pregnant Woman (妊婦像) 1959年作」の2つのオブジェクトのためだけに考えられた展示スペースの図面が描かれている。2つのオブジェクトをどのように関係付けて見せるかということ以上に、オブジェクトごとにそれに即した空間形状、プロポーションがあることを示唆していた。ピカソ作品であれば、それ自体が独立した世界を持ち、ある種のモニュメント志向が生じるゆえ、展示スペース自体には本来は左右されにくいものだが、敢えてそれに挑んでいるシザの姿勢に好感を覚えた。

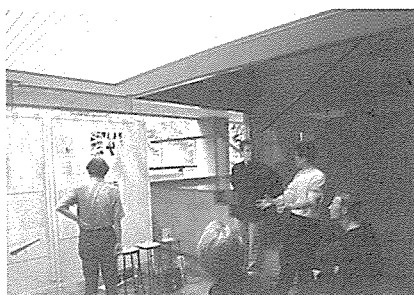
設計に際し、各学生には、ある一つの具体的なオブジェクトを設定してもらい、ヘルシンキと東京にある2つの具体的な敷地(ヘルシンキ駅前広場と渋谷駅ハチ公交番前広場)のどちらにも適応可能な展示スペースをデザインするという課題を出した。その際、よりリアルに展示スペース自体の移設可能性を意識してもらうように、2.4m×2.4m×6.0mのコンテナ(ISO20)サイズに収納できることを前提とした。オブジェクトとして選ばれたものは、携帯電話の普及率が非常に高い両国の社会的状況に配慮した(心臓ペースメーカー)や、ある有名ファッションデザイナーがデザインした(レース状に編まれたドレス)など社会性を帯びたものから、アート作品として価値のあるものまで様々であった。

サイト/ノン・サイト

今回選定した2つの敷地はその空間としての広がり方、行き交う人の数、取り囲む建物の様相が全く異なる環境にあった。それをどのように読み込むか、観察するかが重要なテーマの1つであった。Selina Anttinen案(写真)は、2つの敷地の対照的な状況に着目して、機構は同じでも、折り畳む速度を調整することで、映り込む像が各都市の移りゆく様相を表現することに成功していた。建築が単体で強い表現を持つヘルシンキと、大小様々な看板や液晶画面が建築の各壁面を覆ってまとまりを形成している渋谷の、ありのままの姿を浮き彫りしており、周辺環境を取りこむことに成功した興味深い作品であった。

思えば現代アートの分野で近年増えてきた〈インスタレーション〉は、展示スペース全体を一つの作品に見立てるもので、その辞書的な意味が「設置すること」であることから連想されるように、それ自体が置かれる場所、あるいはその置き方そのものがアートとしての価値を決定付け、我々に訴えかけるのである。こうした傾向は現代アートだけにはとどまらず、具体的な敷地を持ち、様々な周辺環境にさらされる建築設計の分野においても近年よく取り沙汰されている事柄である。

今回、移設可能性を要求する展示スペースに対して、周辺環境をも読み込ませるという相反するような課題設定を意図的に行ったが、今後も試行錯誤しながら、このような同時進行デザインスタジオを開講できればと思う。そのためには大学側の設備充実も求められるが、それ以上にこうしたデザインスタジオに意欲を持ってのぞむ、積極的な学生が増えることが求められる。



講評会風景(緑が丘4号館1階ロビーにて)



ヘルシンキ Selina Anttinen案



渋谷 Selina Anttinen案

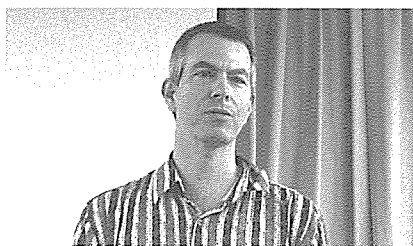
講演会レポート

「イメージの建築家」

Lecture: "Architect of the image"

ニール・ディナーリ [建築家, COR-TEX]

Neil DENARI (Architect, COR-TEX)



ニール・ディナーリ

Neil DENARI

1957年アメリカ・テキサス州生まれ。ヒューストン大学卒業、ハーバード大学大学院修了。パリ・ニューヨークにて活動後、1988年ロス・アンジェルスにてCOR-TEXを設立、現在に至る。1988年より南カリフォルニア建築大学(SCI-Arc)、1993年よりテキサス大学にて教鞭をとる。現在、南カリフォルニア建築大学(SCI-Arc)にて学長を務める。

レポート: 小池秋彦 [修士2年]

report: Akihiko KOIKE (M2)

"What is the role of architecture? This is what you will learn from my lecture." Professor Neil M. DENARI, a practicing architect and director of the Southern California Institute of Architecture (SCI-Arc), recently came to Japan and gave a lecture at TI Tech. He suggested the possibility of accepting information technology, and its various images, graphically in architecture at an early stage of the design. He showed a series of experiments drawn from his own past projects, talking in some detail about the concepts behind these and the conditions specified by his clients. Mr. DENARI used the terms "market", "commercial image" and "tactics" to articulate the nature of these works. He thus seems able to propose ways to integrate solid architectural forms within an ever-changing society, by means of exploring social movements as well as the commercial strategies enveloping architecture in general.

2001年9月25日、カリフォルニア州南カリフォルニア建築大学(SCI-Arc)で教鞭を執る建築家のニール・ディナーリ氏の講演がおこなわれた。学生達を引き連れた京都でのワークショップを終えての東京滞在ということもあり、当日は南カリフォルニア建築大学の生徒達も熱心に聞き入る様子が見られた。講演は進行中のプロジェクトを含め、彼が現在までに手がけた作品をスライドとともに、時系列順で紹介する形で進められた。

ディナーリ氏は1996年に東京の「ギャラリー・間」においてソニーコンピューターサイエンス研究所の協力の下、情報装置を用いた空間表現を、自身の作品のための展示空間に用いるなど、早くから情報メディアやイメージをグラフィカルな形

で建築に投影する事の可能性を示唆してきた。講演ではそういった一連の試みを初期のプロジェクトから、提案したコンセプトやクライアントに求められた条件などが詳細に語られた。

ディナーリ氏の設計において重要な位置を占めるものは、クライアントが空間に求めるイメージであり、氏はそれを効果的に表現する方法を設計行為やコンセプトを通して提案する。講演の冒頭で「建築のもつ役割は何でしょうか? それはこの講演の最後に君たちが理解する事です。」と氏は語った。一連の作品の説明に共通して氏が口にしてた言葉は「マーケット」「コマースイイメージ」「タクティクス」等々、氏は建築を取り巻く社会的動きや商業戦略の中に意識的にアプローチして、不動な建築が流動的な社会に融合してゆくためにはどうあればよいのかを提案し続けてきた。

東京国際フォーラム設計競技佳作入選など、その実績は世界的に知られるところであるが、意外にも現在のところ(家具や内装を除く)建築のプロジェクトとしては実現の機会に恵まれていない。氏の求める形態的な要求がシビアなアメリカのクライアントになかなか受け入れられない事や、現在の社会的経済状況の中で設計環境に恵まれないという事も考えられるが、氏はデザインが現実のものになるまでの努力を斬新なコンセプトの提案に注ぎ、視覚的にプレゼンテーションすることで世界的な評価を得てきた。誤解を恐れずにいえば、大学での設計活動に取り組む学生達の立場は、「実物」を相手にしないという点では同じであると言えるかもしれない。「建築の役割とは」と問いかける氏のメッセージは、そういった学生達の心に直接響くものであったに違いない。

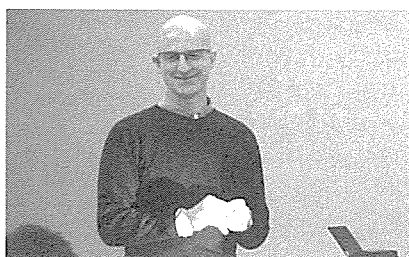
「構造材としてのガラス」

Lecture: "Glass as structure"

アラン・バーデン

[構造設計家, ストラクチャード・エンヴァイロメント]

Alan BURDEN (Structure engineer, Structured Environment)



アラン・バーデン

Alan BURDEN

1960年イギリス生まれ。ロンドン大学卒業、同大学院修了。イギリス空港公団、デューハースト・マクファーレン事務所、オヴ・アラップを経て、来日。1991年東京大学大学院博士課程修了。木村俊彦構造設計事務所、SDGを経て、1997年ストラクチャード・エンヴァイロメント設立。1997年~関東学院大学教授。

レポート: 田中盛志 [修士1年]

report: Seiji TANAKA (M1)

On January 17, 2002, Alan BURDEN, chairperson of the "Structured Environment", a structural engineer, gave us a special lecture at TI Tech. At the beginning of his lecture, he focused on the progress of glass production technology, and then he showed some of his own recent works whose structure was composed of glass. Through these we were able to grasp the potential of glass as a structural material. The speaker explained that one of the important roles of a structural engineer is to sublimate technical difficulties to design. "To demonstrate the efficient and dynamic limits of a given design is the chief contribution of structural engineering." From such remarks we understood the importance of defining and providing a bridge between technical limits and the design itself.

2002年1月17日、ストラクチャード・エンヴァイロメント代表、構造設計家のアラン・バーデン氏の講演が行われた。日本で活動を始めてから13年になるというバーデン氏は、流暢な日本語を操りながら、ガラスの製造技術の進歩がどのようにデザインを変えてきたかという事に焦点をあて、スライドとOHPによるその場でのスケッチを交えながらの講演であった。フロートガラス、強化ガラス、DPG、曲面ガラス、合わせガラスといったガラスをめぐる製造技術の進化をその都度エンジニア達がどのようにデザインへ昇華させてきたか、一言一言注意深く言葉を選んで語られる態度から、構造に対する真摯な姿勢やエンジニアとしての誇りが感じられた。またバーデン氏が近年取り組んでいるガラスを構造材としたプロジェクトも紹介され、規模の限界はあるにしてもガラスという素材が秘めている構造材としての可能性を感じることができた。また東京国際フォーラムのガラスキャンピーなどの作品に携わった氏の経験談から、材料の製造過程も含めた技術的な限界に対して、デザインを可能にするための、構造家の果たす役割の大きさを認識した。

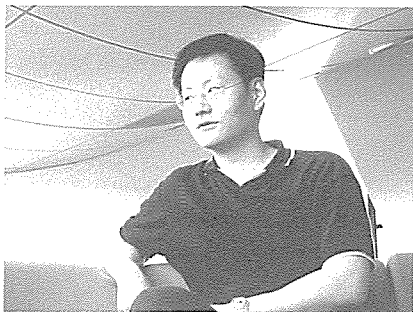
またフランク・O・ゲーリー設計のビルバオ・グッゲンハイム美術館やFOA設計の横浜国際フェリーターミナルを例に、構造とデザインの整合性をどう考えるかという質問に対し、グッゲンハイム美術館は構造的限界に達しているとはいえ、連続的に流れる面を構造的にシステム化、標準化できるような方法を選択し、その構造システムを成立させることに挑戦した横浜国際フェリーターミナルに共感を覚えるという。最小限の材料で最大限の効果が得られる構造を目指しているというバーデン氏の構造に対する根元的な姿勢が感じられた。「デザイン性の強い建築家と仕事をすると、いかに無駄を省き、能率のよい力学的な限界を示せるかが構造物として貢献できる事である」という。単に力学的な事にとどまらず製造過程までも含めた技術的限界とデザインとの狭間における、構造物としての日々の奮闘を感じることでできる貴重な講演であった。

海外建築事情: 上原雄史の近況

Reportage: Yushi UEHARA's recent works and ideas

上原雄史 (建築家, UPGM CITYTHOUGHTS)

Yushi UEHARA (Architect, UPGM CITYTHOUGHTS)



上原雄史

Yushi UEHARA

1964年生まれ。88年、デルフト工科大学文部省給費留学生。90年、東京工業大学大学院坂本研究室修了。89~93年、OMA勤務。93年、WEST8勤務。94~97年、de architecten cie勤務。97年、アーキテクチャースタジオ・ダニエル・リベスキンド勤務。98-00年、アノミマス・アーキテクチャー設立。2001年、UPGM CITYTHOUGHTS設立。現在に至る。

Yushi UEHARA graduated from T I Tech in 1990. In 2001, he founded his own architectural office, UPGM CITYTHOUGHTS, in Amsterdam. In his works, urban planning projects play an important role so far, one of which is an adaptive reuse of the Grolsch Beer Factory, in Enschede. Another recent project, twin buildings for office and laboratory, is currently under construction in a suburb of Amsterdam. He has long been interested in Mies's architecture, especially in terms of its strong contrast between a ruthless sobriety of construction and the "decorative" use of materials, as in the case of the marble walls of the Spanish Pavilion (1929) in Barcelona. Moreover, he considers that contemporary Dutch architecture, nowadays widely considered to be liberated from "serious" Dutch Constructivism before the 1980s, actually still remains strongly under the influence of classical, twentieth-century Dutch architects. In order to discover a new way of making architecture, he is now personally concentrating on "actual conditions", such as his clients' own requirements and the urban context of each given site.

以下の記事は、2002年7月に東京工業大学百年記念館で行われたインタビュー、および2001年8月にアムステルダムのUPGM CITYTHOUGHTS事務所で行われたインタビューの内容を青柳憲昌 [D1] が編集したものであり、文責は編集部にあります。

1. オランダで仕事をする

僕がオランダで建築の仕事をして、すでに14年ほどの月日が経つんだけど、2年くらい前に3人のオランダ人とパートナーを組んで「UPGM CITYTHOUGHTS」という設計事務所を設立して現在に至っています。その事務所は、パートナー同士の芸術的な自由を認め合った、比較的ルーズな組織としてスタートしたんだけど、それでも、僕が外国で仕事をしている日本人だということは、組織を立ち上げるときに大きな論点となった。

日本では最近、「大胆な」オランダ建築に人気があるみたいだけど、たしかにオランダ人には大胆な決断にスリリングな快感をおぼえるような、すこし変な傾向があるんじゃないかな。いずれにせよ、当然その「大胆さ」には大きなリスクがともなうわけで、そういう意味でも、オランダで仕事をするには大きなエネルギーが必要だと思う。それに、異質な文化や社会は知的なシステムとして自分のなかで再構築しないかぎり理解できないわけだけど、それを正確にこなすには膨大な注意と時間が必要になる。ただ、その一方で、オランダ人が抽出できないような問題を顕在化して差異を生み出す可能性も高いわけで、そのあたりが外国で仕事をする醍醐味と言えるかな。

建築をつくる時とても重要なのは、建築という物理的環境をつくることによって、可能になることや、逆に不可能になってしまうことを吟味することではないかと僕は思う。そして、そのためのクライテリアが確立されてゆく瞬間ほどエキサイティングなものはないと思うから、そういったプロセスをたえず見つめることができるような事務所にしていきたいと思っているんだ。

2. フローシユビール醸造所再生計画

まずは僕の最近の仕事について話すことにしよう。2002年4月から6月にかけて約3ヶ月ほど、エンスカデーというオランダの地方都市にある大きなビール醸造所の移転跡地の再利用計画に携わった。その敷地周辺は、数年前、花火の工場が大爆発して多数の死者を出した大惨事があった有名な場所なんだけど、現在廃墟となっている災害跡地の再開発の一環として、その一部であるビール醸造所跡地の再利用計画の依頼を受けたんだ。僕がその依頼を受けた時点では醸造所跡地が保存されることがまだ決定してなくて、それを残すかどうかを決めるために、都市計画の初期段階で建築家に具体的な提案をさせようとするものだった。工場を再生することを決めてから建築家

に設計を依頼するのではなく、そのような手続きをしっかりと踏むところがオランダ的と言えるね。

7ヘクタールほどの広大な敷地には、いくつもの工場建築が密集してるんだけど、僕がやったのは、もしあの建物が無くなったらもはや「醸造所跡地」ではなくなるぞ、という欠けがいのない建築を見つけてそれを残すことだった。この地方都市の主要産業だった繊維産業が衰退した今では、この街全体に活気が感じられなかったから、この巨大なビール醸造所が持っているような力強い都市的風景は残したほうがいいのではないかと思った。他の地方都市でも、同じような大工場が取り壊されたあと、町並みに何か欠けてしまったと住民が感じるのが最近よく指摘されているけど、このような大工場の風景は地方都市のアイデンティティを形づくっているようでとても興味深いね。

巨大な醸造所跡地が既存の都市の中に組み込まれていくわけだから、すでにある都市的文脈にそれをどのように関係させるのがこの計画の鍵になると思う。できるかぎりシンプルな都市の「ルール」をつくって街並みにまとまりをつくりながら、その都市の経済活動や居住環境を魅力的なものにしていくことが、この計画の目的だった。だから、建築家が一方的に未来のビジョンの押しつけるのではなく、低いリスクで実現可能と思われるような実際の計画[A] (fig-1) とともに、リスクが大きくて現実離れたような野心的な計画[B] (fig-2) の二つを提案することにしたわけ。

計画[A]は、直線によるグリッド構造が敷地全体を支配しているんだけど、ここでは西洋の一般的な都市に見られる「ブロック」の考え方を尊重して、完結したブロックが都市をつくる一つの要素になるような提案をした。このような巨大なプロジェクトの実現性を考えて、まず初めに都市のブロック(外殻)をつくって、そののち段階的にブロック内部を開発するような、時間差をいかした方針をとった。それから計画[B]のほうは、湾曲した「小道」をランダムに敷地内に配置して、バブルのような平面形をしているたくさんのかたまりが、既存の建築の一つ一つを包んでいるような提案をした。ここでは、敷地の大部分を占めている既存の地下施設を、サービス用の空間として再利用することにして、かわりに地上部分を歩行者だけに全面的に開放するようにしたんだ。

3. 都市計画

この醸造所再生計画もそうだけど、これまで僕は、OMAではリールの都市計画に、WEST8ではボ

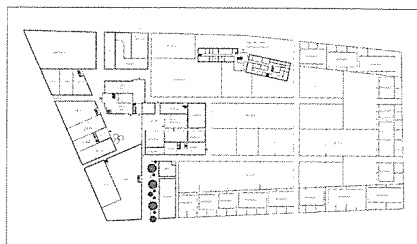


fig-1: フローシユビール醸造所再生計画[A] (地階平面図)

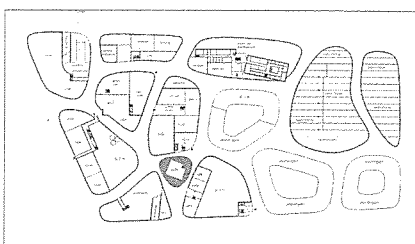


fig-2: フローシユビール醸造所再生計画[B] (地階平面図)

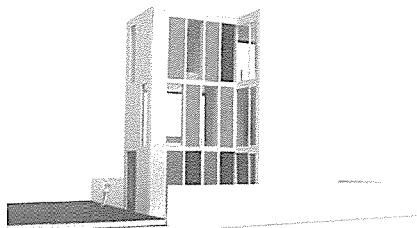


fig-3: フローニンゲン郊外の住宅 (模型写真)

ルネオ・スポーレンブルグ計画に携わったりして、継続して都市計画の仕事をしてきた。「UPGM CITYTHOUGHTS」という事務所名にもそれが現れているけど、僕は都市計画的な視点を欠かさないように建築を設計しています。

一般的にオランダでは個人住宅を設計する機会がほとんど無いわけだけど、たまたま僕はウィール・アレツがマスタープランを担当した、オランダ北部のフローニンゲン郊外にある宅地開発地区に個人住宅を設計する機会に恵まれた(fig-3)。この計画には、もともと個人住宅の建設を公共的なビジョンのもとに推進するようなコンセプトがあったわけだけど、例えばここでも僕は都市計画的なアプローチで設計した。

他にも、アムステルダムにある駅前広場の地下に巨大な駐輪場をつくるという計画に参加したこともある。この『ザウドブレイン計画』(fig-4)では、地下には駐輪場とともにファーストフードやギャラリーなどを配置して、地上の広場が地下の駐輪場に連続的に繋がっていくような提案をした。ルチオ・フォンタナの絵画作品のように、鋭いナイフで地表を切って、その切り口が駐輪場の出入口になっているようにしてある。

4. オフィス建築

ところで、アムステルダム郊外の高速度道路の周辺に設計したオフィス建築がもうすぐ竣工するので、次はその計画について話そう(fig-5)。この計画は、基本的に同一の平面プランを持つふたつの建物(オフィスと化学研究所)の設計するものだったんだけど、ここでは、ふたつの建築の機能上の相異に由来する、例えば階高の違いなどの微妙な差異を有効なツールにして設計した。僕は、昔からドナルド・ジャッドやエドワード・チリダの彫刻が好きんだけど、この計画では彼らの作品のような強い彫塑性を持った建築を設計したかったんだ。そして、さらにそれを銀色のメタリックなスキンに包んで「魅惑的な機械」みたいな建築をつくりたかった。

またこの計画は、ミースの『ローザルクセンブルグ・モニュメント』(1926, fig-6)の彫塑的な建築形態からインスパイアされた側面もある。そのミースの作品は、煉瓦のファサードに彫りの深い凹凸をつけているモニュメントなんだけど、建物の全ての立面がそうになっているのではなく、そのうち二つの側面は煉瓦をフラットに揃えてある。それらのいわば「背面」をつくることによって対比的に彫塑性を高めているのがうまいな、と思ってね。

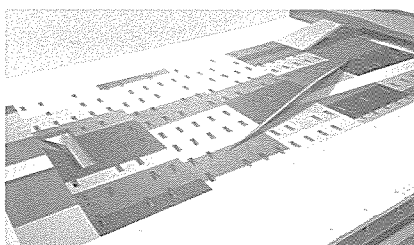


fig-4: ザウドブレイン計画(模型写真)

5. ミースとオランダの近代建築

いまミースの話が出たけど、ある意味で建築をシステムとして抽象化したミースの建築の「汎用性」に僕はとても関心がある。ミースは合理的で古典的な彼の建築に、いつも曖昧で繊細なものを並置させていたように僕は思う。例えば、オリジナルの『バルセロナ・パビリオン』(1929)の入口の壁面には、牡丹雪のような斑点が表面に浮いている、とても装飾性の強い大理石が使われていた。ミースの建築は一見すると直交する直線と面のみで構成された冷徹な建築のように見えるけど、実際に建築が物質化した瞬間、彼の建築はすごい装飾性を伴って現れてくる。そのような装飾的な要素も、おそらく彼の建築的システムに組み込まれていたはずだと思うんだ。ミースの建築に限ったことではないけど、実際の建築と対峙して自分なりに何かを発見しようとするのはとても大切だと思う。それを無視してしまうと、実際に建物が建っている意味が無くなってしまふからね。

オランダといえば「グッチ・モダニズム」でも有名だけど、例えば『シュレーダー邸』(1924)のG.T.リートフェルトは、誰でも手にとることのできるローコストな素材をアイロニカルにレトリックとして使って、最終的に新たな美に到達した。身近な材料を使うという非常にプラクティカルなところがオランダ的と言えるね。ガス管をつかって椅子をつくったM. スタムもそうだけど、彼らは、はじめに「日常的な材料を使用する」というルールを設定している。つまり、過去の様式を使うという限定のしかたを否定したオランダの建築家は、かわりに日常的なものに限定するものをシフトしたわけで、オランダのモダニズムはそのようにして歴史的なものから離脱した。いずれにせよ、大事なことは、私たちの身近にあるものを使うということだろうと思う。

戦後に出てきたオランダ構造主義の建築家のなかでも、特にアルド・ファン・アイクの建築はパワフルだと思う。もう壊されちゃったけど、平らな壁の間に円権が挿入されている『ゾンスベーク・パビリオン』(1966, fig-7)などの小さな計画案が特にいいね。ファン・アイクはオランダ構造主義の創始者とされるけど、彼の建築にはその後の構造主義に取まらないものがたくさん併存しておもしろいし、彼の建築は現代のオランダ建築にも影響を与え続けている。例えば、OMAの『フランス国立図書館』(1989)は、『ゾンスベーク・パビリオン』の平面的ダイアグラムを断面的に置換したものだし、おそらくコールハースはファン・アイクの建築からエッセンシャルなものを抽出し、そ



fig-5: アムステルダム郊外のオフィス(外観イメージ)

れを適用したのだろう。

6. 今後の課題

僕がオランダにきた1988年頃は、ファン・アイクやH. ヘルツベルガーなどの非常にシリアスな建築がまだ支配的で、ちょうどコールハースが出てきたような時期だった。コールハースが、新たな社会への提案やモダニズムの自由な解釈などによってオランダ建築に新旋風を起こし、構造主義が作りあげたドグマを解放した結果、現代のオランダ建築はとても個性的なものになった。ただ、もともと個性を持つことがよいという価値がないオランダ社会は、ある意味でとてもフラットで、公益に回帰していくものを好む社会なのだろうと僕は思う。いずれにしても、オランダ建築はドグマから解放されたばかりなんだけれど、その状況で何ができるかという問題はまだまだ今後に残されている。

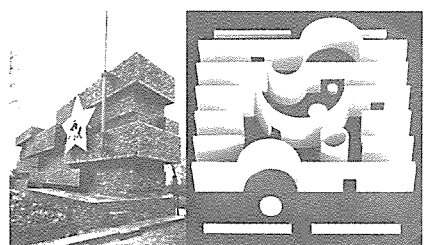
以前にOMAで同僚だったケース・クリスティアーンと共同設計した小学校建築では、形態よりもプログラムが先にあったんだけど、最終的にできあがった形態の美意識ではリベスキンドに影響されていたと自分でも思う。僕は以前、彼の事務所で働いていたんだけど、「建築の彫塑性を経験のレベルで捕らえる視線」を彼から得たと思う。一方、OMAで働いて、「建築を可能性として見つめる重要性」を学んだんじゃないかな。ただ、リベスキンドにせよコールハースにせよ、それぞれの考え方には限界があると僕は思うから、彼等の建築からは距離を置いている。それでいま現在は、施主の要求や都市的な条件といった現実的な状況だけに直面して、そこに建築的なものを発見するようなアプローチで設計しています。

ところで、僕の若い頃はオランダ建築が今のようにポピュラーではなかったから、そのぶん自身で発見するものも多かったね。今の学生はよく旅行したり海外に出かけたりするけど、既知のものを再確認することにはあまり意味がないので、自分の眼で見て自分の感覚で建築を感じてほしいと思う。それと、建築を自分の眼で確認したあとは、さらにそれについて友人と議論したりすることがとても大切なんじゃないでしょうか。

[図版/出典]

fig-6: Monument to the November Revolution / Riley Bergdoll, "Mies in Berlin", The Museum of Modern Art, NY

fig-7: Sculpture Pavilion. Sonsbeek Exhibition / Vincent Ligtelijn, "Aldo van Eyck Works", Birkhauser Publisher, Basel



左: fig-6, 右: fig-7

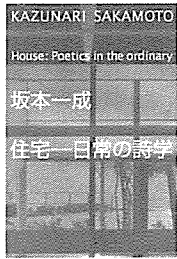
書評

Book review

「坂本一成 住宅——日常の詩学」

TOTO出版

"KAZUNARI SAKAMOTO House: Poetics in the ordinary"



長岡大樹 [博士3年]

Daiju NAGAOKA (D3)

Book Review [KAZUNARI SAKAMOTO, House: Poetics in the Ordinary]
KAZUNARI SAKAMOTO, House: Poetics in the Ordinary presents Professor Kazunari SAKAMOTO's collected works (buildings and essays) from 1969 to 2001. This architect has succeeded in freeing the space of architecture from multiple constraints, and he believes his space now to be a place constructed within the absolute commonality of the "everyday", and thus also within the duration of ordinary time. In this book one comes to see how the "ordinary" in architecture is composed of a twofold relation of space and temporal continuity. Finally, this relation specifies both persistence and change in the visual surface of his architecture. Professor Kazunari SAKAMOTO's new book, therefore, endeavors to show the arrangement of all that is "ordinary" (in this special sense) in his own architectural works.

本書の冒頭、House SAの内部の様子に目を奪われた。古い器や置物、本、手の込んだ織物、オーディオ機器、自家用車など所持する物の隅々まで目が行き届いて心地よい。階段状に連鎖した床、板状の柱が並び棚に見える壁面や開口部、周囲に拡散して広がる天井によって、内部はほどよく分節されていて、どこにも視線が集中する場所が見られない。つまり視線を受け止める正面がない。そのせいで部屋中に並んでいる器や本をひとつひとつ順に見ていくのと同じまざりて建物の内側も眺めることができる。ここでは物を見る目と建物を見る目をそんなに変える必要がない。だから物を前にすると壁や天井は支える、囲むといった物理的な機能から解放されたひとつながりの背景に見えてくる。

物は建物に収まって見えるのが普通だとすると、この内部の様子はそれとは少し違う。様々な建築的な工夫によって、物と建物が浸透しあった光景がそこにはある。物はこの住宅ができる前からあったことも考えると、この内部の様子を、住宅が物を収容しているというより、物がこの住宅に辿り着いたと言いたくなる。今までの生活のなかで日常化した物と新しい住宅、それらが浸透し

あったこの場所には、「今まで」と「今」、そして「これから」の区別がはっきりしないひとつながりの時間があるように思える。

本書は著者である坂本一成先生のこれまでの仕事をまとめたものである。タイトルは「住宅——日常の詩学」。物が入ったHouse SAの内部を目にすると、いくらか抽象的なこのタイトルが自分にとってずっと身近なものに思えてくる。ひとつながりの時間と建物がいっしょにある状態。その状態を保ちながら新しい建築、世界をつくること。そうやってつくることの一貫性を本書で紹介されている住宅に感じた。

House SAでひとつながりの時間を目にしたと思えたのは建物の内部であったけど、似たようなことは見えている世界の色々なところで起きている。たとえば住み慣れた街。くりかえし目にすることでその特徴も特徴と思えなくなった街は、注意でもしないと普段は意識されることはない。でもおやっと思いが向かうことは時々はある、その向き先は塗り替えられた壁や取り替えられた看板といったとるに足らないほどの以前との違いであったりする。そんなときその違いの小ささに驚くと同時に、「今まで」と「今」があったことをふと思ひ知らされる。このとき以前の壁の色を覚えていないにもかかわらず色の違いに気付いたということは、新しい色と古い色の照合を頭のなかではしていない。おそらくこのとき、壁の色そのものの変化ではなく、くりかえし見てきた街が今までとなにか違うということに意識は向かっている。たくさん変わらないもの、持続するものなかにわずかにあらわれた変わったもの、その状態を見ているのだと思う。

ひとつながりの時間を見ることは、こんなふうにある対象のなかに、今までと「変わらないこと」と「変わったこと」の両方を同時に見るることなのではないかと思う。そのときある対象が変わらないことを今まで見てきた経験が大切で、それがあからこそ今変わったことを見ることできる。このとき「今まで」は「今」から分離されたもうすでないものとしてあるのではなく、今と同じようにここにあらわれて見えている。見ることと時間は実はこんなかたちでつながっているのだと思う。

著者の住宅では、普段の生活で目にしたことがあるようなこと、つまり変わらないことが保たれながらも、新しい試みがなされていることが少なくない。たとえば著者の住宅が、「家型」という歴史的にもずっと変わっていない家らしいかたちをしてきた頃、住宅の内部では次々と新しい部屋のつながり方を提案されていた。また、ベニヤ板、舗装ブロックといった身近な材料が、住宅建材として目にしたことのない使われ方がなされていることもある。どちらの場合も、ありふれているようにてなにか今までと違って見える簡素で美しい住宅が実現されている。こうした住宅では変わらないことと変わったことを同時に目にすることで、自分の存在が今この一瞬だけではなくひとつな

がりの時間のなかにあることを知らされる。その瞬間の体がふっと軽くなったような感じ。そんな軽さ、自由さは、見ることと時間がつながったことで得られるのではないだろうか。

住宅での変わらないことは、特別なものではなくてありふれたものでつくられていることが多い。住宅にとってのありふれたものは、住宅をつくるときにいつも存在していて、手を加えることができるようなもので、住人の持ち物や建物のかたち、空間の大きさ、日射しなどたくさんある。それらを普段くりかえし見たり、触れたりすることで、わたしたちの身のまわりの日常的なこと、変わらないことはできている。

「特別でなく、極端でもない、何でもないオーデインアリーな事物」が住宅をつくるうえで大切であると本書にあるが、ありふれたものはひとつながりの時間を見るうえで欠かせない。たとえば思ってもみないほど部屋の奥まで伸びた日射しにふと気づき、それをいいなと思えたとき、人は時間のうつりかわりを目にしたと思える。こう思えるのは「太陽は徐々にのぼって南中し、徐々に沈んでいく」という、今までも今からも変わらないことをくりかえし経験しているからといえる。そしてなによりも日射しの見えかたは、それを内部に取り入れる窓や庇、受け止める床や壁のつくりかたに応じて変わってくる。

だから「今まで」と「今」、そして「これから」の区別がはっきりしていないひとつながりの時間とは、時計で目にすることができる均質に永遠に流れていく時間とは違って、建物の見えかたとそれを目にする人との関わりあいのなかで「つくられる」ものと考えられる。本書に「住むことによって生じるさまざまなものの空間に、時間に関する触手を持つことで、より自由度の高い環境をつくりだせればと考える」とあるが、著者はそのことを実践されてきたのではないかと思う。

住宅によって、「今まで」経験してきた変わらないことを保ちながら、それを変えて見せ「今」をつくり、「これから」につなげる。それは建築という物質を、人が生きてきた、生きていく世界にむすびつけていくことなのではないか。

本書を通して最も共感したことはそのことであった。建築の思考と実践、それらを同時に伝えてくれる1冊である。

INFORMATION

TIT建築設計教育研究会会則

[第1条] 名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する。

[第2条] 目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。

[第3条] 事業内容

本会は次の事業を行う。

①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業

[第4条] 会員

本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。

[第5条] 会費

本会の会員の会費は法人会員は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は1年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認)個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員=第8回総会にて承認)

[第6条] 役員

本会は次の役員を置く。

運営委員 9名

(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

[第7条] 総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

[第8条] 会計

本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

[第9条] 存続期間

本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。

(この項 削除=第5回総会にて承認)

[第10条] 会則

本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決議を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。(以上)

〈細則〉

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

[第1条] 役員

本会の役員は構成は下記による。

運営委員 9名

(学外運営委員6名、学内運営委員3名)

運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

[第2条] 総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教員(教授・助教授)出席による集会とする。

役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。

(以上)

2002年度役員(02.9.30現在)

顧問:中島隆(1951卒)鹿島学術振興財団専務理事・鹿島建設(株)顧問、林昌二(1953卒)(株)日建設計名誉顧問、戸尾任宏(1954卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役/運営委員長:山下和正(1959卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役所長、副委員長:三栖邦博(1963卒)(株)日建設計取締役社長/監査役:藤江澄夫(1960卒)清水地所(株)代表取締役副社長/運営委員:岡部富雄(1964卒)(株)構造計画研究所建築技術本部常務取締役本部長、服部紀和(1964卒)(株)竹中工務店常務取締役、仙田満(1964卒)東京工業大学大学院教授、坂本一成(1966卒)東京工業大学大学院教授、八木幸二(1969卒)東京工業大学大学院教授

2002年度法人会員(02.9.30現在)

(社名/本会への代表)

大林組/杉山直、鹿島建設/矢口彰、清水建設/日置滋、大成建設/光岡宏、竹中工務店/服部紀和、日建設計/三栖邦博、松田平田/和田信昭、IAO竹田設計/竹田秀道、金箱構造設計事務所/金箱温春、環境デザイン研究所/仙田順子、久米設計/伊平則夫、建築研究所アーキヴィジョン/戸尾任宏、建築資料研究社・日建学院/井澤真悟、構造計画研究所/岡部富雄、清田育男計画設計工房/清田育男、日本設計/高橋徹、山田守建築事務所/山田達郎、レーモンド設計事務所/森山興真、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、伊達計画文化研究所/伊達美徳、山下設計/井上雄治

2002年度個人会員(02.9.30現在)

(氏名(卒年))

田口武一(S10)/東久世秀禧(S10)/黒田正巳(S13)/吉江憲吉(S14)/高田清(S16)/石田繁之介(S16)/堯天義久(S19)/栗原勝(S22)/石野治(S23)/池田忠彦(S25)/遠藤正明(S25)/中島隆(S26)/佐久田昌昭(S27)/濱田昭二(S27)/中村晃(S28)/林昌二(S28)/半澤重信(S28)/田中正美(S29)/戸尾任宏(S29)/吉井一夫(S29)/高木賢(S30)/田口好孝(S30)/城間勇吉(S31)/渋谷実(S32)/中神弘(S32)/松下謹三(S32)/青柳司(S33)/太田雅三(S33)/佃隆介(S33)/増田一真(S33)/清水康久(S34)/富野壽(S34)/村口昌之(S34)/山下和正(S34)/大熊喜昌(S35)/永井雄一(S35)/野村邦夫(S35)/藤江澄夫(S35)/星野利一(S35)/松野公一(S35)/森孝夫(S35)/佐々木雄二(S36)/鈴木歌治郎(S37)/武岡茂生(S37)/最上達雄(S37)/三栖邦博(S38)/有田

桂吉(S39)/岡部富雄(S39)/片野毅(S39)/仙田満(S39)/只野康夫(S39)/西野敬史(S39)/野口三郎(S39)/服部紀和(S39)/平川長(S39)/満田恒男(S39)/森山興真(S39)/味生威(S40)/野崎英彦(S40)/森下清子(S40)/守谷一彦(S40)/岩沢二郎(S41)/坂本一成(S41)/志岐孝之(S41)/鈴木清友(S41)/大嶋顕世(S42)/小西敏正(S42)/光岡宏(S42)/矢口彰(S42)/奥村光男(S43)/西村博道(S43)/花島晃(S43)/細入誠一(S43)/村田靖夫(S43)/和田章(S43)/藍澤宏(S44)/佐藤俊作(S44)/清水弘道(S44)/杉山文正(S44)/田中享二(S44)/牧圭介(S44)/八木幸二(S44)/山口洋一郎(S44)/岡本慶一(S45)/岡本聖司(S45)/鳥羽羽明(S46)/梅干野晃(S46)/山口潤二(S46)/大野隆造(S47)/猪子順(S47)/西尾秀平(S47)/杉原繁樹(S47)/荻谷武郎(S48)/日置滋(S48)/藤岡洋保(S48)/保坂一夫(S48)/森行臣(S48)/尹原基(S48)/有里公徳(S49)/高田典夫(S49)/豊田雪夫(S49)/三橋伸夫(S49)/上山博夫(S50)/河野晴彦(S50)/小林謙一(S50)/清水寧(S50)/土屋隆(S50)/高橋寛(S51)/田中一晴(S51)/宮本宗和(S51)/松永浩一(S51)/木谷靖孫(S52)/前田康徳(S52)/熊谷昌彦(S53M)/浦春彦(S53)/白川裕信(S53)/宮本文人(S53)/飯利昌人(S53)/鈴木敏彦(S54)/常木康弘(S54)/武田直行(S54)/小室清高(S55)/三上貴正(S55)/吉田親史(S55)/伊東龍一(S56)/乾靖(S56)/仲野順一(S56)/宮本昌明(S56)/高橋晶子(S57M)/津金猛(S57M)/酒井星志(S57)/西田達生(S57)/平島信一(S57)/山口勝巳(S57)/安部武雄(S58D)/坂田弘安(S58)/横山裕(S58)/新井貴(S59)/帽田秀樹(S59)/中村安志(S60M)/大佛俊泰(S60)/小田宏正(S60)/加茂紀和子(S60)/所司護(S60)/若松均(S60)/中村芳樹(S61M)/奥山信一(S61)/曾我部昌史(S61)/竹内昌義(S61)/山田泰範(S61)/鈴木達也(S62)/塚本由晴(S62)/鈴木重則(S63)/今井賢治(H1)/栗原正明(H1)/鹿野秀馬(H2)/岩岡竜夫(H2D)/木島千嘉(H3M)/渡邊哲也(H3M)/片庭修(H3)/櫻井康雄(H4)/菅原正則(H5M)/保住秀樹(H5)/藤岡務(H6M)/井澤真悟(H7)/村田淳(H7)/井上寿(H8D)/七田裕(H8M)/菅菜々子(H8)/笠井誉仁(H9)/吉田佳代(H9)/以上171名

運営委員会

第1回運営委員会(2002年6月18日[火])

以下の事項について討議、議決された。

- ①2001年度決算報告。
- ②2001年度事業報告。
- ③2002年度事業計画の検討、承認。
- ④2002年度会費納入状況報告。
- ⑤個人会員の入会状況の報告。

第12回総会

2001年6月18日[火]、東京工業大学百年記念館にて会員38名の参加を得て開催され、以下の事項について報告、意見交換がなされた。

- ①2001年度決算報告。
- ②2001年度事業報告。
- ③2002年度事業計画の検討、承認。
- ④2001年度会費納入状況報告。
- ⑤個人会員の入会状況の報告。
- ⑥大岡山建築賞授賞式。
- ⑦懇親会。

編集委員: 八木幸二/奥山信一/是永美樹[以上幹事]/横山裕/堀田久人/湯浅和博/足立真/井上寿/木下秀郎/中井邦夫/山崎鯛介

学生委員: 松本淳/川合英介/足立拓/黒川智之/鈴木悠子

取材協力: 内山森/斎藤哲也/青柳憲昌/大学院修士課程1年有志

編集協力: デザイン=秋山伸+久世健/翻訳=デイヴィッド・スチュアート

表紙: 卒業設計・修士制作展 2002 [写真: ©TIT 建築設計教育研究会]

発行: TIT 建築設計教育研究会 [2002年12月発行]

(事務局: 東京工業大学理工学研究科建築学専攻 坂本一成研究室)

定価: 800円

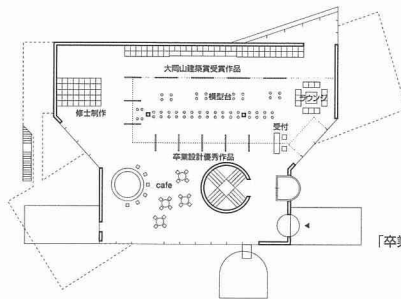
ka024

Autumn/Winter, 2002

design journal

department of architecture and building engineering, Tokyo Institute of Technology

Published by TIT society of architectural design education



「卒業設計・修士制作展2002」設営配置図/百年記念館



Editorial Committee: Koji YAGI, Shinichi OKUYAMA, Miki KORENAGA (editorial secretary),

Yutaka YOKOYAMA, Hisato HOTTA, Kazuhiro YUASA, Makoto ADACHI, Hisashi INOUE, Yoshiro KINOSHITA, Kunio NAKAI, Taisuke YAMAZAKI

Student Editorial Committee: Jun MATSUMOTO, Eisuke KAWAI, Taku ADACHI, Tomoyuki KUROKAWA, Yuko SUZUKI

Reporting: Shin UCHIYAMA, Tetsuya SAITO, Norimasa AOYAGI, and first-year master's student volunteer

Design: Shin AKIYAMA + Ken KUZE / Translation: David STEWART

Office: Sakamoto Lab, Department of Architecture, TIT

Publisher: TIT society of architectural design education (as of 12.02)

Cover: Undergraduate Diploma and Master Design Project Exhibition 2002 (©TIT society of architectural design education)

Price: 800 yen